丹波志 多紀郡 上巻 巻十二

京都府立総合資料館所蔵

特
992
31
12

○北村先生編　丹波誌　一部拾五卷

先生に請ひて二部を淨寫し
京都帝國大學圖書館と京都
府立圖書館に各一部を寄託
す

大正拾四年七月一日

北村龍象先生喜壽會

（北村先生喜壽會結末報告書を添附す）

京都府立総合資料館所蔵

京都府立総合資料館所蔵

京都府立総合資料館所蔵

京都府立総合資料館所蔵

多紀郡記事

郡ハ國ノ南端ニ在リテ東經一百三十五度十四分北緯三十五度零四分東方ハ船井郡ニ北方ハ天田郡ニ南方ハ攝津ノ有馬川邊豊能ノ三郡ニ隣リ西南ハ播磨ノ多加加東兩郡ニ西北ハ氷上郡ニ接シ東西八里十六町南北七里十六町面積二十五方里二十分ヲ有ス　東西ノ距離ハ原山峠ヨリ本荘村ニ至リ南北ハ後川村ヨリ遠方村ニ至ル

地勢高ク山嶽圍リ中央ニ篠山地方差平ナレド猶遙高ヲ抜クヿ二百米突ニ餘ル他ハ山際溪間ノ境塊瘠地ヲ多シトス

山嶽許多アル其ノ中ニ於テ最高ノモノヲ三嶽山

京都府立総合資料館所蔵

トス西ヶ嶽ハ金ヶ嶽ト共ニ北方ニ聳エタリ之レヲ弁セテ畑山ト呼ブ八ヶ嶽ハハ金ヶ嶽ノ東ニ在リ櫃ヶ嶽東北疆ニ三國ヶ嶽ト共ニ聳エ南方ノ彌十郎ヶ嶽蛇蟠トシテ横走シ西方高城山三國ヶ嶽如意ヶ嶽相連ナル西方ノ高仙寺白髮ヶ嶽等并ビ立ヶ西南ニ於テ西光寺山和田寺山アリ西北方ニ金山黒頭峰夏栗山盃ヶ嶽觀音寺山等高峻峰相望ム

川系ニ於テハ篠山川ヲ以テ巨流トス其ノ源ハ船井郡界ナル大芋村ノ三國ヶ嶽ニ發源シ山下ノ大藤村ニ下リ藤坂篠見ノ二川ヲ容レ南流シテ村雲村ノ向井ニ到リ縣守叔井ノ兩川ニ會シ西方ニ折レテ篠山川トナリ辻留地畑奥谷ノ川々ヲ集合シ篠山ノ南方ヲ流レ尾根ハ枕黒岡藤田ノ諸川ヲ合容シ西ニ向フテ更ニ泥川宮田川大山川ヲ合ミ納レ氷上郡ニ入リ佐治川ト澹流シ播磨ノ加古川トナル之レヲ本郡ノ大川ト呼ブ

田松川　後川々　草山川　木津川　小野原川等アリ孰レモ他郡ヘ流出ス

氣候ハ温和ナルヲ常トス冬季ノ積雪平地ニテ四寸強ニ止マリ結霜ハ十月下旬ヲ常トス寒時華氏計ニ十八度暑時九十一度ノ昇降トス夏日朝昏大ニ京ト霧ハ秋冬ニ多ク有リ他郡ニ同シ

道路　縣道六線延長二十餘里　郡道八線十二里

京都府立総合資料館所蔵

里道郡費補助ノモノ　三十一線二十九里

縣道播磨街道　郡ノ東疆天引峠ヨリ福住篠山ヲ經テ播磨ノ加東郡界マデ八里三十町

同　但馬街道　攝津ノ有馬郡界ヒ出ヒ坂ヨリ古市味間大山ヲ經テ氷上郡界鐘ヶ岳マデ四里三十二町

同　園部街道　篠山ヨリ福住ヲ經テ船井郡界原山峠マデ四里

鐵道　福知山線ハ大阪ヨリ起コリ西南有馬郡界ヒ出ヒ坂隧道ヲ過ギ古市驛ニ來リ郡ノ西方ヲ通過シ篠山大山ノ二驛ヲ經テ篠山川ニ沿ヒ順代ノ山間ヨリ氷上郡ヘ出デ福知山ニ至ル　篠山驛トハ

云ヘ其ノ實篠山町ヲ距ル一里ノ西ニアリ

郡ノ稱呼ハ古ノ稱呼ノマヽニテ多紀ノ郡ト曰フ中古ノヽ字ヲ略シ多紀郡ト云ヒシガ近來郡ノ字ヲモ音讀スルヿトハナレリ郡名ハ篠見ノ四十八瀧ヨリ起コリ瀧ノ郡ナリシヲ國名郡名ニ字トナレルヨリ萬葉假名モテ今ノ如ク書クヿトナリシトカヤ

氷上郡ト合併說起コリタルハ大正十年ナリ氷上郡誌ニ出ダス

往古ノ鄉名　草上（クサノカミ）　宗部（ムナカベ）　真継　河内（カウチ）　神田（カンダ）

榛原　餘戸　日置

中古ノ鄉名　右ハ鄉ニ加フルニ　八上　畑　沒々

京都府立総合資料館所蔵

伯部　小野原　味間　波賀　市野　宮田　大山　大野　草山　大芽　村雲　粟井　小野ノ二十三郷トナリ　宗賀ハ曾我部トナル

村數　正保ニハ百四十二　元禄ニハ百三十一

明治ニハ二百二十九町村

高　正保ニハ四萬五千百六十四石七斗七升五合

文久ニハ四萬五千九百五十三石二斗六升六合

明治ニハ四萬五千九百五十三石二斗六升六

合

町村名　明治五年施政ノ便ニ由リ分離合同セシヲ更ニ一町十八村ト定メタリ是レハ二十二年ノ丁ナリ自治制ノ基ヲ開ク端緒トス　町村名

大字名左ノ如シ

篠山町　大字　東新町　西新町　南新町　北新町

乾新町　山内町　河原町　小川町　立町

呉服町　二階町　魚屋町　西町

日置村　大字　上宿村　井上村　八上新村　八上

々村　西庄村　野々垣村　曾地口村　曾地中

村　曾地奥村　宮前村　畑市村　畑井村　北

鳴村　小中村　辻村

八上村　大字　糯ヶ坪村　池上村　小多田村　西

八上村　松木鳴村　八上内村　八上下村　善

左衛門鳴村　奥谷村

福住村　大字　福住村　小野新村　奥谷　箱谷村

京都府立総合資料館所蔵

二ノ坪村　藤ノ木村　安口村　幡路村　本明谷村
川原村　西野々村　下原山村　中原山村　奥
原山村
後川村 大字　後川上村　後川中村　後川下村
後川新田村
大芋村 大字　中村　福井村　小原村　藤坂村
三熊村　小倉村　奥山村　大藤村　市野々村
左金村　宮代村
村雲村 大字　向井村　栃梨村　見田村　井事村
細工所村　塩岡村　草ノ上村　小田中村　小左
村　垂水村　山田村　上篠見村　下篠見村
雲部村 大字　縣寺村　奥縣寺村　東本庄村　西

本庄村　佐貫谷村　泉村　倉谷村　春日江村
畑村 大字　畑宮村　今谷村　火打谷村　奥畑村
九田村　瀬利村　菅村　和田村　般若寺村
大上村　大渕村
城北村 大字　新庄村　野間村　澤田村　澤田嶋
村　大熊村　黒岡村　熊谷村　寺内村　佐倉
村　大谷村　鷲尾村　知足村　藤岡口村　藤
岡奥村
岡野村 大字　野尻村　東濱谷村　西濱谷村　今
福村　大野村　西岡屋村　東岡屋村　有居島
村　風深村　吹上村
南河内村 大字　黒田村　川北村　川北新田村

京都府立総合資料館所蔵

口坂本村　西坂本村　西谷村
北河内村 大字　上坂井村　下坂井村　小坂村
叢竹村　宮田村　寺坂村　垣屋村　高坂村
倉木村　坂本村　栗栖村
草山村 大字　本郷村　川坂村　遠方村　桒原村
大山村 大字　長安寺村　町田村　一印谷村　高
倉村　石住村　追入村　北野村　大山宮村
大山新村　大山上村　大山下村　德永村　東
河内村　明野村
味間村 大字　味間北村　味間南村　味間奥村
味間新田村　吹新村　綱掛村　杉村　東古佐
村　西古佐村　西吹村　中野村　大澤村　大

澤新田村　東吹村
城南村 大字　真南條上村　真南條中村　真南條
下村　小枕村　栗栖野村　野中村　北村　谷
山村　岩塙村　字土村
古市村 大字　古市村　住山村　油井村　草野村
古森村　當野村　波賀野村　見内村　矢代新
村　南矢代村　初田村　大餌村
今田村 大字　今田村　今田新田村　上小野原村
下野原村　辰己村　四斗谷村　休場村　上立
杭村　下立杭村　東庄村　釜屋村　萩野村
本庄村　黒石村　富良田新田村　市原村　蘆
田新田村　間新田村　水津村

京都府立総合資料館所蔵

合大字二百十三　縄呼ノ法何村大字何村トス他方ニ類少シ蓋シ舊猶保存ノ爲ニスル所僅ナリナガラ舊法改革ニ不人氣ナルヲ以テ當路者ノ注意ヲ掛ヒシ所

戸數　一萬三百六十二　明治二十九年　九千五百七十一戸　三十八年　九千七百八戸　四十三年　九千七百五十八戸　大正四年　一萬一千餘　大正六年

人口　四萬九千六百五十三　明治二十九年　五萬五百八十二人　三十八年　五萬一千七百九十九人　四十三年　五萬二千一百三十三人　大正四年　五萬七千五百餘　大正六年

土風　農耕樵採ニ衣食スルモノ多ク商賈少シ

古風ニシテ正直廉義

郡衛學校警察法司神宮等ヲ除却スレバ全然維新ノ習慣ヲ守ル

新暦一月ニ注連縄ヲ張リ門松ヲ建ツル迎禮スル祝餅ヲ供スルモノ幾許モ莫シ

舊暦正月ニハ從前ノ禮式ヲ擧ス　日ハク先ノ正月ハ御從所ノ御正月デス我々トホンマノ御正月ヲスルト

端午節ニハ男子アル家々旗槍ナドノ武具ヲ併陳ス　大將旗鍾馗旗門上垣外等ニ翩翻トシテ軒端ノ菖蒲ト掩映スル所宛ミ天保式ナリ外樣斯ノ如ク

京都府立総合資料館所蔵

内様亦然り土焼ノ大將人形附屬品ト相并シテ床ノ間ヲ飾師ル

府縣制施行前風土人情ノ相違セル點ヲ視テ京都府ノ急進區域ニ屬縣セシムルノ不可ヲ認メ兵庫縣下ニ容レラルヽ了トナレリ

男子ノ勞役ニ耐忍ナルハ其ノ百日稼ギニ於テ知ルヲ得ベシ差資賤ヲ有スル者スラ之レニ從事スルヲ憚ラズ粗食弊衣力役身勞シテモ嚢中ヲ煖メ家計ヲ助クルヲ以テ無上ノ樂トシ又無上ノ誇トス一郡ノ富源實ニ是レニ因ルト云フモ不當ナラザル可シ其ノ謂ハユル倉男ノ釀酒業ヲ爲スモノ冬季ニ至レバ得意ノ造酒家ニ雇傭セラルヽ了大凡一百日ヲノ間ニ委托セラルヽ數量ノ酒ヲ釀シ主家ニ滿足ヲ與ヘテ辭シ歸ルモノトス本郡ヲ呼ブニ倉男ノ製造所ヲ以テスルモ浮言ニ非ルナリ獲ル所ノ金額就拾萬圓ニ昇ル　小銀行ノ到ル處之レ有リテ新金ノ數多ナル實ニ之レニ是レ由ル灘便ノ一節

兵庫縣武庫郡灘八郷ヲ始トシテ酒所ノ名ノ附ク所ニ酒場稼ク漸ク輸入セラルベキ季節ト相成申候其ノ稼ク人ハ寒百日ノ暖濃トシテ古來仕來レル丹波多紀郡ノ百日稼ナルヲ聞クニ同郡内ニテモ杜氏ト名ノ附クモノ大頭株約八百人副杜氏ト名ノ附クモノ凡ソ一千五百人　麹師元廻ハリ飯溜ナンドノ下

京都府立総合資料館所蔵

稼約五千人総計七千餘人ト云フ大數ニ達シ冬ニナレバ一村ノ男子擧リテ出デ途ハ女護ノ嶋ト變ズル所モ之アリ候其ノ得ル所ハ杜氏ニテ百圓以五六百圓マデ晩次第下稼ニテ十圓以上五六十圓當節郡内ヘ持歸ル金額ヲ合算スレバ三十五萬圓ニ餘ル同郡雜收入中ノ高位ヲ占メ申候　杜氏ノ中ニテ村會議員タルモノモ之アリ候　伊丹ノ劍菱ヲ造リ出シタリト云フ杜氏ノ家ガニ軒アリテ其レガ其ノ本元ヤ　イヤオレ方ガ本家ニヤト爭ヒ居ル外ハ大抵正宗ニシテモ白鷹ニシテモ白鶴ニシテモ乃至ハ大關モ福娘モソレ〳〵チヤシト傳統アリテ一絲亂レズ老幼相繼承スルノ狀不思議ナル程整然ト致シ居候　斯ク相認メ候私モ其ノ同類ニテ候　春暖ニ相成候時分ニハ歸鄉可致其節ハ後々書餘ノ御話可申上候

十二月廿日（明治四十一年）　姓名

県様

大正三年度

米九萬八千六百十石　此價九十八萬六千〇十圓

麥二萬〇四百六十九石　此價十二萬二千八百十四圓

豆類五萬二千三百五十二石　此價五萬二千三百五十三圓

茶藷類四萬四千〇四十一圓　野菜類一萬七千三百三十九圓　其他一萬四千百三十八圓　柿八萬八千三百三十

京都府立総合資料館所蔵

二石　此價一萬五千百八十四圓　粟三百三十七石　此價五千六百五十五圓　其他四千五百〇八圓　春蠶六百九十五圓　此價二萬八千四百八十圓　夏蠶一千六百六十五石　此價五萬六千五百七十四圓　秋蠶二百七十七石　此價八千四百八十七圓　材木二萬二千四百三十圓　木炭三萬一千五百四十九圓　松茸一萬六千三百二十五圓　其他五萬五千二百九十五圓

煎茶一萬七千九百七十四斤　此價四萬一千三百四十圓　晩茶一萬三千七百〇七斤　此價四千七百九十七圓

工産物

清酒十七萬八千〇二十圓　織物一萬九千一百三十圓　生糸六萬三千百十五圓　煉糸九一萬五千五百四十七圓　陶器五萬二千二百五十圓　藁製品一萬一千九百七十八圓　其他五萬二千二百二十一圓　菓子四萬九千九百二十八圓　醬油二萬〇〇六十四圓　酒造掾所得二萬五千〇〇〇圓

米産十一萬六千餘石　麥三萬八千餘石　明治初年ヨリノ統計年別平均

百日稼ノ持歸ヘル金三萬圓程　二十七八九年比較

養蠶ノ業ハ桑田　南郡船井郡ニ下ル丁半度　生繭年高二千餘貫　繭一千五百餘石　製茶二十一萬六千餘斤　二十九年

官林　七百三十八町九段二畝二十四歩　官有地ノ内神社地二十五町三段八畝二歩

京都府立総合資料館所蔵

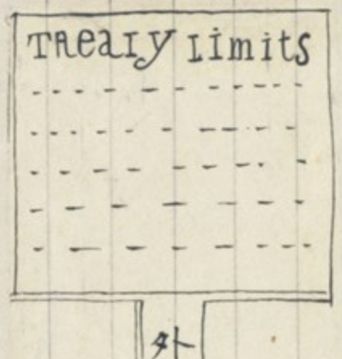
官用地一町二段九畝八歩
官用地ノ宅地二町一段四畝二十一歩
官用地ノ池十町八段五畝三歩
官用地ノ寺院十町七畝二十四歩
民有田五千三百十二町八畝二歩
民有宅地四百十二町三段十九歩
民有原野百二町五段九畝八歩
民有畑六百三十町九段七畝三歩
民有山林二萬千七百三十六町三畝七歩
官用地ノ畑六畝二十四歩
官用地原野七段七畝二十一歩
官用地ノ雑種地十一町七段六畝二歩

悠紀主基ハ近江備中ト共ニ丹波モ之ヲ勸ムルヿ
絡論ニ示スガ如シ本郡ハ寛平ノ時之ヲ行ヘリ
外國人遊歩規程ノ標ハ左ノ所々ニ於テ立テラレ
タリ外國人ノ不自由ナル隔靴搔痒ノ意想フベキ
ナリ内地開放ノ曉ニハ此ノ標ハ紀念トシテ保存

セラルベシ

二十九年記

八上　日置
上宿　篠山
小山　永德
小野原　小坂



神戸ニアル外國人ガ内地ヲ見ントシテ茲ニ至リ名殘リ惜シソーニ物足ラヌヨーニテ悄々トシテ引返スヲ見ルガ憐カベキ心地セリ

外國人遊歩規程　兵庫縣

今日ハ内地開放セラレテ右ノ如キ檢束無シ内外人共ニ欣喜スル所ナリ　四十年書加ヘ

古市ハ篠山ノ東西南ニアリテ播磨往來ノ要驛トシ福住ハ篠山ノ東北ニアリテ亀岡往來ノ要驛トシ追分ハ篠山ノ西方ニアリテ但馬街道ノ要驛ト

京都府立総合資料館所蔵

シ氷上郡栢原ニ至ル ノ路ニ當リ古來合稱シテ三驛ト云フ頗ル盛大ノ市場ナリシモ篠山築城ノ後ハ爲ニ其ノ盛況ヲ奪ハレタリ 古市ハ中ニ就キ舊況ヲ喪ハズシテ商估ノ家多ク取引多額ナリ鐵道開通ノ曉ニハ交叉點ノ停車場トシテ村邑ジテ町トナラン

小茅川 おくの川とも云ふ

少年門あらふる邦もあどむるとりでは稜をそする 藻塩

文政元年十一月十一日主基方丹波國御屏風六帖和歌十八首ノ内

多紀郡櫻山花開行人見之 右少輔正五位下藤原朝臣隆光

さく花のその名よしなふ櫻山ゆきかふ人のたもとらん

雲岡村兩中晨支線早苗 同

やるかもとはたらへす早苗とりしるとそ雲の村

老人杜雲朝の望 同

かしらもそ代よそふる住人て雲をいたくも老人の杜

主基風土記名所 粮井里 室富村 福住山

味間村 油井村 酒井村 駒捲村 雲岡村

天児津 長田村 遊楽里 老人杜 櫻山

富貴村

右ニ示セル名所ノ内ニ長田村アリ天田郡下六人部村ニ長田村アリテ大サダト讀ム大サダニテハ歌情ノ通ゼサルヲ以テ見レバ大嘗會ノ名所歌ノ内長田トアルハ此ノナガタナルベシ左ニ其ノ歌

京都府立総合資料館所蔵

ヲ錄ス 天田郡下六人部ノ分參看スベシ

[illegible] 兼仲

[illegible] 兼光

[illegible] 資忠

鄉名 和名抄 真継 福住村 草上 大芋村 榛原

ハ上村ナルベシ

多紀ノ臣 此ノ姓ハ孝昭天皇ノ皇子天押日子命ニ

肇マル

久下川 本郡ノ巨流 源ヲ福住大芋西村ノ山溪

中陽々ノ泉トス西流シテ篠山街南ヲ過ギ大山村

ヨリ氷上郡久下村ニ至リ佐治川ニ會ス川系本源

ヨリ國界ニ至ルマデ凡八里播州ニ入リ加古川ノ

一支源トナル

陸軍 明治六年大坂鎮臺管下ニ屬シ後鎮臺ヲ改

メ師團司令部トナシ第四師團管下トナリ同廿九

年第十師團管下ニ編入セラレ同三十八年戰後

再第四師團管下ニ屬ス

篠山町 魚屋町西町東新町西新町南新町北新町

山内町

篠山或ハ笹山トモ書ケリ丹波國中第三位ニアル

商業地トス封建時代ニモ亦第三級ニ在ル城下ト

シテ世間ニ知ラレタル所ニシテ郡中ニ於テハ第

一繁昌ノ地トス國ノ西南ニ偏スレトモ郡ノ中央

ニ位置ス東西十五町南北十町篠山川其ノ南ニ流

京都府立総合資料館所蔵

し黒岡川夏ノ中央ヲ流ル地勢平坦高燥ニシテ店舗櫛比シ近傍諸村ノ需要ヲ充タセ町圏亦人口ヲ養フニ足ル小多田々畝ノ東ニ在ル黒田々畝ノ西ニ在ル民庶耕稼ニ勉ム

田二百町二段　畑二十五町四段　宅地十一萬五千六百八十七坪　山林原野五町八段　其ノ地雑種地五町五段ヲ占ム是レ大正四年調査ニ係ル所トス

田畝往々溝洫ヨリ高キヲ以テ夏時ニハ長縄ヲ以テ中間ニ桶ヲ吊ルシニ人溝洫ヲ間テ、相對シ相互縄端ヲ操リ手ヲ齊フシテ一上一下以テ巧ニ堰下ノ水ヲ斟ミ田ニ揚ク其ノ夏畦ニ贏ル（ツク）ヽヤ大ナリ土人コレヲ常トシテ恬然従事ス膏腴ナラザル地ニアリ而モ人口夥多ナルニ米穀ヲ他方ニ仰ガザルハ是レニ惟レ賴ル

戸數一千一百二十七軒　明治二十九年

人數五千二百八十口　同年

一千零六十八軒　同三十八年　五千零十一口　同年

一千一百八十八軒　同四十三年　五千五百九十四口　同年

一千二百三十八軒　大正四年　六千零六十四口　同年

郡役所　警察署　監獄署　治安裁判所支署

郵便電信局　郡公會堂　高等尋常小學校

鳳鳴義塾　國立銀行　私立銀行　同　同金庫

製紙場　製絲場　停車場　一里外

京都府立総合資料館所蔵

里程　神戸十五里　新道十七里十二町　福知山
八里三十三町　亀岡九里三十町　京都十
五里二十八町

直接國税　壹萬八千四百三十四圓餘　大正三年

縣税　七千一百七十一圓餘　大正三年

公園王地山　城北村ノ部ニ出ダス

城迹　町ノ中ニアリ池濠環リ喬木茂リ舊規模存
ス　著者常ニ懷フ城郭ハ武士道ノ倉庫ナリ而
シテ其ノ迹ハ士風ヲシテ當年ヲ想慕セシム故
ニ人々ヲシテ其ノ登臨スル毎ニ感懷ヲ惹起シ
化及スル所浅カラザラシムベシト今此ノ所ニ
臨ミ吾ガ心ヲ得タルヲ喜ブ況テヤ池邊ノ櫻ハ

今上天皇即位紀念トシテ植栽シタルモノ以
テ　皇室尊崇ノ念ヲ起コサシメ池中ノ蓮ハ夏
時清涼ノ情ヲ看者ニ與ヘシム可キニ於テオヤ

青山神社　本地　始封青山氏ノ祖忠俊ヲ祭ル

明治十五年建設　再建大正四年三月起工シ同
五年四月成ル　費金壹萬餘圓　祭禮毎年四月
十五日忠俊ノ奉公盡忠ハ青山家ノ記事中ニア
リ

忠誠ノ碑文

明治二十五年十有一月　詔曰故正五位下子爵
青山忠誠志深忠愛躬行勤倹捐資育才致力國家
洵爲華族亀鑑因追贈正四位以表章之於是舊藩

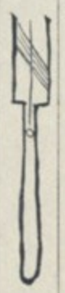
京都府立総合資料館所蔵

士民放抃奔走相率祭薦以申嚮慕之誠嗚呼上辱
聖主之褒寵下饗衆庶之追慕君可以瞑矣君諱
忠誠幼字鋪之丞篠山藩主從四位侍從兼下野守
諱忠良之季子其系出自南朝忠臣大納言師賢師
賢孫師重從尹良親王於上野居青山鄉因氏焉師
重殉節于信濃其子忠治潛匿三河屬德川氏部下
七世忠成以功始侯至忠朝時篠山五萬石冒孫忠
裕加封一萬石侍從即其子也侍從奔子忠敏襲封
明治中興納版籍列華族無子君承其後叙從五位
任陸軍步兵少尉授子爵後陞爲中尉二十年七月
廿六日病卒于東京赤坂之邸先一日特進正五位
距生安政六年二月十五日春秋二十有九葬于品

川東海寺謚曰隆德夫人土屋氏無子以姪忠允爲
嗣君爲人英邁爲好問學從先考遊以躬行實踐自
期一日慨然曰吾以祖宗之蔭有爵有祿恩澤不圖
報效可乎因入陸軍幼年校尋入士官校黽勉奔業
遂爲武官平生自持勤儉衣不用帛食不重味嘗謂
華族者　皇室之藩屏宜務成育人才以佐國家之
用建費舍於篠山使舊藩子弟就學遊其俊秀給資
遊東京又創懷舊會使吉凶相助患難相救不失舊
誼他賑施窮氓救恤災厄不可勝計嗚呼生享榮爵
寵祿厚自奉養不以國家事經心視舊藩士民不異
路人者往々而是如君可謂不負　聖詔所褒而其
士民所以追思哀慕如喪考妣久而不能諼者良由

京都府立総合資料館所蔵

此也頃者忠允君建碑於篠山城址青山祠側使稽
臣大野肅章來請予文曰因叙其梗槩而繫之以銘
々曰
忠烈之亂 乘德繄紀 有文有武
克儉克勤 干城自誓 匪躬蹇々
指資興學 造士恤民 褒賜有典
榮垂後昆 懿矣龜鑑 勒在貞珉
東京 芳野世經 撰
西京 辻 貞茂 書
忠魂碑 天主臺ニアリ 大正五年四月建設 元
帥陸軍大將子爵河村景明ノ書
監物橋 南新所ヨリ城南村ノ北村ヘ通ズル所ニ
架スル篠山川ノ一大橋ニシテ長サ四十一間アリ
傳ニ曰ハク天正ノ頃澁谷監物ガ其ノ子ナル岡屋
城主氏秀ノ所ヘ通フ爲ニ作ルモノト
デカンシヨ節ニ 夏ハ涼シキ監物河原ホタル
飛ブナリタマグレデカンシヨ〳〵
洋戎亭ハ京橋ニアリタリ此ノアタリ一帶螢火影
シ風ニ吹カレ人家ニ入ル
螢籠乃屋を振ふ戸口の邪 古人の句
篠山鍛工利重ハ出羽守利重ノ子ニテ父子同名ナ
リ



左棟ナリ

大火 文化四年丁卯 六分燒失
地震 元治元年地裂ケ 西國筋ヨリ來ル

京都府立総合資料館所蔵

領主治革畧史　郡中ニ日置莊羽柴寶莊神田莊等ノ私領地遺跡アリ戰國ノ時ニハ波多野經基（日置村ノ部参看）八上ニ居リ子秀範與谷ニ城キテ居住シ足利氏ニ至リ守護ヨレニ居リシモ政令行ハレザルヲ以テ波多野氏代ハリ治シ屋形號ヲ以テ政令ヲ鋪キ郎ヲ京都ニ置キ伊勢武衛六角一色等ノ如ク將軍ノ重臣タリ其ノ子秀經朝路山ニ城キ以テ山陰ヲ根塞シテ移住シ之ヲ八上高城ト呼ブ自稱シテ丹波家トシ配下ヲ丹波衆トス勢威近畿ニ振フ之ヲ大永年間ノフトス植通ヲ經テ秀治ニ至リ織田氏ニ亡ボサレ城地明智氏ニ歸シ亡ビテ豊臣氏ニ歸シ其ノ臣前田德善院法印封ゼサレテ城主トナリ子利宗ニ傳フ（茂勝ト宣勝ニモ作ル）又ノ封土五萬石ヲ襲領セシガ慶長十三年狂ヲ病シ没收セラル其ノ徽行シテ近江ヲ徘徊シ民家ヲ狼藉シタルニ由リ投獄セラレタルヲ以テナリ

篠山築城

德川初代將軍業已ニ天下ノ大權ヲ掌握シ創業ノ事ハ既往トナリ守成ノ事ハ日夜ニ講究セラレ北ハ越前ヨリ近江ニ尾張ニ伊勢ニ紀伊ニ涉リテ親藩譜代臣ト無二ノ近屬藩侯ヲ以テ天下ノ咽喉ヲ扼守セシメントノ心算設計略〻成リ已ニ封ゼラレタルアリ來封ゼラレザルアリ

慶長十三年ノ秋藤堂高虎ヲ召シ曰ハク丹波篠山

京都府立総合資料館所蔵

ハ山陰ノ諸國ヲ鎮ムベキ地ナレバ勢奉行トナリ
築城ノ工ニ當レト蓋高虎ニ此ノ大命アリタル理
ハ德川家ノ使番トシテ丹衣武者トシテ丹波ニ往
來シタル壕數モ少カラズ地理ニモ達シ且又算勘
ニモ勝レ去ル一年江戸城ニ三ノ丸ノ經營ヲ命セ
ラレ其ノ繩張ノ將軍ノ意ニ協ヒタル故トブ聞ヲ
ヒシ高虎ハ大阪城ノ天守ヲサヘ設計シ其他諸家
ノ賴ニ應ジ繩張目論見其ノ數實ニ少カラズ是ニ
於テ直ニ將軍ノ命ヲ奉ジ南丹築城ニ從事ス是
レヨリ先ニハ上高城ノ亡ビタルヤ將軍ハ早ク松
平康重ニ命ジテ良地ヲ南丹ニ相セシム康重當時
高城山下ニ居ル命ヲ承ケ郡中ヲ巡省シ篠山ヲ地

山花ノ山ノ三所（花ノ岡村ノ山ハ隣地ヲ以テ其ノ候補地ト
シ地圖ヲ上ル康重ハ常陸笠間城主ニシテ封ヲ移
サレ此ノ地ニアリタルナリ將軍地圖ヲ熟視シ条
ニ築城ノ令ヲ下ス

添奉行　藤堂佐渡守高虎
奉行　松平大隅守重勝
同　玉蟲對馬守勝氏
繩張　藤堂家來渡邊勘兵衛吉光
目付　石川八左衛門
同　内藤金右衛門
石工　近江國　筑後　三河　駿河之者共

丹波丹後播磨美作備前備中安藝紀伊阿波讃岐伊

京都府立総合資料館所蔵

豫土佐ヨリ人夫ヲ出ダサレシ人夫八萬ヲ八百ニ分ケ百人ヲ一組トシ一組毎ニ一旗ヲ立テ篠山ノ北ニ割塙今ノ呉服町裏ニ普請場ヲ設ケ諸大名各自其所ニ假小屋ヲ置キ工事ニ從事ス

地均始　慶長十四年三月七日

根切始　同　六月二十日

根石始　同　七月九日

城郭成　同　十月〃

此ノ所ハ黒岡澤田野中等ノ小村アリ豪族篠山利左衛門ナルモノ之レニ居レリ當時小竹生ヒ茂リタル小丘ナルヲ以テ利左衛門先世ヨリ家ヲ以テ家名トシタルナリト云フ先世利左衛門ハ天正七年五月氷上郡八幡山下ノ戰氷上郡柏原ノ郡參看ニ死シ其ノ子利左衛門ハ德川氏ニ召シ出サレテ恤典ニ浴ス

天守臺アリテ天守閣無シ本丸二、丸三、丸具ハリ三、丸ニ三個ノ馬出シアリ

城主邸ハ二、丸ニアリ大書院小書院廣間アリ奥向十數間アリ三、丸ニハ公廨倉庫及ビ上士ノ家宅アリ是等ノ家宅ハ尾葺アリ萱葺アリ

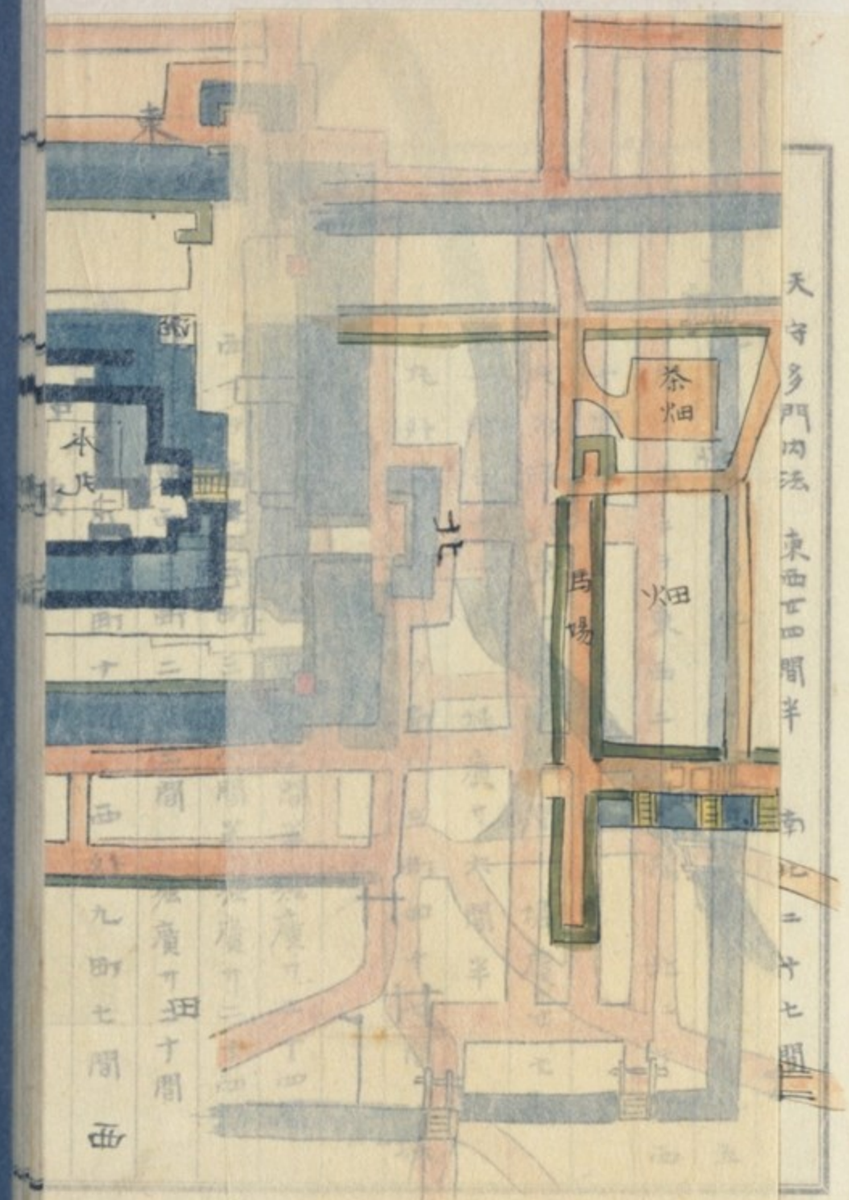
城外住居ノ家宅ハ茅屋竹簀天井又ハ無天井ノ萱屋根ニテ根太板ニ筵ヲ敷キタリ板天井又ハ疊ヲ敷ク等ハ近世ノ事ナリ足輕ハ長屋住居ナリ

夫レ平氏ノ一ノ谷ニ城キ楠氏ガ千劍破ニ城キテ

京都府立総合資料館所蔵

ヨリ國内到ル處ニ高樓粉堞ヲ見ル而シテ其ノ堅固ナルハ大坂城ニ及ブ無シ本城ノ如キ其ノ一小部分ニ過ギズト雖モ巧妙ノ一段ニ至リテハ專門家ヲシテ感賞セシメタリト云フ　城上ニ水ノ手無キヲ闕事トセシニ岩石ヲ穿チ之ヲ深底ヨリ得テ用度全ク具ハレリトゾ　地ハ八上ノ西北ニ位シ平曠四通ノ地トシテ商賈招カズシテ集マリ行旅期セズシテ至リ頗ニ一市邑ヲ形造ル八上高城ノ樓櫓門階ハ運バレテ此ノ城トナリ剩ヘ伏見城ノ遺材ヲサヘ車載馬負シテ此所ニ輸サレテ粧飾トナリ波々伯部廢タレテ篠山起コル　八上起コリ八上廢タレ史家此ノ擧ヲ贊シテ曰ハク八上ノ以テ山陰ヲ拘束スルニ足ラザルヲ以テナリト軍畧上ヨリ之ヲ視レバ八上山郭コソ山陰道ノ重鎮ナレ　何トナレバ平時城中ニ安居スベク敵ニシテ近ク來ラン乎之ヲ平野ニ邀ヘテ戰フベク之ヲ城下ニ引キテ伏鬬スベケレバナリ何ニゾ特地ニ攻メ易キノ地ニ城キテ敵ニ便セン蓋シコノ移城ノ擧タル一ハ以テ亂時ニ供ヘ一ハ以テ富國ノ基ヲ建テ人民安居集合ノ區トナセシニ非ルヲ知ランヤ八上ニ比スレバ市街ヲ開克シ得ベケレバナリ貨物ヲ集散シ易ケレバナリ士氏ヲシテ安居セシムベケレバナリ

京都府立総合資料館所蔵

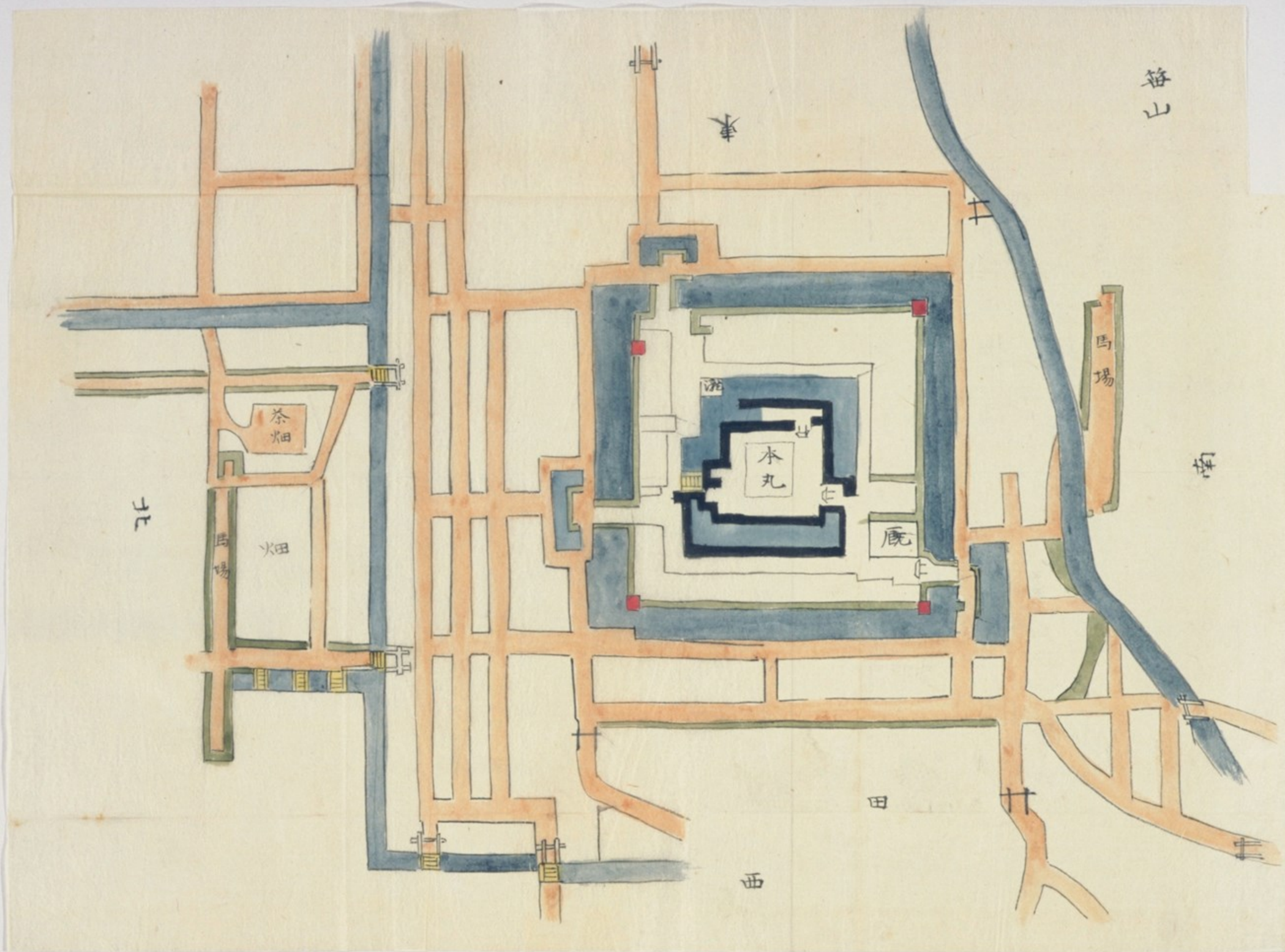


京都府立総合資料館所蔵

慶長十三年マデハ前田主膳正コノ地ニ居レリトノ説アリ

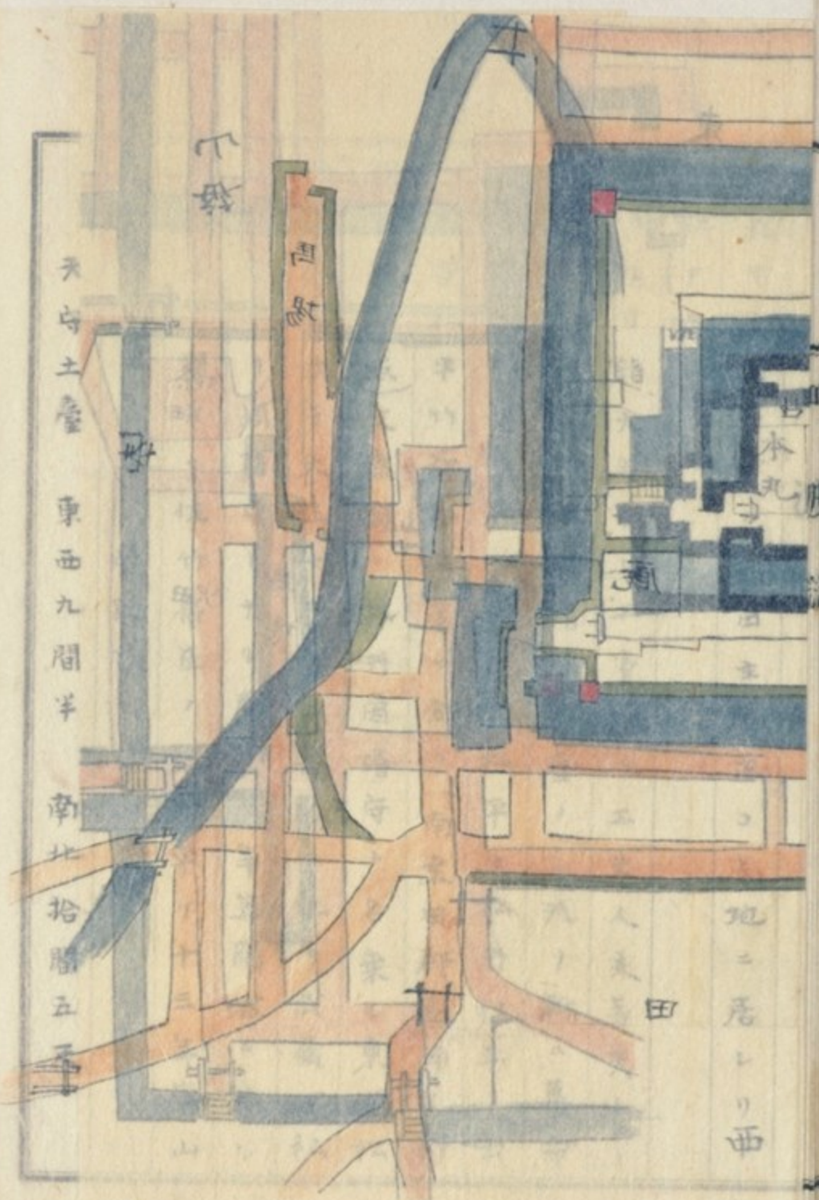
十月五日諸大名及ビ工事役人工夫人夫等夫レ〳〵歸國シ歸村シ松平周防守康重ノミ殘リ新ニ幕命ニ由リ入城式ヲ行フ康重ノ松平ハ松井松平ト云ヒ形原松平竹谷松平等ニ分ツ（南葉田郡亀岡ノ部松平家參照）又康親ハ松井周防守ト名乗ル東條松平氏ノ家臣ナリ天正十二年二萬石ノ地ヲ武藏ノ私市ニ賜ハリ周防守トナル慶長六年笠間城ニ移ル三萬石ヲ賜ハリ佐竹舊臣ノ乱ヲ平ケ十三年篠山城主トナル　其ノ受取帳ニ曰ハク

天守土臺　東西九間半　南北拾間五尺



城主トナル　其ノ受取帳ニ曰ハク
天守土臺　東西九間半　南北拾間五尺

京都府立総合資料館所蔵



天守多門内法 東西廿四間半 南北二十七間

本丸 東ニテ南北五十一間 西ニテ南北五十間 南ニテ東西二十七間 北ニテ東西五十間半

二ノ丸外法 東一町廿九間 堀廣サ廿七間 西一町三十一間 堀廣サ六間半

三ノ丸外法 東ニテ南北三町四十七間 堀廣サ二十四間

南ニテ東西三町三十六間半 堀廣サ二十四間

西ニテ南北三町三十六間半 堀廣サ二十四間

北ニテ東西三町二十三間 堀廣サ二十間

總構 東外六町十間 西外九町七間

京都府立総合資料館所蔵

南外九町六間　北外六町四十間

同十九年大阪冬陣起コル軍役五百人ヲ出ダス元和元年夏陣起コル流言アリ丹波浮浪ノ徒黨ヲ結ビ大坂城ニ通ジ事ヲ揚ク可シト關東ヨリノ命アリ康重ヲシテ兵ヲ率ヒ亀山城ニ移リ遥ニ福知山ニ到ルマデノ地方ヲ鎮撫セシム康重即時任所ヲ來往鎮撫ス群不逞ノ徒忽チニ解散ス元和二年松平丹波守來リ替ハル四年本莊城主村上周防守義明罪セラル此ノ地ニ居ス康重爾來リ之ヲ保管ス蓋シ義明ハ不明ニシテ群下爭論ノ事絶エザルヲ以テ領地ヲ没收セラレ禁錮ニ處セラレタルナリ同五年岸和田ニ移リ松平信吉上野高崎ヨリ來リ代ハル信吉ハ櫻井松平氏ニシテ奥次郎忠吉ガ子ナリ伊豆守信一ノ養子トナル信一ハ德川長親ノ孫彦四郎利長ノ子藤井ノ城ニ居テ藤井ノ松平ト云フ信一ハ勘四郎トカヒシ少年ヨリ勇名アリ毎戰切無キハナシ世呼ンデ藤井鬼武者トス關東ニ遷ルニ及ビ下総布川ノ地ヲ賜ヒ五千石關ヶ原ノ役ニハ同地ヲ守リ佐竹氏ニ備フ慶長六年土浦城ヲ賜ヒ三萬五千石伊豆守ト稱ス佐竹ノ出羽ニ遷ル信一水戸城ヲ守ル九年四位侍ニ進ム同輩比ナシ世以テ榮トス信一女ヲ以テ信吉ニ配シテ養子トス信吉元和三年高崎ニ移リ五萬石同年笠山ニ遷リ伊豆守トナル今年卒ス信一ハ慶長十四年隱居寛永

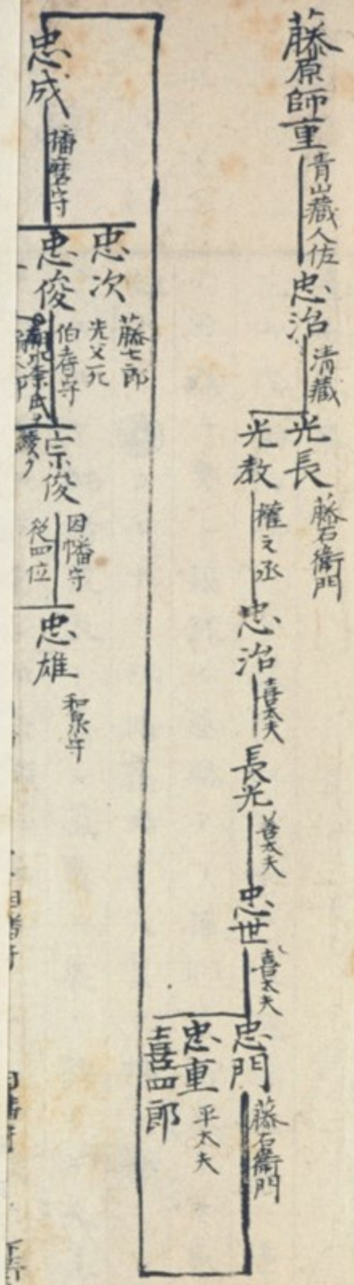
京都府立総合資料館所蔵

元年辛ス年八十六
高五萬石ニ封セラル同六年庚申八月朔日卒ス年
四十二光照院殿雲譽龍圓恕澤大居士ト謚ス子山
城守忠國嗣グ忠國小ウヨリ智慮アリ政道ニ敏シ
入部シテ道路街衢隄防ニカヲ用イ人民ノ懷服ス
ル所トナル其ノ幼ナルヤ秀忠將軍ノ前ニ元服シ
諱ノ一字ヲ賜リタルナリ兼ネテ福知山城ヲモ守
ラシム爭伊賀守モ亦同將軍ノ前ニ元服シ亦諱字
ノ恩賜アリ（龜山ノ邨看セ）邨慶安二年松平若狭守康信居
守ノ命ヲ受ケ高槻城ヨリ來リ一萬四千石ヲ增サ
ト五萬石ヲ領ス二十一年ヲ經テ寛文九年九月二
十八日隱居シ別峰ト稱シ薙髮ス天和二年六月十

三日江戸ニ卒ス年八十三岡屋村光忠寺ニ歸葬ス
大安院殿德譽道培別峰大居士ト謚號ス嫡男駿河
守典信嗣ギ主膳正信利紀伊守信庸紀伊守信岑相
續ギ城主タリ（龜岡町ノ部ニ寛延元年青山因幡守忠
朝龜山ヨリ來リ信岑往キテ龜山ニ移ル爾來青山
氏領地六萬石内四萬四千五百二十九石ハ城下ニ
アリテ只郡ノ東境ナル西野々安口奥原山中原山
下原山ノ五村龜山領タルノミ他藩ノ領地ノ往々
犬牙錯雜シテ動モスレバ紛糾ヲ呼ブノ煩無ク甲政
乙治區々差等ノ苦無ク秩序整然一令ノ下ニ數千
民衆ヲ統治シ得ルコト大藩國主ノ所施ニ彷彿タ
リ士人ノ經過スルアレバ平民ノ一齊ニ行禮スル

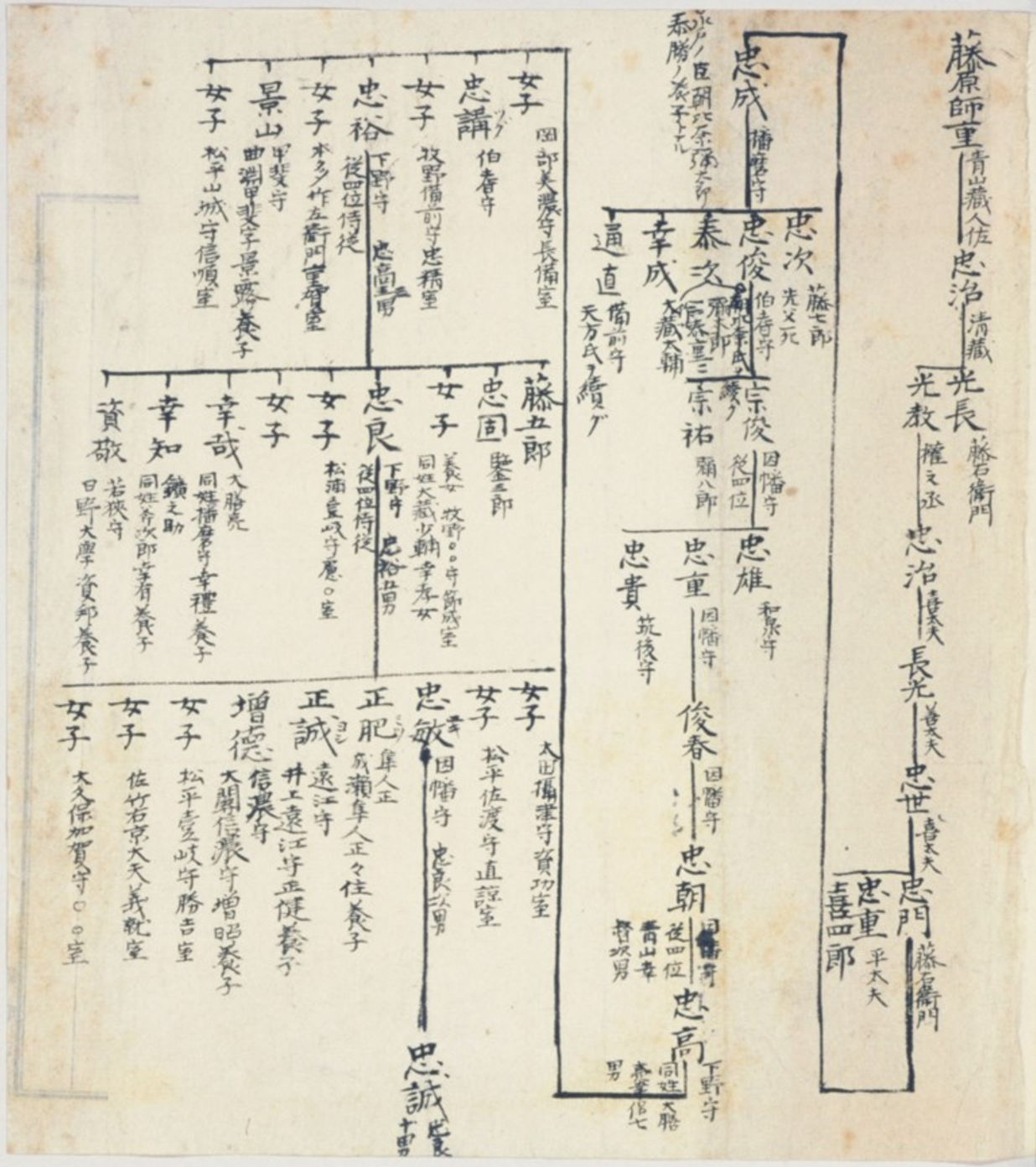
京都府立総合資料館所蔵

が如キ又他小藩ノ爲シ能ハザル所（後文参照）實ニ比稀ナルモノトス明治天皇賤祚ノ際即慶應三年十二月王政復古ニ際シテ藩主忠敏ハ其ノ聖意ヲ奉シミ明治二年版圖ヲ奉還スルノ願書ヲ出ダシ六月許可ト共ニ篠山藩トナリ多紀郡ノ施治ヲ命ゼラレ同四年七月十四日廢藩置縣ノ令下リテ篠山縣トナリ同十一月廢縣トナリ丹後豐岡縣ニ併セラレ九年八月同縣廢セラレテ此ノ地ハ兵庫縣ニ入ル



京都府立総合資料館所蔵

明治二年版圖ヲ奉還スルノ願書ヲ出ダシ六月許可ト共ニ篠山藩トナリ多紀郡ノ施治ヲ命ゼラレ同四年七月十四日廢藩置縣ノ令下リテ篠山縣トナリ同十一月廢縣トナリ丹後豐岡縣ニ併セラレ九年八月同縣廢セラレテ此ノ地ハ兵庫縣ニ入ル



京都府立総合資料館所蔵

青山家史

花山院師信卿ノ子藤原師賢卿ハ後醍醐天皇ニ事ヘ密謀ニ参シ銀銭ノ恩賜アリ孫師資卿采リテ家紋トス◉コレナリ北條高時ガ天皇ヲ捕ヘ奉ラントスルヤ師賢袞衣ヲ着シ鳳輦ニ乗リ詐リテ天皇ト稱シ叡山ニ登ル賊兵捕ヘ奉ラントシテ来リ攻ム天皇竊ニ脱シ笠置山ニ幸ス叡山ノ僧兵其ノ情ヲ知リ散去ス師賢乃チ行在所ニ追ヒ赴ケバ賊兵群至ス行在ノ軍敗レ天皇ノ所在ヲ失ヒ徬徨尋索スルノ際遂ニ賊兵ニ捕囚セラレ下野國ニ押送シ千葉貞胤ノ邸ニ幽セラル而シテ反正ノ忠志終始變ハラス元弘二年志ヲ齎シ幽死ス

京都府立総合資料館所蔵

おとうれ　君ちとぬけの　君ちとぬけの　君成　加藤浪

天皇復辟シ玉フヤ敕使ヲシテ墓ニ就キ正一位大
政大臣ヲ贈リ文貞ノ諡號ヲ賜フ然ルニ一家離散
シテ其ノ所在ヲ知リ得ズ天皇宸襟安カラザリシ
ニ鄉ノ冢師重吉野ノ行在所ニ詣リ亦天皇ニ近侍
スル又出デテ尹良親王ヲ奉ジ上野國ニ徒リ我妻郡
青山鄉ニ居ラ青山藏人佐ト稱ス戰徒ノ來攻スル
所トナリ防戰利アラズ追擊セラレ浪合ニ於テ親
王ニ殉死ス一堆ノ土饅頭空ク青山塚ノ名ヲ殘シ
遺族ヲ擧ゲテ四散シタルヲ哀レナリ其ノ近江ニ
在ル青山藤右衛門光長參河ニ來リ新田義貞ノ遺
族松平太郎左衛門泰親ヲ尋ネ之ニ臣事ス冢權之
丞光敬ハ世良田和泉守信光ニ事フ泰親ハ德川將
軍家康八世ノ祖ニシテ信光ハ五代ノ祖ナリ光敬
ノ子喜太夫忠治ハ參州伊田野ノ戰ニ死シテ忠節
ヲ旌シ其ノ子善太夫長光ハ世良田出雲守長親ニ
事フ長親ハ家康ノ曾祖父ナリ其ノ松平ト謂ヒ世
良田ト稱スルハ皆德川家ノ前氏ナリ長光ノ子喜
太夫忠世ハ家康ノ祖父岡崎城主清康ニ事フ忠世
ノ子忠門光長ノ名ヲ襲ギ藤右衛門ト稱シ家康ノ
父參河守廣忠ニ事ヘ以テ家康ニ至ル永祿五年一
向宗ノ亂起コルヤ德川氏ノ世臣其ノ宗旨ニ係カ
ルモノ往々之ニ與ス忠門ハ弟半太夫喜四郎等ヲ
勵マセテ忠戰シ勲績ヲ建テ賞賜ヲ得タリ元亀二

京都府立総合資料館所蔵

年甲斐國主武田信玄其ノ鋒ヲ南下シ足助口ヨリ
攻來ル忠門命ヲ受ケテ岩津ニ出陣シ長柵ヲ百々
村ニ作リ敵ノ鋭鋒ヲ挫カントシテ能ハズ奮鬪苦
戰力屈シテ死ス臣隷ノ損傷太多シ
忠成ハ忠門ノ子亦藤右衛門ヲ襲名ス幼名ハ藤四
郎家康ニ岡崎ニ事ヘ祿二百石ヲ給セラレ寄騎二
十人ヲ附屬セラレ又二十五騎ニ增ス之ヲ久能衆
ト呼ブ寄騎ハ與カナリ亀岡藩ノ部ヲ參看セヨ二百石ノ小臣ニシテ
二十五騎ニ長シタルハ如何計リノ榮譽ニヤアリ
ケン時ニ天正十五年ナリ德川氏ノ關東ニ遷ルニ
隨ヒ相模國東郡數村五千石ノ地ヲ給セラレ鐵砲
組與力二十騎足輕百人ノ長トナリ二代將軍秀忠

幼時ノ傅トナリ常ニ左右ニ侍シ上洛スルニモ供
奉負トナリ輔導ニ力ヲ竭ス文祿中命ヲ受ケ内藤
正成ト江戸ノ庶政ヲ布ク當時江戸ノ地タルヤ荒
涼蕭條且亂雜ノ餘燼ノ秋ニ人同心共カシテ新
附ノ民臣ヲ撫循シ其ノ堵ニ安ンゼシメタリ官位
叙任ノ令出ヅルヤ從五位下常陸介トナリ本多佐
渡守正信内藤修理亮清成ト三名連署シ政事上ノ
責任ヲ負ヒ後世老中ノ模範ヲ垂レタリ家康ノ征
夷大將軍拜任ハ實ニ後陽成天皇ノ慶長八年癸卯
二月十二日ニ在リ而シテ其ノ三月二十七日ニ於
テ掟書七ケ條ヲ制シ高札トシテ關東鄕中ニ建ツ
是レヅ德川家三百施政ノ大法與ニシテ根本律法

京都府立総合資料館所蔵

ナリ其ノ文ニ云ハク

定

一 御欽所并ニ私欽万姓ニ事ニ代友欽ニ
洲多あるよ依て訴を立退き候と付而
いたらい其ニよりあ庵かるる猥る帰
付べうらざる事

一 年貢米未進有ニ者階御ニ表を以て書
面の行命ニ出入今動ニあ庵ニ迫何
方ニ有ると也居住ニ べき事

一 地所ニ敷を申ニ有る御中を立退べ
き筋侍て之を申さなくして むべと
地代ニ月あを以て中ニ停止る

一 免租ニ付近所ニ永を以て相計ル
付ニ貢ニ下ニ敷ニ事ニ月あを
出事ニ異ニ月あるる

一 無多月あるる事ニ中ニ成ニ停止る
但人質を取られ共
不及ニ死ニ以市代友欽ニ事ニ
以ニ再ニ詰ニ者ニ付て乃上
事月あを以て
移ル可有ニ成事

一 御代友欽ニ成ニ於者ニ分ニ庵ニ目
あを以て
事

一 ヲ踏むべと 移ル停止る仮令

京都府立総合資料館所蔵

科あらしむ榎原主水正に行命對答ス

上ヲ分事

右修ゝ依

仰旨述べ件

慶長八年三月二十七日　内藤修理亮

青山常陸介

関ヶ原大戦役ニ大番頭ヲ以テ大番士ノ指揮官トナリ酒井永井ノ諸先輩ト本陣ノ右備ニ在リ亂平ギ百人組頭トナリ播磨守ト稱ス上総下総ニ於テ二萬五千石ノ封侯トナリ六年ト云フ關東総奉行ヲ兼掌シ施政上臨機ノ處分悉ク時世人情ニ適應シタリ何ノ不幸ゾ十一年遠江國今泉ニ配遷セラレテ

シヌ嗚呼忠臣忠成ガ此ノ凶禍ニ罹トル事情ヲ叙ブ可シ

德川前將軍家康ハ退隠シテ大御所ト呼バレ江戸ニモ居レバ駿府ニモ居リ幼少ヨリノ習慣ト云ヒ又ハ民情伺察トシテ四方ニ遊獵スルヲ常トシタルガ慶長十一年正月廿五日（一説ニハ十四日ト云フ）武藏相模地方ニ放鷹旅行スルヲ以テ將軍秀忠ハ令ヲ下シ其ノ邊ノ鳥獸捕獲ヲ禁止セシメタリ前將軍ハ輕裝シテ近臣數人ヲ隨ヘ東金地方ニ至リ鷹跡ヲ結ビ麟網ヲ引キタルヲ見テ之レヲ訝リ何者ノ所爲ゾト問ハシメタリ近臣コレヲ農民ニ問ヘバ内藤青山等ノ奉行ヨリ許サレタルヲ以テ之レヲ爲

京都府立総合資料館所蔵

セルナリト答フ前將軍之レヲ聞クヤ俄ニ氣色バミ言ヘル樣コノ事ハ將軍ノ知ラザル所乎心得ヌフドモ哉ト侍臣惶恐シテ對フル所ヲ知ラズ急遽コレヲ將軍ニ私報ス秀忠大ニ驚キ老女阿茶ノ局ヲシテ往キ内意如何ヲ伺ハセ二人ヲ責罰スベキ旨ヲモ附言セシメテ一意前將軍ノ怠慢ヲ緩和セシメント務メタリシモ前將軍一語ヲモ發セズ其ノ意推測シ難ク阿茶局空ク歸ルヲ以テ秀忠憂慮措ク能ハズ平常喜怒ヲ見セ給ハヌ父上ニシテ斯ク氣色バミ玉フハ故コソアラメ之トヲ緩和スルモノハ群臣中智慧伊豆ニ越スモノ無シト本多伊豆守正信智慧ニ富ム故ニ此ノ稱アリ急使正信ヲ召シ之レヲ諮詢ス正信

對ヘテ曰ハク吾ガ君樣御孝行ニ渡ラセ給ヘバヲソ天下ノ御讓ヲモ得玉ヒ將軍トモ成ラセラレタルナレ是レ併シ乍ラ大殿ノ御恩ノ淺カラザル所ニテ候ラヘ如何ナルフタリトモ大殿ノ御心勢デ背キ給フベキ況テヤ内藤青山ハ既ニ大殿ノ御勘當ヲ蒙ル上ハ罰セラルヽフ申スニヤ及ブト對フ秀忠ハ二人ヲ罪スルニ忍ビズ憂愁ノ色慘然トシテ面ニ顯ハル正信之レヲ見テ申ス樣私只今ヨリ東金ヘ馳セ付キ御氣色ヲ伺ヒ兎モ角モ仕リ御返事申シ上ケ奉ラン乎ト伺ヘバ將軍大ニ欣ビ曰ハク汝ニシテ往カン乎此ノ事必調ハン疾ク往キ好消息ヲ齎ラシ歸レトテ稍安堵ノ面持ス正信退出

京都府立総合資料館所蔵

シ直ニ馳セテ獵場ニ至リ侍臣ニ逢ヒ言ハシムル
様ハ御機嫌ヲ伺ハンガ爲ニ伊豆參上スト即時御
前ニ召サレ野立ノ所ニテ進謁シ問候ノ口上終リ
テ言上スラク將軍様ニハ大殿様ノ御氣色悪シヽ
ト聞コシ召サレ内藤青山ハ誅罰セラルヽニ極マ
リテ候フ二人ノ事モ亦不愍ニテ候ヘバ奴モ既ニ
老ヰ申シヌ故今後モ將軍様ニ御奉公申シ上ゲン
ニ若シ大殿様ノ御事ニ付シノ罪犯シタリトテ誅罰
セラレシヽ疑無シ内藤青山ハ私ノ善キ手本ニテ
候フ哀レ急ニ大殿様ノ方ヘ私ヲ召シ還サレ御前
ニテ御奉公致シテ首瘡ギテ死ニ度ク候ヘ將軍様
ノ方ニ在ルハ返スヽヽモ恐ロ敷ク存ゼラレ候フ

ト言フヤ前將軍ノ伜ニ解ケ曰ハク將軍ハ左程マ
デニ二人ヲ怒リ責ムルニヤトテ正信ヲ勞シテ蝦
夷ヲ遣リ急使ヲ発シテ二人ノ責罰ヲ解カシメタリ
將軍ハ之ヲ聞キ胸撫デ卸シテ大ニ悅ビ正信ニ謝
シ二人ノ罰ヲ赦サシメタリ

京都府立総合資料館所蔵

然リト雖ソノ後將軍ハ從來内藤青山二名ヲ以テ
行ヘル代官事務年貢米未進ノ事地頭ノ丁等緊要
七條目及ビ江戸町奉行ノ事等ヲバ鳴田治兵衛ノ
名ヲ以テ宣布セシメ二人ノ出仕ヲ禁止セリ忠成
ハ以後一室ニ蟄居シテ其ノ身ヲ終リタルハ最哀
レナル忠臣ノ末路ニテ世人ニ同情ヲ寄セラレヌ
慶長十八年二月二十日卒ス行年六十三法名ヲ珠
光道的トス男子五人アリ長子忠次ハ二代將軍秀
忠ニ奉仕シタルガ父ニ先ダチテ没シ次子忠俊家督
相續ス
伯耆守忠俊幼名伊勢千代天正六年二月十日遠江
國濱松ニ生マレ同十四年二代將軍秀忠ノ前ニ於

テ首服ヲ加ヘ諱ノ一字ヲ賜ヒ忠俊ト名ヅケラレ
通稱ヲ藤五郎トス同十八年小田原役ニ戰功アリ
テ感狀ヲ受ク時ニ年十三ノ初陣ト聞エシ慶長
五年關ヶ原役ニハ秀忠ニ謁シテ伯耆守トナリ戰
陣中ニアリ同八年其ノ功勞ヲ以テ常陸國江戸崎
地方高五千石ヲ賜ハル十年將軍家ノ軍政改革ニ
與リテ力アリ此ノ時始メテ四大隊ヲ置ク大番一
名馬廻リ組又御先手組トモ云フ外衛ナリ二隊アリ
花畠番　小姓組ト呼ブ内衛ナリ
書院番　殿中ヲ守衛ス殿衛ナリ
右三隊ヲ三番組ト呼ビ花畠番ト書院番トヲ
両番ト呼ブ

京都府立総合資料館所蔵

各隊ニ番頭ヲ置キ其ノ指揮ヲ掌ル忠俊書院番頭ニ任ゼラレ書院ニ於テ日々軍政ヲ視ル書院ハ城内ノ表廣間ナリ十六年下野國鹿沼五千石ノ加祿アリ十八年父ノ遺領二萬八千石ヲ分チ第弟成ト天方通直トニ分與シ自分ハ其ノ餘ル所二萬五千石ト江戸崎五千石鹿沼五千石ヲ領ス大阪陣十九年役ニハ秀忠ノ軍中ニ在リ元和元年ノ再役ニハ秀忠ノ右軍トナリ番士ヲ率ヒ玉造口ニ向フ玉造門外ニ池沼ヲ穿チ防禦軍アリ以テ東軍ヲ待ツ東軍躊躇ス忠俊進ミ出デヽ之レヲ視ルヤ其ノ怯情ヲ怒リ罵リテ曰ハク敵ヲ眼前ニ置キナガラ去タザルノ法ヤアル水アリトテ遠回リスル折ナラズ進メヤ進メト采配ヲ振リ々々々々下知スルニゾ隊士ト家臣ト相爭フテ水田ヲ截リ汚泥ヲ踏ミ立イ〳〵聲シテ進メバ櫓上ヨリ去ス銃丸雨霰ノ如ク斃レテ泥中ニ陷ルモノ無數加フルニ去ツテ出デタル城矢ハ地理ヲ諳ンズルモノカラ進退自由ニシテ味方ヲ縱擊横攻シ忠俊ノ馬前ニ迫マル即黨十八人忽其ノ前ニ駢死ス之レヲ傷者シタル水野隼人正忠清ハ急令直進ス忠俊コレヲ見テ其ノ塹ヲ奪ハレンコトヲ恐レ左ハサセジト又一鞭シテ馬ヲ進メントス老臣山本彌太郎其ノ前ヲ塞ギ馬銜ヲ把リテ離サズ馬躍リ主怒ル士臣又來リ相共ニ主君ヲ抑止ス會〻城矢モ退散シタレバ大

敗セズシテ陣ヲ進ムルヿ數百千歩藩士伊與田與
四右衛門一首級ヲ提ゲ來リ一番槍ノ實檢ヲ乞フ
鳴田惣五郎モ亦同時ニ敵首ヲ持チ馬前ニ跪ツテ
忠俊熟視シテ與四ノ進退ニ不審ヲ懷キ容易ク
首肯セザリケレバ與太ニ奮鬪シ其ノ首ヲ棄テヽ
又前進シ暫シテ一首級ヲ提ゲ來ル之レヲ見レバ
隊將

ノ章標ヲ佩ブルモノニテ前首ト共ニ實驗セラレ大
ニ面目ヲ施シ感狀ヲ得クリトカヤ　此ノ戰ニ水野勢ト
共ニ粉骨碎身シ兩藩ノ功勲伯仲シ甲乙ノ爭議端ナクモ
起コリ終ニ大御所ノ直裁ト為ルニ至レリ事煩シケレバ
畧ス　大坂城落去ノ後ニ於テ警衛鎮撫ノ命ヲ受ケ
策ネテ捕獲物品軍用金保管ノ事ニ執掌シ功ヲ以テ
播磨守ニ任ゼラルヤ隊士大久保四郎左衛門ヲ推薦シテ
曰ハク臣ノ功ニアラズトテ之レヲ辭セシガ許サレズ四郎左
衛門ヲ召サレ千石ヲ加賜セラルル
元和二年前將軍ノ子上総介忠輝ノ品行横道ナリトテ
駿河國八幡ニ閉居セシメラル忠輝陳謝再三ニ及ベド
モ赦サレズ將軍秀忠忠俊ヲシテ往キ問ハシムル等

京都府立総合資料館所蔵

將軍ノ内事ニ與リテ信任セラレ遂ニ世子竹千代ノ傅トナリ竹千代家光ハ父祖ニハ似モツカヌ若君ニテ氣ニ入ラヌトテ罪モ無キ近侍坂部五郎左衛門ヲ手打ニシタルヨリ左右ノ者ヲシテ聳懼心慄セシムルコト往々コレアリ父君ハ如何ニモシテ之レヲ改悛セシメンモノヲト群臣ヨリ其ノ師傅タルベキ者ヲ撰拔スルニ酒井雅樂頭上井土炊頭ト忠俊ノ三人アリ雅樂頭忠世ハ嚴正ニシテ大炊頭利勝ハ温和而シテ忠俊ハ正直ナリ之レヲ前將軍ニ啓ス前將軍ソノ撰ノ當レルヲ稱シテ知仁勇ノ輔者ト曰フ二人ハ舊勲閥歴ノ臣ナルヲ以テ家光モ幾分ノ憚ル所アルモ忠俊ハ輕視セラレテ憚ラレズ之レニ對シテハ我意ヲ立テ己ガマヽノ振舞少カラズ忠俊ハ異數ノ拔擢ニ感激シ勵精以テ其ノ値遇ニ報ゼント志シ家光ノ非行ニ對シテ毎ニ苦言ヲ發シ聞キ入レザルニ於ケル時ハ其ノ前ニ進ミ肌ヲ露ハシテ曰ハクイザ御成敗アル可シ私ガ申シ上グル所御用ニ無キニ於テハ御側ニ仕フマツルモ詮無シ死シテ以テ東照權現樣ニ御詫申シ上ゲント大炊頭モ忠俊ガ御前ニテ詳ラト聞クヤ亦其ノ前ニ出デ諫ムル樣ハ伯耆ノ申シ上グル所ハ誠ニテ候フ道理ニテ候フ若シ之レニモ後ニ給ハズンバ又々雅樂ガ何ントカ申シ上グ可シト家光モ漸次其ノ言行ヲ悛ノ秀忠モ稍ソノ心ヲ安ンジケル家光ガ三代將軍トナリテヨリ德川ノ威勢隆々トシテ江戸ノ餘威上ハ朝家ヲ壓シ朝臣ノ不平黨ヲ緘默沉止セシメ下ハ大藩外樣ノ諸大名ヲ御シテ畏敬ノ念ヲ起コサシメタルモノハ三候ガ能ク導キ能ク啟ヘ其ノ氣象ヲ虎變シタルニ是レ由ル

京都府立総合資料館所蔵

其ノ功ハ賞セラレ武藏國岩槻ニ於テ一萬石ヲ賜ハリ青山家ハ四萬五千石ノ領主トナリ紀州根來組ノ與力數十騎（鷹狩ノ門部ニ出ダス心ホ同ジ）同心數百人ノ支配ヲ為サシメラル根來ハ浪人ノ衆合隊ニテ德川軍ガ豐臣軍トハ牧對陣ニ際シ關東方トナリテ西軍ノ後方ヲ衝カントシテ秀吉ノ心ヲ苦シメ其ノ後東西和睦成リ終ニ關東ノ臣籍ニ入リタルモノナリ

元和五年福嶋左衛門大夫正則改易（領分取リノ事起コリ江戸市中流言アリテ人心騷然タリ其ノ事由ハ德川ノ法トシテ城郭ヲ新築シ又ハ改造スルニ於テハ其ノ前ニ於テ大政府ノ許可ヲ經ガル可ラザルニ正則ガ之レニ從ハズ恣ニ着手シタルヲ以テ法ニ問ハレ藝備兩國ヲ没收ノ上津輕ニ配セラレ僅ニ四萬五千石ノ小封侯トナレルヲ以テ其ノ群下ノ反抗モヤアラシカトテ蒲生鳥居最上ノ三藩軍ガ幕令ヲ受ケ愛宕下ナル福嶋邸ヲ圍ミ護ル可ク出陣準備スル故其ノ邊ノ人民ガ荷擔抱負シテ奔避シ町奉行ノ手ニテハ鎮撫ス可ラザルニ至リ將軍ヨリ忠俊ニ命ジ急遽處分セシム忠俊此ノ時左中職ニ在リ兩町奉行嶋田某米津某ヲ隨ヘテ市中ヲ巡行シ懇諭親說シテ安堵業ニ就カシム人心即日靜治ス　元和九年將軍上洛ノ行列（一番雜式　二番長持　長刀　同朋　前驅青山伯耆守外一名　四番隨身　五番白丁　三番　六番　諸太夫　車　帝衣　牛飼　舍人等　太刀持　後騎諸太夫　侍從以下ノ輩）程無ク家光ノ驕高豪癖再發シテ力量劍法ヲ自負シ近臣ト試合ヒ其ノ讓負スルヲ知ラズ自己ヲ以テ信ノ豪雄トシ角觝ノ技ニ誇リ微行シテ市中ノ角力場ニ出入シ遂ニハ暗夜辻斬ヲ為シ腰刀ノ利鈍ヲ試驗シテ快ヲ取ルニ至ル忠世利勝數〻諫ムレドモ聞カズ暴行愈加ハル二人コレヲ忠俊ニ讓リ諫ル

京都府立総合資料館所蔵

是レヨリ先ニ將軍ハ遊行シテ市人ニ交ハリ踏歌シ毎ク鏡面ニ向フテ彩裝ス忠俊コレヲ聞キ其ノ臥内ニ入リテ大ニ諫メ其ノ鏡ヲ取リ之レヲ中庭ニ擲ケタルヿモアルヲ以テ二人ニ對シテ曰ヘル樣ハ予モ亦為メニ心ヲ惱セシガ兩君ノ諫言ニモ從ハセラレズ予ノ進言モ無效ナレバ是レ常道ヲ以テ其ノ效ヲ見ル可ラズ今ヤ又試ニ一策ヲ施サン乎トテ相別カレタリ一夜將軍ハ小姓數人ヲ隨ヘテ微行ス一士人アリ闇中突出白刃一閃將軍ニ迫マリ高聲ニ呼バヽリテ云フ何者ゾ毎夜恐レタクモ御城近邊ニ於テ人ヲ創ツケ人ヲ斬リ世ヲ騷ガスイザ搦メ捕リ罪科ニ處セント片手ニ將軍ヲ捕捉セントス將軍倉皇其ノ度ヲ失ヒ從者ニ擁セラレテ城ニ入ル士人追ヒ來リテ門扉閉ヅ忠俊從ニ入リ諫メントスレドモ門者ニ抑留セラレテ入ルヿヲ得ズ將軍之レヲ按治シテ忠俊ガ故意ニ為セシ所ナルヲ知リ大ニ忿リ忠俊ノ弟大藏少輔幸成ヲシテ命ヲ傳ヘ即日解職奪祿閉塞セシメ後日更ニ上總國大喜多城ニ遷シテ二萬石ニ減祿ス忠俊即日路ニ上リテ入城謹慎スル一幾月請フテ下總ノ網屋ニ遷リ又請フテ相模國溝ノ郷ニ退キ又遠江國小林ニ蟄去ス之レヲ元和九年十月十九日ノ事トス

將軍モ年ノ長ズルニ從ヒ次第ニ悔ヒ往事ヲ追懷シテ悔心ヲ萌シ忠俊ニ報セントテ之レヲ召セドモ病ヲ以テ辭シ應ゼズ辭謝再三更ニ乞フテ舊領地相模海老名郷今泉村ニ移リ子宗俊ト共ニ假住ス故ヲ以テ前祿ハ給セラレズ住士ハ離散シ衣食給フズ山ニ樵シ海ニ漁シ以テ餬口ニ資ス宗俊ハ父ノ住來饗餐ナルヲ以テ自分ノ食量ヲ減ジテ供給シ己ハ其ノ餕餘ノ米麦ヲ薄粥ニシテ雜炊ニシテ僅ニ飢餓ニ耐

京都府立総合資料館所蔵

エタリ久フシテ此ノ事將軍ノ聞ク所トナリ急使コレヲ召ス
忠俊拜首シテ對ヘテ曰ハク臣ノ申シ上ゲタル事ヲ用ヒ給ハ
ヾ臣ハ此ノ如クニシテ死スルモ恨無シ今故ナク臣ヲ召シ還シク
マハヾ君ノ過ヲ天下ニ顯ハスヿトナリ且臣ガ忠ヲ世ニ賣ルコ
トヽナル可ケレバ命ニ應ジ難シト依然トシテ艱苦ニ尤居シ
哀レ此ノ老忠臣ハ同二十年四月五日醫藥普給セザル所ニ死
ス一説ニハ幸成ノ采邑今泉ヘ伴ヒ歸リ以テ終ルト云フ年六十
六法號シテ泰雲院殿春室宗信大居士ト謚ス京都大德寺
芳春院ニ葬ル
寛永三年將軍上洛ノ際途上遠江野中ニ於テ一士人突出シ一
書ヲ小竿頭ニ挾ミ進ミテ輿側ニ近ヅク衛士ソノ直訴ナルヲ
察シ叱シテ之レヲ斥クレトモ從ハズ只恐レ乍ラ々々々ト呼ビ俯

伏ス是レ從前嚴禁セラレアル所ノ籠訴ナレバ衛士コレヲ捕縛セ
ントス將軍命ジテ其ノ書ヲ取ラシメ且其士ヲ赦シ去ラシメ輿中コ
レヲ一讀スルニ忠俊ノ舊近士緒方兵右衛門ガ舊主ノ忠節寃死
ノ事情ヲ縷述シ其ノ家ノ再興ヲ乞願スルモノナレバ將軍モ大ニ省ミ
ル所アリ且其ノ忠臣ニ又其ノ忠臣アリテ死ヲ省ミズ乞願スルノ情ヲ
察シタリ　同九年御沙汰書ヲメラ宗俊ヲ强ヒテ江戸ニ召シ登城
セシム故舊コレヲ迎ヘテ久濶ノ情ヲ叙ブルアリ近況ヲ問フアリ慰
藉スルアリ中ニハ今後ノ方向ヲ闇示スルサヘアリテ其ノ坐側ハ人モ
テ埋ムニ至ル宿老筆頭ナル堀田加賀守正盛ガ登營シテ御用部
屋（老中ノ役所）ニ赴ク折柄其ノ前ヲ過ギ見慣レヌ人ヲ取卷キ諸大名ガ
喋々スルヲ訝リ其ノ中ナル人ハ誰レゾト指サシ問フ衆答ヘテ青山因
幡守ヲ畧シト曰フ正盛聞キテ跪キ熟視シテ曰ハク是レ伯州ノ子

京都府立総合資料館所蔵

カト宗俊其ノ倨傲無禮ナルヲ念リ傍人ニ彼レハ何人ゾト問フ衆悍リテ答ヘズ又顧ミ問フ一人曰フ加賀殿ト宗俊曰ハク吁(ウシ)勘左ノ子カト諸人愕然トシテ手ニ汗ヲ握ル正盛一語無ク立ツテ行ク一座其ノ豪膽ニ驚ク蓋シ堀田勘左衛門ハ正盛ノ父ノ少時ノ名ナリ之レヲ暫クシテ命アリ祿三千石ヲ賜ヒ面前ニ於テ家名相續セシムルノ朱印證書ヲ附與セラレ辱ギ書院番頭ニ補セラレテ亡父ノ職ヲ襲ヒ職祿ヲ增シ加ヘラレタリ配下ノ番士其ノ豪膽ナルヲ聞キ一令ヲ發セガルニ業已ニ服從ノ色ヲ見セタリトカヤ　慶安元年閏正月十九日城中ニ召サレ將軍面諭スル所アリ曰ハク汝ガ父善ク勗メテ予ヲ輔導ス予年少コレヲ遇スルニ其ノ方ヲ失ヒ窮困其ノ躬ヲ終ラシメ今ニシテ悔ユ而モ及バズ今日汝ヲ小諸ニ改封シテ聊ヲ以テ乃父ノ寃魂ヲ慰謝セント欲ス汝モ亦忠仕乃父ノ如クナレ吾ガ兒ノ生育敎養ヲ汝ニ托ス汝克ク予ガ心ヲ體シ輔導セヨト言絶エ嗚咽ス宗俊唯々俯伏シ侍臣仰キ視ル能ハズ翌日更ニ召サレ小諸三萬石ヲ賜フ舊臣ヲ呼ビ還シ城池ヲ修ノ新令ヲ布キ邸ヲ江戸ニ置キ參覲更代シテ父祖ノ舊規ニ是レ從ヘリ寛文二年大坂城代闕ケ大名中其ノ人無キノ嘆アリ（下文大坂城代酒井ノ條下ヲ看ヨ）酒井讃岐守入道空印ハ幕臣ノ故老ナリ諮詢ニ對ヘテ曰ハク青山宗俊在リト即日其ノ職ヲ命ゼラル同年ヨリ十二年ノ久シキニ渉リ能ク勤ノ克ク耐エテ畿内西國ノ强鎭トナリ幕府西顧ノ憂無カシメタリ四年六月高六萬石ノ朱印ヲ賜フ同五年大名家老等ノ妻子ノ江戸ニ在ルモノ在府歸國隨意タル可シトノ令出ヅ德川氏ノ諸侯ヲ遇スルヤ其ノ妻子ヲ江戸ニ置キ其ノ實ヲ質(チ)トシテ猥ニ歸國セシメザリシヲ今ヤ天下ニ異心ヲ挾ムモノ無シトシテ之レヲ解

京都府立総合資料館所蔵

故シタルナリ宗俊ハ尚モ舊例ノ如クシ臣節ヲ悉クサントス他藩之ニ習ヒ大抵ハ歸國セザリシトナリ同十二年特召御前ノ饗膳ヲ賜フ茶式ノ後二汁七菜ノ禮享ナリ同九年叔父大藏大輔ヲシテ甲府ニ急行セシメラル永井信濃守亦急命ヲ受ケ駿河ニ奔リ備フ其ノ外大名旗下ノ士七十餘名駿遠參三國ニ入ル世頗コレヲ怪ム宗俊ハ永井尚政ト其ノ内命ヲ帶ビ所分スル主任者ナリ（下文ニ出ダス所ヲ參照セヨ）明暦三年丁酉正月十八日江戸大風吹キ大火起コル之レニ由リ俄ニ令シテ大名ノ參覲ヲ差シ留メ類焼ノ者ニ賜金アリ本藩ハ銀子二百貫　貞享四年東山天皇即位ノ御式ヲ行ハセ玉フニ付キ慕命ヲ奉ジ白銀三枚樽酒魚肴ヲ奉獻シテ奉賀ス延寶六年老ヲ告ゲ退隱シ七十四歳ニシテ卒ス　藩士林田與右衛門後藤與次右衛門ノ為ニ斬殺セラル蓋シ伯父ノ復讐ナリ　元年九月二日ノ一トモカフ

大藏大輔幸成ハ忠成ノ第四子岩藤藏父蔭ニ由リ慶長四年二代將軍ノ前ニ於テ元服ノ式ヲ擧ゲ大久保忠隣命ヲ受ケ一刀ヲ賜授ス惣領ノ子息ナラズシテ斯カル殊遇アルハ比稀ナルモノトス大久保忠利罪アリ閉居中ニ歿ス其ノ舊交アルヲ以テ往キ弔ス之レニ由リ譴責セラレ蟄居ス九年十二月赦サレテ出仕スルヿヲ得タリ其ノ義俠心ヨリ出デタルノ罪犯ナリトテ反ツテ士人間ノ稱譽ヲ博セリ下總國四井地方五百石ヲ賜ヒ十年雅樂助ト改稱シ十二年大藏大輔ニ更ノ近習頭トナリ將軍ノ左右ニ侍シ近臣ヲ進退ス十七年同國高崎ノ地千石ヲ加ヘラレ高千五百石ニ食ム同十八年父卒シ遺領千五百石ヲ領與セラレ三千石ヲ領ス是レヨリ先上杉景勝征伐ノ時父ニ隨ヒ小山ニ至レヤ命アリ二代將軍ノ幕下ニ入リ西行シテ石田三成ヲ伐クシメ東山

京都府立総合資料館所蔵

道ヨリ進マントス而ルニ其ノ嶮路ニシテ中途ニ敵城アリトノ報ア
ルノ故ニ十五年以下ノ幼齡者ノ從軍ヲ差シ止メラレ恨ヲ呑ンデ歸ル
ヲ以テ常ニ時ノ至ルヲ待テリ大阪ノ役起コルヤ從軍ノ命下ラズ
缺々トシ樂マズ在リシガ一旦奮起追行シテ井伊直孝ニ告グルニ
心事ヲ以テシ其ノ手ニ屬シテ私ニ戰ヒ敵首ヲ獲テ實檢ニ供シ
テ感狀ヲ受ケ歸還後百人組頭而番小十人組頭ヲ兼ネ擢ン
デラレ評定所出仕ト為ル其ノ功勞ヲ以テ懸川城主ニ改封セラレ
二萬五千石ヲ領シ更ニ尼ヶ崎城主トナリ五萬石ニ至ル
三代將軍家光ノ弟大納言忠長性粗ニシテ暴ナルヲ以テ前將軍ノ
不興ヲ買フコト屢次叱責數回ナルモ改悛ノ情無ク前將軍ヨ
リ選拔セラレテ傅職トナレル老忠臣ハ疎外セラレ新進輕躁ノ
モノ事ヲ執リ國政峻烈民情離畔スルヲ以テ今ハ放任スヲ可ラズト

テ幸成ヲ以テ公使トシテ將命ヲ傳ヘシメ本領甲斐ニ駿河遠江二
州ヲ加ヘ賜ヒ以テ其ノ不平ヲ慰諭シ且奬勵セシメクルニ忠長ハ喜
悅改過ノ色無キノミカ之レヲ受クルノ意ヲ表セズ傲然タル態度ヲ
見セシメケレバ幸成モ案ニ違ヒ事情ヲ斟酌シ傅職鳥居成次ヲ顧
ミテ曰ハク大國二ツ參ラセラル、而已ナラズ甲斐ノ國ヲモ其盡ニナシオ
カル、御事ハ返ヘス〳〵モ目出度キ御事ニテ候フト其ノ言ノ半ニモ及バヌ
ニ忠長面色ヲ變ヘテ曰ハク大藏大輔ノ暑シラエフ承ハレ甲斐ヲ元ノマヽ領スル
ヲ予ガ過分ト存ズル半偶〳〵生レテ天下ノ主タル者ノ子タラシニハ是レ程ノ
領國何ニカ有ラント忿怒愈〳〵加ハルヲ幸成聞カザル如クニシテ退去セリ
公使トシテ斯カル恥辱ヲ受ケ乍ラ歸府シテ一言モセズ默過シクル
度量ト胥機ノ知能トハ同輩老臣等ヲシテ感嘆セシメタリ忠長ハ終
ニ大名預ケトナリ其ノ大臣ハ貶黜セラレテ其ノ事アレリ幸成ノ人ト

京都府立総合資料館所蔵

為リ父性ヲ異ケ殊ニ氣ヲ尚ビ武ヲ錬リ任俠ノ氣ハ大名中ノ一奇人ト稱セラレタリ慶長二十年病ニ罹カリテ急迫ナリ幕使來リ訪ヒ其ノ病床ニ就キ言ハント欲スル所ヲ問フ幸成頭ヲ擧ゲ拜謝シテ曰ハク臣ガ子孫ヲシテ百代マデモ忠臣タラシメン度ク存ズル而已ト其ノ二月十六日卒ス

下野守忠裕ノ事

天明六年九月將軍家治薨ジ一ツ橋治濟ノ子豊千代支家ヨリ入リ將軍ト為ル之レヲ家齊トス其ノ亡實父治濟ヲ尊贈シテ大御所ト為シトス大御所トハ前將軍ノ尊號ナリ朝廷ニ於ケル太上天皇ノ號ニ同シ幕府ハ其ノ初代ノ時ニ此ノ僭稱ハ早クミ胚胎シタルガ年ヲ經ルニ從ヒ之レヲ實行シテ怪ムモノサヘ無カリシヲ以テ傍系ノ尊屬ニサヘ此ノ僭稱ヲ追贈セントハナリタル

ナリ德川宗家ノ將軍職系ヲ敘スレバ左ノ如シ

○家康―秀忠―家光―家綱―綱吉―家宣―家繼―
　　甲州家
　　―吉宗―家重―家治―家齊
　　紀州家
　　宗尹―治濟

家宣ハ甲斐家綱重ノ子　吉宗ハ紀伊賴宣ノ孫ニシテ光貞ノ子

家齊ハ吉宗ノ第四子宗尹ノ孫ニシテ治濟ノ子之レヲ一ツ橋系トス一ツ橋ハ其ノ邸ノ所在地ニシテ江戸ニ在リ

家齊一日閣老松平越中守定信松平伊豆守信明ヲ召シ之レヲ謀ル兩老其ノ不可ナル要點ヲ擧ゲ縷述スレドモ將軍心ヲ奪フ能ハズ數日ニシテ又召シ顏色ヲ厲ラシテ定信ニ嚴命シ其ノ志ノ如クセンヿヲ以テス定信固執シテ應ゼズ將軍艴然

京都府立総合資料館所蔵

トシテ意邑兵ニ惡シク俄然立チ佩刀ヲ定信ニ擬スアハヤト覺
エガ戰慄スル近侍内ニ高岡頼長ナル者アリ機敏ヲ以テ侍衛ニ
任ゼラレ此ノ時將軍ノ後ニ在リ其ノ子細ヲ知ラザルモノヽ如ク高
聲ニ呼ハリテ曰ハク御手ヅカラ御佩刀ヲ下シ賜ハル越中守御
受アレト將軍モ亦顧念スル所アル折柄トテ急ニ刀ヲ地ニ拋チ奥
ニ入ル定信其ノ力タ拜戴シテ退キ其ノ由ヲ同僚ニ語リ平岡頼智
ヲ稱賛スレバ同僚ハ又定信ノ侃諤ヲ稱賛セリ是ノ一場ノ出来事
ハ遂ニ尊號追贈ノ沙汰止ミトナレリ文化元年正月二十三日忠裕ハ
京都ヨリ徵サレ東歸シテ老中トナル内議ニ與カル一日將軍前議ヲ
語ゲ其ノ所見ヲ問フ忠裕慎思欽對シテ曰ハク臣子ガ君父ヲ扱
ヒマツルニ如何計リノ美號尊稱ヲ贈ルモ猶ソノ心ニ慊ラズ今日
上意ノ如ク一橋殿ヲ尊ビ大御所ト仰キ玉ハン御事實ニ御至孝

ト申シ上グ可キモ是レハ御當家ノ制度ニ當タラズ正德ノ頃文昭院殿
家宣ノガ御生父甲斐參議綱重ノ（前示）ヲ尊ビ大御所ノ贈
號アラセラレタルハ其ノ薨去後ノ御事又有德院殿（吉宗將軍ノ一ナリ）
ガ御實父紀伊大納言殿（光貞ノ一前示）ニ對セラレ薨去後モ御
贈官ノ御事サヘ無カリシナリ今一ツ橋ニハ御齡モ高カラズ然ルニ此ノ
御尊號奉ラセ給ハンヿ御先代樣ニ對セラレ御僭越ナル可ク御父
子樣トモ後世ノ誹議如何アランカト苦慮ニ堪エズ候ノ樣ニ越中
守ガ申シ上ゲタル所ハ實ニ萬世ノ公論ニテ候ノ可ケレバ之レヲ捨テ
玉ハズ深ク御虎慮アラセラレナバ天下ノ幸ニテ候ヘト反復上申
シタルニ由リ贈號ノ事ハ再出セズ
是レヨリ先キ寛政五年寺社奉行トナリテ神社ノ一僧侶ノ一ニ
就キ判決處斷セシヿ少カラズ煩ヲ冊リラズ述ベザル可シ老中タ

京都府立総合資料館所蔵

ルヿ三十二年舊規ヲ擧ゲ新令ヲ布キ幕府ノ中興ヲ期待セラレ文政五年八月相馬大作將眞ノ獄起コルヤ幕議コレヲ思裕ニ一任スルヲ以テ身ヲ挺シテ、事ニ當リ數十百日ノ審察ヲ遂ゲ獨斷處分ヲ為シ天下ノ耳目ヲ聳動セレメタリ尤ニ其ノ梗槩ヲ拔萃セン幕府ノ制ニ平常普通ノ裁判ハ刑事民事トモ町奉行コレヲ裁斷シ士分以上ノ重大事件ハ評定所ニ於テ專務元中コレヲ糺問審判シ將軍ノ出臨ヲ乞フヿモアリ此ノ度ノ相馬事件モ將軍出座閣臣連席大目付江戸町奉行ノ傍聽アリテ以裁ナルモノクリ

鎌倉時代ニハ奥羽二國ヲ以テ制限外ノ土地トシ賴朝親征以後深クチ涉セズ故ヲ以テ强者ハ弱者ヲ凌駕シ恣ニ領土ヲ擴張スルモ賴朝沒後鎌倉多事長鞭モ馬腹ニ及バズ時ニ乘ジ土地ヲ蠶食シテ强大ヲ致スモノアリ之レヲ南部三郎光行トス清和源氏ニシテ新羅三郎義光ノ後裔ト稱シテ雄長タリ足利氏ノ時ニ至リ東三郎信政ガ應永年間軍功アルヲ以テ鎌倉管領持氏ヨリ陸奥ノ國司ニ補シ之レヲ子孫ニ傳承シ德川幕府ノ時ニ大膳大夫四位ノ大名タリ其ノ世臣ニシテ津輕為信ナルモノ上京シテ近衛關白太政大臣尚通ニ私謁シテ其ノ寵ヲ得テ歸國シ予ガ家系ハ近衛家ノ支庶ナリト稱シ兵力ヲ以テ近隣ヲ蠶蝕シ漸次强藩トナリ四位大膳大夫南部利用其ノ下ニ出ヅルヲ羞ゲ缺々トシテ樂マズ幕府出仕每ニ之レニ逢ヘバ怒氣鬱勃シテ耐アル能ハズ之レガ為ニ病ヲ發シ年ヲ經テ悶死ス重臣其々怨恨骨ニ徹スレドモ之レヲ如何シトモスル能ハズ利用ノ近侍ノ臣相馬大作將眞罵リテ曰ハク弘前（津輕ノ封地）ノ奴輩吾ガ君家ヲ輕蔑シ恩ヲ以テ離ト吾ガ藩士クルモノ臥薪嘗膽シ以テ其ノ報復ヲ為サザル可ラズト

京都府立総合資料館所蔵

大臣以下ニ説キ君ノ性命ヲ奪ヘルノ復讎今日ニ在リトテ連判帳ヲ持チ廻レドモ應ズル者無シ唯軍学ノ門人関良介一人アルノミ憐ムベシ藩中ノ軍学師ニシテ之レヲ實地ニ施ス能ハズ唯二人博浪沙ノ一擊ヲ試ミントシ津輕越中守寧親ガ江戸ヨリ歸封スル所ヲ白澤驛ニ狙撃ス寧親ハ兼ネテ注意スル所ナレバ疾クヨリ偵知シ中途ヨリ江戸ニ還リ之レヲ老中ニ訴フ幕吏コレヲ踪跡シテ大作良人ノ僧匿スル所ニ於テ捕縛シ之レヲ江戸ニ引キ町奉行所管ノ傳馬町牢舎ニ投ジ日ヲ經テ其ノ口書罪狀書ノ血判セシメ之レニ由リテ斷罪セラレ其ノ引キ出ダサル、ヤ白洲罪人ノ坐所ニテ調書ノ讀ミ上ゲアリ書中ニ津輕ノ家ハ本ト南部家ノ家來筋ナルニ云々ト言フ所ニ至リ大作欣躍再拜シテ曰ハク此ノ一語アリ私等甘ンジテ刑ヲ受ケント大作ハ刎首梟首良助ハ刎首セラレテ事了ル

犯者ノ素志ヲ明示シテ犯行ヲ論スルニ亡命ノ士ヲ以テ處シ果ヲ主家ニ及ボサレノガル所當時ノ美談トナル此ノ處置ヲ聞キテ南部藩一同忠裕ノ德ヲ稱賛シテ永年口舌ニ上シタリトナン文化元年正月二十三日京都所司代ヨリ閣老トナリ在職三十二年前後ニ比無キ勘續年限トス大正八年朝廷ヨリ其ノ功勞ヲ追贈セラレ從三位ニ昇ル

大坂城代　一藩四侯合計二十二年亦比無キ信任ナリ

因幡守宗俊　寛文二年二月ヨリ延寶元年ニ至ル十二年間

因幡守忠朝　寶暦八年十月ヨリ同十年十月ニ至ル三年間

下野守忠裕　寛政十二年十月ヨリ享和二年十月ニ至ル二年間

下野守忠良　天保十一年十二月ヨリ弘化元年十二月ニ至ル五年間

城代ノ事ニ付キ

京都府立総合資料館所蔵

豊臣家亡滅後大阪ノ沿革ハ元和元年六月八日松平下總守忠明始ノラ此ノ城地ニ侯トシテ城下十萬石ヲ領シ戰後疊廢ヒル城郭ヲ修復シ離散セル人民ヲ招還シテ一大面目ニ改造シタリ元來此ノ地ハ天下ノ咽喉ニシテ堅城アルヲ以テ幕府ノ直轄トスベキノ論府中ニ起コリ封建ノ制ヲ止メテ思明ヲ郡山ニ移シ將軍ノ名代ヲ置キ之レヲ城代ト名ヅケ大名ヲシテ交代守衛セシムルヿトハナレリ初設ノ年ヨリ慶應四年廢幕ニ至ルマデ大凡三百年間此ノ職ニ在ルモノ七十三藩トス

城代役料高壹萬石大阪附近ノ地方ヲ以テ給セラル往々得失相償ハズ其ノ最初幕議コレヲ決定シタル時ニ於テハ物價低廉士心樸實ナルヲ以テ收支相伴ヒタリシニ武備ノ外裝ニ文物ノ華麗ニ用途失費增加シ苟コノ職ニ在ル數年ナランニハ負債山積シ士風遊蕩シ容易ニ醫治シ得ベカラザルモノトス然リ而シテ此ノ藩ノ長ク耐エ得タルハ藩風ノ質實ナルト勘定奉行ノ經濟ノ方ヲ得タル所トス亀山藩ニ視テ以テ施設方略ノ巧妙ニ驚カン下野守忠良ガ天保六年ニ於ケル桑田船丹兩郡内ノ舊領地交換復歸ノ事ナド一巧一拙思ヒ半ニ過ギシ忠良モ亦弘化二年十二月大阪城代ヨリ老中ニ昇レル人ナリ

元和八年伏見城ヲ廢棄シ以後大坂城ヲ以テ西國中國ノ要鎮トセリ幕府ノ封建タル九州ノ巨藩ヲ削減スルノ機會無ク尾大掉ハザルノ概アリテ閣臣ノ深憂トナリ茲ニ本城ヲ以テ之レヲ鎮壓スルノ基礎ヲ築キ譜代大名ヲ以テ之レガ主任トシ小藩侯コレガ副任トナル定番ト云ヒ加番ト云フハ正副大名ノ謂ヒナリ百騎衆ト呼ブモノ闘士ノ資格ヲ以テ旗下士コレニ當ル一回百名年々交代スルヲ以テ此ノ名アリ江戸ヨリ

京都府立総合資料館所蔵

往来給仕シ城内常ニ數百名居住ス之レニ加フルニ土地定住ノ與カ三十騎同心百人組二隊アリ百騎衆ハ城代支配ニテ與力同心亦同シ

山陽山陰四國九州ニ在ル諸大名及ビ旗下士ニシテ在邑スルモノハ軍事上城代ノ指揮ニ從フベキモノトス故ニ薩長土肥藝備因伯ノ如キ大藩侯モ此ノ地ヲ通過スル時ハ當城下通過ヲ報道シ剩ヘ城代ノ安否問候ヲ為スノ義務アリ當時泰平ニ醉ヒ權勢ニ戀々スル世俗トテ所司代職ニ轉ジ閑散ニ陞ルノ順路ナルヲ認メテ一藩ノ財力ヲ賭シ領民ノ膏資ヲ強トテマデモ此ノ職司ニ當タラントヲ希望シタル大名少カラザリシナリ

大交代ハ城代加番ノ入レ代ハリハ交代ハ百騎衆ノ入レ代ハリヲ毎交代命令後八月四日ト同十二日トシ曉七ツ時即夜明前二時間ニ在リテ城ノ大手枡形内外ハ人數繰リ出シ城代館邸ニ於テ勢揃式アリ六ツ時夜明ケ時合圖アリテ軍容肅々甲冑ハ箱櫃長持ニ納メ威容堂々トシテ去藩未藩相向フテ揖讓シ引渡了リテ一入一出ス

行列式

高挑灯　長柄ノ槍　同同同　具足櫃別當　槍

長柄ノ頸　高挑灯　高挑灯　長柄奉行騎馬

高挑灯　長柄ノ槍　同同同　擂手代ノ別挾箱

草履取　平士　若黨槍　草履取　挾箱　平士　上ニ同シ

高挑灯

平士　右ニ同シ　平士　上ニ同シ

京都府立総合資料館所蔵

棒突足輕　同同同同同同　別當　槍
足輕小頭　同同　足輕小頭　物頭　騎馬　若黨　草履取
棒突足輕　同同同同同同　別當　挾箱

別當　槍　若黨　草履取　宰領
番頭騎馬　草履取　番目付　具足櫃　同
別當　挾箱　槍　挾箱　宰領

宰領　高挑灯　銃同同同同同
雨具釣臺　同同　足輕小頭
宰領　高挑灯　銃同同同同同

同　銃同同同同同同同　銃同同同同同同同　別當
高挑灯　玉薬箱　玉薬箱　高挑灯　物頭
同　銃同同同同同同同　銃同同同同同同同　別當

若黨　槍　高挑灯　弓同同同同
騎馬　草履　足輕小頭　矢箱　高挑灯
若黨　挾箱　高挑灯　弓同同同同

弓同同同同　別當　若黨　槍　平士
矢箱　高挑灯　物頭騎馬　草履取　平士
別當　若黨　挾箱　平士
弓同同同同

京都府立総合資料館所蔵

若黨 槍
挾箱 草履取　平士　同上　大鳥毛槍　高挑灯　徒士同同　挑灯同同同同
右ニ同ジ　平士　同上　臺　立傘　大鳥毛槍　同同同同
右ニ同ジ　平士　同上　鳳毛槍　高挑灯　徒士同同

挑灯同同
同　持槍　供頭　麁從　近習　同　挑灯
徒士目付　具足櫃　六尺　駕輿　六尺同　草履　六尺同　茶辨當　茶坊主
同　持槍　供頭　麁從　近習　同　挑灯
挑灯同同

別當　徒士　草履取　棒突足輕　同同同
引馬　籠　徒士　右ニ同ジ　高張挑灯　足輕頭
別當　徒士　右ニ同ジ　棒突足輕　同同同

同同同同同同同同同同　別當　若黨　槍
高挑灯　物頭騎馬　草履取　番目付
同同同同同同同同同同同　別當　若黨　挾箱

若黨　槍　宰領　押
草履取　下目付　兩具　釣臺　同同同同
若黨　挾箱　宰領　押
列外荷駄　兵粮方荷駄
以上　三百五十七人　列外ヲ合セテ四百人餘
宮津城受取出陣　龜山藩ノ部ニ出ダス　參看スベシ
松平家ノ時宮津出陣ノ一アリ　丹後守高廣ガ宮津城主京極

父入道高國ノ無道ヲ訴ヘタルニ由リ高國ハ南部藩預ケトナリ
男子四人女子二人ニ外大名預ケトナリ高七萬五千石没收セラレ城地
返上トナル此ノ如キ際ニハ往々舊臣ノ抗拒アルヲ以テ之ヒガ軍備ヲ為シ
且又地方鎮壓ノ為ニ豫防ヲ為スナリ左ニ其ノ顛末ヲ畧載シ其ノ法度
費目ヲ記上ス

寛文六年五月二十日 上使アル旨老中ヨリノ口達留守居役人(来ル二日開門掃除箒手桶ノ準備アリ 大名ノ門ハ常ニ閉ヂ潜リ門ヲ往来スルナリ禮式ニハ竹箒水桶ヲ門前ニ置ク)
置ク桶ハ下ニ二箇其ノ上ニ一箇ヲ置ク 午前上使両名到ル君侯下坐シテ命令ヲ聞ク其ノ書
面ハ老中ノ連署ニテ 此ノ度京極丹後守改易被
仰付ケニ付宮津城受取トシテ出張ノ段ハ事トアリ君侯謹ミテ御
請スレバ上使ハ平座相對シ御大役御苦労ニ存ズル云々ノ旨ヲ叙ベ茶菓
ノ饗ヲ享ケテ退去ス 君臣相會シ廣間ニ於テ議定スル所ノ條々ヲ筆記

シ早打騎馬ヲ以テ國家老ニ報告スルヲ例トス 篠山城ニ早打ノ達ス
ルヤ人心騒然タリ重臣廣間ニ會議シ此ノ旨ヲ城門外制札ニテ告知シ人
民ヲシテ安堵セシメ軍師ヲシテ行軍準備ニ着手セシメ君侯ノ歸着迄
懇願スベク晝夜鞅掌シ郡奉行ハ領内村役ヲ呼出シ民衆賦役ヲ命シ
道中奉行ハ宿驛道中ノ調査ヲ為ス物頭ハ尤ノ軍令ヲ發ス

御法度書ニ覺

定

一 歩行ニ付ハ一騎貝ニ起キ二騎貝ニしなめ一騎貝
ニ而押出事

一 陣屋ニ而表馬乗ハハ宝蓋ニ而ハ表打ち仕間敷
三乗ニ付ハ人ニ鉄砲三丁ハ名度申ス事

一 ハ屋敷内ニ於テ喧嘩ニ及ハヽ鉄砲ニ而一紙

京都府立総合資料館所蔵

召連迎ニ可参事

一 小屋敷ニ付ケ方鉄砲打列ニ仕第ニ立つゝめ誘ひ合
立ニ成ル時ハ列ニ成ル方ハ不残ハ家ニ下知仕第面ハ
直ニ可ニ引事

一 敵ハ先ヲ出シニ付ニ一組切ニ二ノ段 他組ハ其後不出ニ
ヲ事

一 敵味方お近ク成ル方鉄砲ニテ射殺打殺敵方ヲ倒シ
首ヲ不ニ取出事

一 自身先ヲ出シニ成候ハ一見ニ成ル者ハ人数ニ外供ニ
二人ヲ不ニ出ル者ハ二人ニ義ヲ仕ル者ハ手列ニ成ル面ニ下ニ
迄不ニ可辞義ニ而ニ仕ル成事

附 一度ニ組ニ成ル陣頃取ニ自遠人数ニ外ニ出ル事

一 敵ハ新発ニ成ル迄ニ下知ノ
為ニ廻リ合ハ無ニ者ハ さゝくべうゝ ずさいと次第ニ ニ
事

一 駆ケ合ハ敵ハ味方ハ陣所ヲ取ル可ニ迄ニ
いとい ハ付ハ縦横ニ仕成リ合ハ組ハ下知仕第ニ ニ
き事

一 使番ニ者先ヲ務新参ハ先刻ニ鉄砲自分ニ傷ヲ負
於合迄ハ遠ハ遠ハ回ル成ル急度四事ニ ノ用ニ
仕ル者ハ妻子ニ兵部家ニ ノ事

一 駆ケ口ニテハ槍ヲ成ル不ニ可ニ成度事

一 用ヲ ニ ヲ迄ル ハ并ニ敵ハ中ニ自用ニ往来ニ付ハ
上下ハ火ヲ焚ル名乗ル通行ニ成事

京都府立総合資料館所蔵

一 小屋印会言葉相図ヶ見うれ大教定ヶ所ヶ日限ヶ
事

一 馬上ヶ乗捨人死絶ヶ一位死ヶ取ヶ引ヶ二ヶ仕事

一 夜廻ヶ与ヶ二人足軽ヶ人死ヶ本取ヶ引ヶ二ヶ仕事

附 くり拾箱ヶ引絶ヶ紙ヶ取ヶ引ヶ替ヶ二ヶ知事

一 かまりヶ番所ヶ忍ヶ来ヶ知ヶ事

一 夜討ヶ引ヶ田舎近ヶ其節ヶ引ヶ如ヶ周ヶ引ヶ約事

一 他所ヶ引ヶ人ヶ不及申 就ヶ新ヶ引ヶ少屋ヶ拘置ヶ候ヶ引ヶ曲ヶ
事

一 為見廻他所ヶ引ヶ飛脚ヶ来ヶ引ヶ一取ヶ外為置ヶ引ヶ為ヶ
右ヶ際ヶ引ヶ先守ヶ引ヶ也

五月 日

道中心得之
定

一 今度道中傍ヶ行列ヶ為ヶ定所ヶ次第并ヶ為ヶ
を猥ヶ為ヶ引ヶ曲ヶ之事

一 喧嘩口論堅停止ヶ上ヶ様ヶ子細ヶ
ヶ為ヶ所ヶ及沙汰ヶ違犯ヶ者ヶ理非を論ず
ず変方ヶ引ヶ諸罰ヶ第一令ヶ拘ヶ為ヶ其咎
自ヶ人ヶ之事

一 馬ヶ乗ヶ時ヶ口取中ヶ脇ヶ乗延歩打ヶ
乗ヶ引ヶ事

一 脇道并作毛ヶ場ヶ人ヶ不ヶ乗ヶ又端下ヶ引列ヶ
次第猥ヶ為ヶ引ヶ曲ヶ見合ヶ事

一 旅宿ニ於テ火ヲ出来ル時ハ近所ヲ廻ル者ハ
役人ハ不陸ヲ系ル所外ニ而ハ其人ヲ集ル
ヲ受義無事
一 供多不系ル輩ハヲ曲ヲ通ル者ハ二ヲ過ル
一 押買押売并猥雑無作法仕ル者自他ヲ宿札ヲ取
ヘカラザル事
一 猥ニ不ヲ伐取竹木事
付 作毛ヲ踏馬ヲ放ス事
一 諸勝負停止ル事
一 詰通真入交通ル者并銃砲ヲ真ヲ携ル
馬ニ乗ル又ハ二人ニ乗ル事
一 目付ヲ差向ル廻ル諸事ヲ申付事

一 走物見ヲ以ハ口上ニヲ度行列ヲ一里宿ヲ一里補
ヲ系事
一 ハ組ニ定置供ヲ面ニ頭ヲ居図ヲ受事
一 泊ル時馬廻ル者武人（足軽武人ヲ原ハ廻時ヲ二付ル
付 拍子ヲ乱ヲ）
一 道中并宅住逗留中ニ也宰人其他何様ル所ヲ
ヲ取次申ヲ事
右ル條ル空ヲ相ヲ事ヲ也
五月日
在城中人ヲ書
一 喧嘩口論ル儀并定置通ル事
一 於所内第一火ヲ出来ル付下宿ヲル変人組頭取中

京都府立総合資料館所蔵

三、大挑灯をともし家中之者門口ニ大きニ爰許へ
出候ハ但ニ三十百達不先桁形ニ角へ集り受持図之
附中小姓歩行者次ニ供廻り之者共玄関前へ
事

一、町中ニて乞食者ニ付乗馬者ノけん幡を着て見
之置宿のとまりニ隨ひ混雑之様一つ之仕事
但家中ニ不有ニ定り之町並ニ火事ニて足
軽出柄ニ者共を以ニ百達義以ニ任前図火を
消べし家中ニ而も下人を百達共ニ火を
一、於義所ニ礼仕者補事
一、傷者中ニ而之内音曲ニ者所ニ於傷者仕
事

一、町中むさとあるき申者有之ハ用方ニて町を
く其次ニ義場を行ひ出事
附 歌帳ニ之記事
一、文殊ニ者ありあひ出ましき事
一、辻之門之ありさ仕者ニ者
一、話終ニ自ハ并又ハ町ニて乗物仕様
一、目付ニ者庭ニ而ハ書取之迴事
右條々定之相守者也
寅ノ六年六月日
出陣ニ付キ江戸表ヨリ人馬諸道具追々到着御城下並ニ村々
ノ郷人足相揃ヒ役割申渡等無手落旨夫々ヨリ言上相成由ヲテ
来ル四日出發六月六日ヲ以テ城受取ノ日ト定ム

京都府立総合資料館所蔵

行列人數諸道具以下諸入費其他ノ下ドモ

一 鉄砲八十挺　但六組人數百六十人　内十二人小頭　十八人手明　六人うしろ中間

袋　五十挺ハ猩々緋　三十挺ハ黒羅紗　外両覆袋肩當

黒羽織　黒丹後　御紋　小頭羽織　丹後紬　○○○○○　一組二人宛

帷子地十子ノ紋

一 玉箱六荷　人數十二人　但一組ニ二人宛

一 火縄二百四十筋　内八十筋両火縄　但一組四十筋宛

一 藥（火藥ノ丁）八貫匁　但一組ニ二貫二百匁餘宛

一 玉　四千　但六組分

一 ちゃぐ　四百　前同断

一 腰差（玉ちゃぐ入ちゃぐ）四百　前同断

一 口藥入　八十　前同断

一 具足　百十領　四組ハ十八宛　二組ハ十九宛　指物ニ帯共

一 腰あて　百十

一 二本しゃく人　百十本

一 皮笠　百十

一 手拭　脚半　わらじ　（數百十度ヶ度）

一 鍋十二　一組ニ二ツ宛

以上

一 弓三十挺　両覆袋有　但二組四十二人　内四人小頭　六人手明　二人うしろ

帷子地花色十子ノ紋　羽織丹後　御紋利ノ字

小頭羽織丹後紬薄柿　御紋利ノ字

一 矢箱二荷　持人四人

一 靫　三十穂　矢六百筋　皆紋六十筋　くちぬき皮ぬげ三十宛

京都府立総合資料館所蔵

一 具足 四十領　指物上帯とも　但二組分
一 弓小手指物上帯とも 四十
一 腰あて 四十
一 二本しなえ 二組分 四十
一 手拭股引御半打うめつゝ 人数之有てゝ成す
一 なゝべ 四ッ 但一組二ッ充
一 飯焚 四人
以上
一 長柄 六十本 但二組七十八人 内四人小頭 三人手明 二人くゝ
帷子地花色丁子し紋 麻羽織地花色ろゝ柿筋
外二人羽織丹後紬水色
一 具足 七十六領

一 手拭とゝ引きやとん 打うめつゝ 人数之有てゝ成す
一 なゝべ 四ッ 飯焚 十二人
一 旗十本 人数十九人 内小頭二人 半甲十四人 四人旗持箱中間
單物地花色丁子し紋 小頭羽織麻花色ろゝ黒柿紋利
ゝ字
一 具足 十五領
一 腰あて 十五
一 手拭ゝ引きやとん 打うめつゝ 人数之有てゝ成す
以上
一 御馬印 大小 大馬印奉行 小林加左衛門 中間六人
小馬印奉行 上野弥八 中間四人
奉行 羽織花色小紋唐草 中間帷子花色 丁子し紋

京都府立総合資料館所蔵

中間し手拭ゞ〳〵きやてん おろくめつ〳〵 人數ニ応じ有之

一 馬ニ八十騎

以上

御旗本

一 持筒 二十挺 但二組 人數二十八人 内小頭二人手明四人 うし人二人

袋すたゝん 両覆袋 肩あて有

帷子地花色丁子紋 羽織黒丹後無紋 小頭薄りき利紋

一 玉箱 二荷 玉入 合千

一 火縄六十筋 内二十筋 両火縄

一 薬 二貫目

一 腰指二十

一 口薬入 二十 ちやこう百

一 具足二十六領 但二組ゝ

一 腰あて 二十六

一 皮笠 二十六

一 しゝなゝ 二十六本

一 なゝ 四ツ 一組ニ二ツ宛

一 手拭ゞ〳〵きやてん おろくめつ〳〵 人數ニ応じ有之

以上

一 持弓 両度袋有 十挺

人數十五人 内一人少 三人手明 一人うし人

帷子地花色丁子紋羽織黒丹後紋利り字 小頭羽織丹後紋

うしろ紋利り字

一 矢箱 一荷 持人二人

京都府立総合資料館所蔵

一 猩々緋鞍 拾穂 矢百筋 替弦二十筋
一 具足 十四領
一 腰あて 十四
一 弓小手 十四
一 しころ 十四本
一 手拭とり川さやちん 打く めんつり 人数二百 お渡き
以上
一 長柄朱鞘 二十本 人数二十五人 内一人当四人明
帷子地 花色丁子之紋 羽織地花色 白柿さし
一 具足 二十五領
手拭もり川さやちん 打く めんつり 人数二百 お渡き
一 貝二 持人二人 小澤角太夫 同 花膳

丹後縞 浅黄 袖無し
一 鐘二 但旗箱ニ入
一 御余掛馬 二足 あふ坂 塩竈 寒領足軽二人 口取二人
一 牽馬八足 内二足 御召 北窓 閑くさし 小島 布引
ひろく いこくいかは
人数三十七人 内十七人口取 三人とりかへ 七人背負 十人乃めたき 帷子 紺地紺
一 挟箱 六肩 簑箱 薬箱 合人数十三人
一 持筒 二挺 持人四人
一 弓立 六肩 内大弓二肩 半弓一肩 中間三人 中間一人 一張立 三肩 中間廿人
一 立つじ之敷 二肩
一 とさやう 四肩 二つ赤 二つ黒 中間六人 一ツニ矢三十筋入
一 御具足 二領 持人廿人 奉行 柴田徳兵衛

京都府立総合資料館所蔵

一 甲冑　二本　持人〇〇〇〇
一 竪笠　臺笠　人數合七人
一 せふぐ
一 持鑓　九本　二間直鑓二本　持人三人　二間半二本　持人四人　大鳥毛二本　持人四人　十文字一本　直鑓二本　持人
合三人
中見一本　持人二人
一 刀筒　三
一 御乘物　六尺十二人
一 鞍置馬　十二疋　中間三十六人　内十三人皆持
一 文庫　二　中間二人
一 茶辨當　中間三人
一 菓子辨當　中間三人
一 旅臺子　中間一人

一 辨當　一　中間四人
一 十人辨當　一　中間四人
一 桶辨當　二　但ながべ入　中間四人
一 御料理ながべ　二　中間四人
一 雜長持　一　中間四人
一 籠　中間一人
一 板ノ間　二人
一 食たき　二人
一 幕　二人
一 長持　十六人　奉行　村上三郎右衛門　江馬庄三郎
一 紺幕　五重　二重地赤白御紋　三重地白赤き御紋　馬ゑて
一 外幕　二十重　馬ゑて

京都府立総合資料館所蔵

一内幕　六重　どんす　馬二て
一幕串　五張分　馬三て
一借具足　二十領　但ハ道指物も　馬三て
一くさり帷子　四十　但頭巾も　馬三て
一もゝかゝハ　十筋
一ひよつし木　五組
一百文筒　五挺
一三十文筒　五挺
一樂　七十貫目
一三文五分玉　五千
一両玉　五十
一十文玉　千
一二十目玉　二百
一三十文玉　三百
一百文玉　三百
一火縄　二十
一火矢　八十本
一かゝみたて　三十
一移立ゆり　百
一九挑灯　十
一箱挑灯　十
一つく棒　同
一綱引　二百筋
一鎌　三十挺
一よき
一げんの〻
一ゝゝぐハ　十挺
一くハ　二十挺
一小屋材木
一壘り表
一もつこ
以上
一より棒　三十本
一さすまた　同
一澁紙　二百枚
一なた　三十挺
一つるはし
一石のゝ
一ゝゝつゝ　五挺
一ゝまろい　釘太ふ
一杭木
一きやなつ

京都府立総合資料館所蔵

一小姓 十人 帷子嶋さらし

一中小姓 二十一人 小頭共 帷子白かゝ染羽織 茶ゟ袖各〳〵 小頭目付 浅黄 但羽織黒ちりめん ゟ〳〵ゟ 内二人御供仕不足之内

一歩行四十一人 帷子花色丁子紋ゟき 小頭目付 同前 羽織黒羅紗 紋丁子 小頭目付 羽織もゟぎ ゟゟしゟ 紋丁子

内二十九人御徒士組 三十七人之内五人ゟり目付之内 一人柴田徳兵衛 御具足奉行之内 小林加左衛門 上野彌八 御馬印大小之奉行之内 残りてゟゟ

一同六人 無足 ○○○歩行

一同六人 望奉行

一茶道六人 頭共 帷子嶋地布羽織浅黄丁子之紋

一武具奉行 一人

一納戸 三人

一歩行使番足軽 十六人 羽織ゟハ色紋利の字 帷子地花色 丁子之紋

一御供道具奉行 三人 羽織浅黄出紋 紋利の字

一御馬屋へ渡申諸道具之事 たゝ者着数ゟゟも無地紺なゝべ大小十二 めつゝ百六十六 打〻百六十六 掃除もつとゝ

一大工 四人 木挽一人 やねふき一人 黒鍬之者二十八人

役人覺

一下臺所賄 頭二人 足軽二人 本中間 四人 御中間 八人

一扶持方渡 頭二人 足軽四人 中間四人

一大豆塩噌薪かゞ葉こめゟ荒ぬゟ渡 頭一人 足軽三人 中間四人

一上臺所賄 三人

京都府立総合資料館所蔵

一 御馬賄 二人　一馬飼料調方 一人

一 郷足輕中間寄合組 二人

右之内先發用意之後人ハ五月廿七日ニ篠山を出發ス

御道中記

朔日　篠山より六里十二町　竹田御本陣　四郎右衛門

二日　竹田より五里　梅迫御本陣　善右衛門

三日　梅迫より二里　田邊御本陣　猪子五兵衛

四日　田邊より三里二町　油良御本陣　長福寺

五日　油良より一里半　栗田御小休　栗田庄兵衛

栗田より一里　宮津御着

都合十九里三十町

一 合圖之事　一 赤ハ ふしん　一 黒白段々ハ無事

一 御家中御借人　貳百石取　百五十石取　六人宛　物頭八人宛

内一人足輕

一 御供之惣人數 二千三百五十七人

一 惣馬數 三百七十二疋　内百五疋無馬　二百六十七疋 小荷駄

小荷駄之内百五十六疋 乘掛　百一疋 駄荷　十疋 乳馬

一 宮津ニ而 不銭定　主人之名一夜宿賃十二文　下人ハ文無之十二文

但名々ハ下人一ぱいニしてすむ　乳馬ハ夏なる故也

一 上下之牛惣人數ニ書支度之下ル事

一 内家中ニ而大豆弐升宛之事　但路ふちハ月ふ

一 味噌四十人一升　塩五人一升　加茂五ふくハ屋

以上

一 銀百四十三貫五百七十六匁八分六厘

京都府立総合資料館所蔵

内六百七十四貫八分

内扶持米百四十九石四斗四升　御用代外ニ百三石二斗五升従

公儀受ル　但百三人分ハ扶持方後ニ三分石ヲ渡ス人

扶持ハ　一日ニ四石五斗宛　日数三十二日半書ニ扶持ヲ

但　御代官　猪飼治右衛殿　中村杢右衛門殿　藤井市兵衛殿

より受取

一米　壱貫六百六十六貫二分八厘　大豆六十五石五斗三升　御用

代

一七百十六貫　武分五厘　塩噌等　御用代

一五百三十文　九分三厘　馬飼料　こしぬか　荒ぬか　并かも　代

一三十一人　四百七十七貫　宮津上下ニ於使

一十六人　百八十三貫三分九厘　日雇用

一六人　三十三貫　宮津ニ不使

一六人　百七十三貫　宮津御用代并ニ多分使ル

一五貫六百七十八貫七分　吳服代

一十四人　九十九貫　御牛人足出入日数

人ニ武分八分五厘九十九人　内ニ百四十五人ハ廣寸ニ在

御米間五百人前給ニ付五石ヲ引　残四千九十

九人内日用使ル人一日ニ三ツ

一武百六十一貫　町人足出入日数延六千八人　日用使

一三百八十貫　御本陣并ニ寺社方へ渡ス

内三十文　國領村　百石衛門　百三十文　笹村四郎右エ門

百三十九文　梅迫　善右衛門　武百十五文　田辺五兵衛

百二十九文　油良　長福寺　四十三文　栗田庄兵衛

京都府立総合資料館所蔵

三十人　田宮遠所同心頭二人　八十六人　成相惣持院
八十六人　文殊寺道和尚　二百十五人　宮津加兵衛
八十六人　川手浮專寺　三十人　竹田四郎右衛門
八十六人　國領三郎右衛門　八十六人　賀田内匠
宮津へ御見舞ニ參り候所ニ付也

一銀貳十一ノ二百九十一匁

内八貫四百匁　高百石ニ付五十匁宛下ル　貳八百六人　御小姓
九人　中小姓十九人　但知行取望中小姓共
百五十匁　長澤武兵衛以下三人ニ五十匁ツ　六十匁　野中甚兵衛以下
壹ノ七百匁　川合忠左衛門以下五十八人ヘ三十匁ツ
八十匁　九品三太夫佐藤半太ヘ　百四十匁　坊主以下四人ヘ三十匁ツ
五百匁　青長左衛門以下二十人ヘ二十五匁ツ

貫七百四十五匁　足輕十組　半甲組人數二百三五人　小頭二十
五匁ツ　足輕二十匁ツ
二百八十匁　忍ノ者四人　屋根ふき　二十匁ツ
壹ノ百五十匁　六尺十人　御草履取四人　御狩箱持四人
御具足持六人　中間等七十七人五匁ツ
貳ノ二百三十匁　中間百四十八人　内三人小頭　小頭二十匁ツ　中間
十五匁ツ

一銀三貫二百三匁四分　御切米取ニ付鑓具足為持ニ付御扶美

一貳十七ノ四百六十壹匁五分　石ニ四十六匁
此米五百九十六石九斗八升八合六勺
内十石九斗三升五合　宮津御立前鄉人足ニ付御扶持方
壹石二斗八升　中返り人足　周山大田ニ人足　御歸城ニ節

京都府立総合資料館所蔵

宮出ニて二泊御切米　十三石七斗七升三合六勺　中間二組宮津

御扶持　五十人分石程　御切米取　并　足輕其外御供廻り

右同新祓下御扶持　五百石　庚寅ノ年郷中間五百人前

給渡ス宮津ノ御供仕ル者祓下　十三石　御儀美ニ祓下

内四石　兵庫屋太兵衛以下四人宮津ノ御供致シ候者祓

下　九石　御領百姓ノ内御供望ミ候ものの九人ノ祓下

呉服物祓下覽

一　帷子　壱ツ　単物　壱ツ　鈴木伊兵衛殿ノ代三好彌次右衛門

一　同　竹田左陣　四郎右衛門

一　同　田邊左陣　五兵衛

一　同　宮津家老ノ油衣ノ者ノ使者　西川久左衛門

一　同　九鬼式部殿家老　西岡平兵衛

一　同　井田吉右衛門

一　同　九鬼彌一右衛門

一　同　九鬼權兵衛

一　帷子　壱ツ　同舟場出張　江口次五右衛門

一　同　水谷半左衛門

一　同　板崎角兵衛

一　同　清水孫左衛門

一　同　大嶋村庄屋式部殿領分出水肝煎ニ付　庄兵衛

一　同　同新ニ付　市郎右衛門

一　帷子　壱ツ　単物　壱ツ　谷出羽守殿家老福田四郎兵衛

一　同　福田角兵衛

一　同　佐原與左衛門

京都府立総合資料館所蔵

一同　　同上　　中村治郎右衛門
一同　　谷帯刀殿家老　岡本七右衛門
一帷子　武ツ　單物　武ツ　京極佐渡守殿家老　石東源五兵衛
一帷子　一つ　單物　一つ　同　石東宇右衛門
一同　同　坂本彌五衛門
一同　同　種村庄兵衛
一同　同　沼田傳右衛門

開城入城式最嚴重ニ行ハル頃ハシケレバ暑ス
石東源五兵衛ハ大石良雄ノ舅ナル一人ノ知る所ナリ

青山忠成　一足後一守俊　一忠重　前記参照　系図共
因幡守忠重　初名下野守元錄十五壬午ノ年ニ相續ス寶永
七年東山天皇崩御中御門天皇御即位アリ幕府ヨリ命ゼ

ラレ本多信濃守本多隱岐守石川主殿頭ト共ニ藩兵ヲ合セ
テ京都ヲ守衛ス但ニ藩ヲ交替在京ス享保壬寅ノ年十月
二十八日病卒ス藩主ヲル一十二年法號真正殿院清休義
泉大居士
因幡守俊春　父忠重ノ後ヲ承ケ享保十五年庚戌七月十八日
逝ス在職九年法諡玉雲院殿前因州大守榮嶽紹通大居士
篠山藩主六代略歴
因幡守忠朝ハ篠山ニ於ケル青山家ノ始祖ナリ美濃國郡上
郡八幡城主青山忠督ノ次男ニ生マル此ノ青山家ハ忠成（前ニ
出ダセル系図参看ノ一ノ次男大藏大輔幸成ノ裔ナリ寶永五年七月
江戸ニ生マレ享保十五年龜山城主俊春（前文ト系図ト参看ノ一ノ嗣子
ト為ル同年七月十八日養父ニシテ嶽父ナル俊春ノ卒スルヤ其

京都府立総合資料館所蔵

一同　同上　中村治郎右衛門
一同　谷帯刀殿家老　岡本七右衛門
一帷子　弐つ　単物　弐つ　京極侯殿家老　石東源五兵衛
一帷子　一つ　単物　一つ　同　石東宇右衛門
一同　同　坂本彌左衛門
一同　同　種村庄兵衛
一同　同　沼田傳右衛門

開城入城式最嚴重ニ行ハル煩ハシケレバ畧ス

青山忠成―忠俊―宗俊―忠重　前記参照　系図共
因幡守忠重　初名下野守元錄十五壬午ノ年ニ相續ス寶永
七年東山天皇崩御中御門天皇御即位アリ幕府ヨリ命ゼ

ラレ本多信濃守本多隱岐守石川主殿頭ト共ニ藩兵ヲ合セ
テ京都ヲ守衛ス但ニ藩ヲ交替在京ス享保壬寅ノ年十月
二十八日病卒ス藩主タル十二年法號真蓮殿院清休義
泉大居士
因幡守俊春　父忠重ノ後ヲ承ケ享保十五年庚戌七月十八日
逝ス在職九年法諡玉雲院殿前因州大守榮嶽紹通大居士
篠山藩主六代略歴
因幡守忠朝ハ篠山ニ於ケル青山家ノ始祖ナリ美濃國郡上
郡八幡城主青山忠督ノ次男ニ生マル此ノ青山家ハ忠成（前
出ダセル系図参看ノ）ノ次男大藏大輔幸成ノ裔ナリ寶永五年七月
江戸ニ生マレ享保十五年龜山城主俊春（前文ト系図ノ嗣子
ト参看ノ）ノ為ル同年七月十八日養父ニシテ嶽父（ニシテ）ナル俊春ノ卒スルヤ其

京都府立総合資料館所蔵

ノ封ヲ受ケ後五位伯耆守ニ叙任シ延享元年奏者番トナリ
三年因幡守ニ改稱ス寛延元年寺社奉行兼務同年篠山
城主クルベキ暴命ニ接シ篠山城主松平氏ト相代ハル亀山藩記
肇ヲ参ノ賜祿高五萬石寶暦八年大坂城代トナル後五位下
ニ叙セラレ在職三年大城(坂)中ニ卒ス齢五十三謚號隆興
院殿前因州大守四位真空紹觀大居士
下野守忠高ハ後五位下大膳亮青山幸侶ノ子幸侶ハ後名幸秀亦文
家ヨリ入リ相續ス前侯實子無キヲ以テナリ享保十九年十一
月五日江戸ニ生マレ寶暦四年宗家ニ入リ十年襲封シ後五位
下下野守ニ叙任シ天明元年隱居出願左兵衛督ト稱シ文
化元年有齋ト號ス同十三年八月廿四日卒ス謚號德峯院
殿前武衛次將孤峯有齋大居士

伯耆守忠講ハ忠良ノ長男明和二年十月十六日江戸ニ生マレ
安永九年後五位下伯耆守ニ叙任シ天明元年家督相續同
五年七月十八日卒ス齢僅ニ二十一謚號岱嶽院殿前伯州大守
紹觀紹勇大居士
下野守忠裕ハ忠高ノ次男ニシテ明和五年五月八日江戸ニ生
マレ天明五年忠講ノ子トナリ同九月十日家督相續ス同十二
月後五位下下野守ニ叙任ス寛政七年奏者番トナリ五年寺社
奉行ヲ兼ヌ同八年十一月西丸若年寄ニ任ズ西丸ハ將軍世子ノ
居處ナリ同十二年大阪城代拜命後四位下ニ叙セラレ享和二
年十月京都所司代ニ轉任シ侍從ニ叙任シ文化元年召サレ
東歸シ正月老中ニ任セラレ加判ノ列ニ加ル文政十年五月七
日遠江國榛原郡城東郡一萬石ノ地ヲ賜ハリ多年ノ功

京都府立総合資料館所蔵

勞ヲ嘉賞セラル實ニ異數ナリ、前文參ノ高合シテ六萬石ト
ナル天保六年五月六日職ヲ辭シ退隱シ雲岫齋ト稱ス七年
三月廿六日病ニ罹カリ卒ス謚號見龍院殿從四位下前野州
大守雲岫宗興大居士
下野守忠良ハ忠裕ノ第五子文化四年四月十日江戸ニ生マレ文
政四年十二月出仕從五位下因幡守叙任天保六年七月襲封
七年六月奏者番八年寺社奉行兼務十一年十一月大阪城代
トナリテ從四位下ニ叙セラレ下野守ニ任セラレ弘化元年甲辰執政
加判トナリ侍從ニ進ム五月十日江戸本丸燒失ニ付キ獻金ス嘉永
元年九月三日隱居元治元年十一月十五日病死ス五十八歳謚號
大量院殿從四位下侍從野州大守俊峰良英大居士
左京大夫忠敏ハ忠良ノ長男天保五年二月十一日江戸ニ生マレ嘉
永三年十二月從五位下因幡守叙任安政元年幕府ヘ誓書奉獻
ノ丁アリ將軍代替ハリノ例ナリ前將軍家慶薨シ新將軍家定
立ツヲ以テナリ誓文ハ御家ニ對シ奉リ先々代ノ通リ忠勤ヲ抽ン
ズベク少シモ異存ヲ挾ミ申サズトノ意ナリ時ニ外國事件數々起
コリ世情騷々敷キヲ以テ本藩外七藩ト京都守衛ニ任ス可ク
所司代ノ命ニ接シ一隊上京ス幕府ノ訓令ニ由リ武備ノ講習日
一日ト迫マリ上下寧日無シ文久三亥年將軍家茂上洛ニ付京
都防火警備ヲ兼務シ又一小隊上京滯留ス三月廿八日所司
代ヨリ留守居ヲ呼出シ公用人ヨリ口達シテ曰ク先般英吉利
國請願ノ開港通商御聞届コレ無キヲ以テ彼レヨリ戰端ヲ啓
ク可ク哉ヲ計ラレ難ケレバ其ノ用意アル可シト急使コレヲ篠山ニ
報ズ内外人氣平靜ナラズ同十月但馬國生野銀山ニ於テ謀

京都府立総合資料館所蔵

叛人起コレリトノ風説起コリ城下人氣騒然タリ所司代ヨリノ急
令ニ由リ出兵準備ス亀岡藩ノ部（参看ヒヨ）事治マリテ罷ム同四年藩
主士卒ヲ率ヒ上京シ天機伺参内ス當時天下ノ風氣京都ニ移リ
大名江戸ニ参覲セズ入京参朝ス之レ天皇ノ御機嫌ヲ伺フナリ
トテ天機伺ノ語流行ス之レヲ暫クシテ傳奏敕命ヲ傳ヘ下鴨
明神ノ警衛及ビ鷹ケ峰長坂邊一帶ノ警備ヲ擔任セシム傳
奏トハ朝廷幕府間ノ往復事務ヲ掌ル公卿ノ官名ナリ　長州藩
幕命ヲ用ヒズ外國船ヲ砲撃シ又兵ヲ以テ京都ニ入リ禁闕ニ直訴
セントスルヲ以テナリ　六月長州藩兵上京セントテ伏見山崎嵯
峨等ニ屯集スルヲ以テ幕軍會津兵ト共ニ出動ス長軍敗退スル
ヲ以テ驅逐ス　越前敦賀警備ノ若州藩ニ應援ス可シトノ幕命ニ
從ヒ龜山藩ト合議シ北桑郡領地ニ屯軍シ水戸藩脱兵隊ガ同

藩勤王ノ士ナル武田耕雲齋麾下ノ懷夷黨トナリ北陸道ヨリ西上シ
禁闕ニ訴願セントスルヲ防遏スルナリ　元治元年從四位左京大夫ニ進ム
慶應三年京都戒嚴幕軍大阪ヨリ北上ス官軍禦キ戰フ十二月末ヨリ
翌正月三日ニ至リ數戰ストノ報至ル藩主兵ヲ率ヒ亀山ニ駐マリ幕軍敗
走スト聞キ急ニ歸城ス一藩恐懼謀議數日夜ニ渉ルモ為ス所無シ
勤王藩薩長土ノ疑フ所トナリ譴責屢臻ル一藩俄ニ謹慎ノ意
ヲ表シ鎮撫總督西園寺公望卿ニ訴願シ城閉カレ倉封シ君主蟄
居シ家老以下職役禮服無刀出デ、迎ヘ管鑰ヲ納レ酒食ヲ供ヘ懇
請願切ナリ官軍之ヲ容レ一小隊ヲ出グルノミニテ前隊ニ加ヘ敕詞ヲ
傳ヘテ藩主ノ勤慎ヲ解キ官軍營ヲ拔キ去ル　總論南桑田郡馬路村
元治元年藩主ハ朝臣トナリテ藩知事ニ任セラレ　其ノ外家々參看ノ官軍ニ抗戰シタル東北大名ハ罪犯トナレリ
藩臣ノ内有為ノモノ拔擢セラレ知事ノ下僚トナリ治政ニ從事スルヲ

京都府立総合資料館所蔵

ト従前ノ如シ就レモ大夫士卒ノ三等ニ列セラレ後改メテ一般士族トナル二年六月封建制度廃止郡縣施治ノ法度建ツヲ以テ封土ヲ奉還シ藩主ハ華族ニ列セラレ同九月六日出城シ舊臣民ト相別レ妻子ヲ伴ヒ家令家扶舊臣中ヨリ家僕十數名ト發途東上シ六年三月廿一日ヲ以テ邸内ニ病死ス謚歸靈源院殿從四位愛宕嚴立峰大居士前數侯ノ謚号ヲトル

忠誠ハ忠良ノ第十子幼名鋪之丞東京府貫屬子爵トナリ從五位ニ叙セラル人ト為リ英毅ニシテ文思アリ前代ガ德川氏ニ忠ナル餘リ維新ノ新政ニ反キ朝廷ニ對シ反感ノ擧アリタルヲ慨キ如何ニシテカ此ノ汚名ヲ洗ハント苦慮罪日一旦奮起シテ陸軍士官學校ニ入リ業ヲ卒ヘテ陸軍歩兵少尉ニ任セラル進ミテ中尉トナリ常ニ節儉カ行シ家資ヲ捐テ、鳳鳴義塾ヲ舊城地ニ設ケ廣ク子弟ヲ招徠シ其ノ秀出セルモノヲ東京ニ送リ資ヲ給シテ諸學ニ分送就習セシメ又舊藩士ノ困窮ヲ救濟スルノ方法ヲ講ジ懷舊會ヲ設ケ吉凶禍福ヲ共ニシ且舊領民ニ惠恤スル等美舉良行枚數シ難シ故ヲ以テ偶展墓ノ為ニ當地ニ來ルアレバ毎戸燈幕ヲ設ケテ送迎シ生徒モ業ヲ止メテ祝福スルヿ祭日ノ如シ城池舊觀ヲ存在シ本丸ノ舊館ニ小学生群集勉學スル等鳳鳴義塾ト對照シテ文物ノ隆興ヲ見ルニ足ル青山神社内ノ石碑其ノ功績ヲ録ス參照ス可シ

篠山藩ノ行政機關制度一斑

城代家老青山長十郎ハ著者ノ緣類一家デアル兼ネテヨリ聞キ及ビ居ル事柄ヲ左ニ述ベントス之レヲ聞キタルハ間接ニシテ殊ニ著者ガ二十一二歳ノ頃與カニテアリタル時ノヿ又當時ノ京都町奉行與力不破トエフ家ガ雙方ヘノ緣類ナルヲ以テ左ノ話

京都府立総合資料館所蔵

複聞ナリ故ニ隔靴ノ憾ナクンバアラズ況テヤ封建ノ世トテ士風氣トシテ親族タリトモ主家ノ事ハ務メテ秘ノクルニ於テオヤ著者今年明治四十五年六十九歳コレヲ反顧スレバ四十又餘年ヲ經過シ朦乎トシテ雲烟裡ニ在リ筆ヲ援リテ今昔ノ感ニ耐エズ

藩政ノ基礎ハ一ニ範ノ幕府ニ来ル藩祖公卿ヨリ出デ王事ニ軼掌シタルニモ似ズ慶長元和以來心ヲ德川氏ニ傾ケ其ノ外様大名世臣ニ非ザルノ名ナリノ格式ヲ得タルト同ジノ興廢ヲ德川家ト共ニスルノ藩勢トシ幕府ノ大政問題アル時多クハ之レニ與リ其ノ内外輕重ノ趨勢ヲ知悉スルモノカラ移シテ以テ之レヲ篠山ニ植ウ故ニ江戸邸ニ於ケル政議ハ別トシテ篠山ニ於ケル民政ハ君主政廳ノ正面ニ坐シ城代一門ノ家老及ビ年寄家老ノ別名陪席スルコト幕府ニ於ケル大老閣老若年寄ノ如ク君主ノ親族ノ陪席スルハ幕府ニ於ケル尾張水戸紀伊三侯及ビ溜リノ間詰大名德川家ノ分家ニシテ水戸ノ紀州ガ侍坐傍聽スルガ如ク次ノ間ニ尾州ノ三家ニ亞ギタルモノ目附役人出坐スルハ幕府ニ於ケル大目附ノ加席スルガ如シ目付ハ高等警察ヲ為シ政務ニハ必參預ス其ノ日ノ問題ガ領内ニ起コレル民治上ノ一ナレバ管治專任ノ代官出頭シテ其ノ顛末ヲ陳ベテ所見ヲ白シ其ノ判ヲ請フ寺社事件ナランニハ寺社奉行出頭シ軍務事件ナランニハ物頭事由ヲ述ベ判ヲ仰グ等以下皆同ジ月番年寄其ノ所見ヲ陳述スルト幕府ノ月番老中ノ所為ニ同ジ其ノ言フ所違法ナリトセン乎目附コレヲ糺彈ス君主幼少ナル時ハ年寄中ニ御仕役ナルモノヲ設ケテ輔弼後見ス君主青年以上ナレバ自身判決ス先例政法ナルヲ以テ百中九十九マデハ舊記ニ由ルモノトス會議ハ裕筆コレヲ筆記ス

京都府立総合資料館所蔵

高六萬石ノ小名（世人ハ大ニシテ名ト呼ブ）譜代ノ藩ナリ四萬石餘ハ城下附近ノ地ニテ餘ハ北桑田郡南桑田郡船井郡及ビ攝津武藏遠江ノ三國ノ地ニ在リ城下ハ直轄支配ニシ離隔ノ所ニハ代官所ヲ設ケ代官附屬小吏ノ委任支配トス

君主一年ハ江戸ニ參勤シ一年ハ本國ニ歸住シテ政務ヲ視ル江戸ニ於テ職ニ就キ老中若年寄寺社奉行參者番城門警備等ヲ勤ムルトキハ歸國セズ城代家老國務ヲ專掌ス

火消ノ事　火消トハ防火隊ヲ云フ本藩龜山（龜岡）淀藩所高槻ノ五藩更代シテ之レヲ勤ム一ヶ月交替ナルヲ以テ月番火消シト呼ブ五藩孰レモ京都ニ邸第ヲ構ヘ平常留守居一名ト下僚數名トヲ置キ當番月ニハ騎士數名士卒數十人ヲ派出セシム其ノ入京退京ニハ火事裝束ニテ威容堂々隊伍整々看ルモノ

堵ヲ為ス　五藩ノ邸ニハ望火樓（火ノ見櫓ト呼ブ）アリ門内ニ防火器械ヲ貯ヘ防火夫ヲ養フ五藩ニ此ノ義務アルガ為ニ江戸見附番ヲ免ゼラル（見附トハ城門ニテ三十六所アリ）

防火夫ハ火方ト呼ブ帳外者トテ本籍無ク宿所モ無ク保證人モ無キ無頼者ガ防火事務ヲ以テ餬口シ所司代ト當番消火隊ニ雇ハレ居ルヲ云フ所司代ハ常ニ之レヲ飼養シ五藩ハコレヲ更互使役ス甲藩月番ナレバ甲邸ニ雇ハレ乙藩月番ナレバ轉ジテ乙藩邸ニ入ル此ノ火夫ハ滿身刺繡シテ或ハ龍虎文ヲ為シ禽獸狀ヲ為シ又ハ演劇的表狀ヲ為シ之レヲ以テ其ノ彫伴ノ誇トシ躰體ニテ市街ヲ往還シ意氣軒昂ス其ノ居ル所ヲ大部屋ト稱シ晝夜公然賭博シ常ニ貪宴ヲ免レズ給與ノ錢貨ハ即時失踪スル故ニ錢緡ヲ作リ之レヲ商工ノ家ニ強賣ス店主買ハガレバ罵詈シテ店舗ニ偃臥踞坐シテ妨害障礙ス故ヲ以テ其ノ

京都府立総合資料館所蔵

到ルヤ速ニ買フテ速ニ去ラシム商工家コレニ困シ其ノ部屋頭ニ賂ヒ其ノ来ラザルヲ乞フモノアリ（銭緡ハ銭差シト呼ノ藁ニテ作リ鈔九十六文ヲ差シ通シ百文ト呼ブ）火方ニシテ病ム者アルモ醫藥ハ給セズ大部屋ノ片隅ニ臥サレメ死スレバ南無地藏ノ坑中ニ遺棄ス南無地藏ハ屍體ノ遺棄所ナリ江戸本邸ハ工日比谷見附門内ニアリ　別邸ハ所々ニ散在ス登城スレバ溜間ニ伺候ス故ニ溜間大名ノ稱アリ行列ハ正式八々トテ徒士八人輿側八人コレニ連ナル二本道具トテ槍二本真先ニ並ビ行ク尤中ナル時ハ毎朝早足ニテ登退ス早足トハ刻ミニテ急歩スルヲ云フ途人コレヲ見テ其ノ大官ナルヲ知リ敬禮ス其ノ大城ニ臨ムヤ門衛大聲疾呼シテ　バイヤ々々々ト云ク門内之レヲ聞キ警備ス

藩主ノ参覲交替ハ大阪ニ出デ大津ニ向ヒ東海道ヨリス諸川暴漲ヲ虞ル時ハ中仙道木曽街道ヨリスル一モアリ斯ク為ス時ニハ尤中ニ出願スルモノトス

里程東海道ニ由レバ百二十七里餘此ノ餘トスフハ道中ニ穢鄉許多アリト雖コレヲ里程ニ容レズ算外ノモノトスレバナリ東海道ニハ天龍大井馬入其ノ他ノ諸川暴漲スレバ川留ノトテ往來杜絶シ往々數日ヲ驛中ニ徒渉セザル可ラズ故ヲ以テ木曽街道ヲ取ルヨトアリ此ノ路程百四十六里餘トス

大名ノ大川渡リハ陸路ノ行列ニ同ジク先供槍挾箱以下川越シ人夫ノ肩ニ倚リ連臺ト呼ブモノニ載セ徒士駕脇ノ士卒ハ川越シノ肩ニ乘リ君主ノ大連臺ヲ尤右前後ニ奉擁シテ渡ル君主ハ連臺上ノ輿中ニ坐ス輿ハ繩モテ連臺ニ堅縛スルモノトス恰川渡リ祭禮ヲ

京都府立総合資料館所蔵

見ルガ如ク君主ノ駕輿連臺ハ神輿ノ渡御ニ彷彿ク此ノ一擧ニ
要スル費目頗ル多シ

幕府ヘノ獻上品　盃臺　正月三日　漬松茸　二月ノ内ニ
瓜　暑中見舞　栗　寒中見舞　二種一荷ノ魚貝　江戸着ノ日　山椒　八月ノ内ニ
塩松茸　歳暮祝儀

盃臺ハ木杯ト木臺ニテ禮式品ナリ是ハ江戸ノ專門木具屋ニテ購
入シ二種一荷ノ魚貝モ亦江戸ニテ購入ス其ノ他ハ皆國産ニ係ル
嘉永以後天下多事幕府ノ虛禮空式往々廢格セラレ萬延年
中亂離相踵ギ獻上品ニ至リテモ漸次粗雜トナリ出スモアリ出
サヾルモ在リ參覲ノ中止トマデ成リ元治元年甲子正月ヨリ御所ヘ奉
貢スルヿトナリタリ

藩藏ノ逸品　吳偉ノ畫ケル山中高隱ノ圖ハ雙幅絹本竪六
尺二寸五分幅三尺四寸八分淡彩ヲ施シタリ
因ニ記ス大名旗下士ノ懸軸ハ大抵幕府繪所狩野伊川院又
ハ狩野晴川院ナドノ大幅ニテ好事ノ侯主ナラザルニ於テハ藏幅ノ
風雅高尚ナルモノハ高閣東置セラレタリ

藩臣制度ト沿革

三役　家老　中老　用人　文官ニテ政務ヲ取ル　祿千石以下數百石
番頭　物頭　奉行　旗奉行若ハ奉行ノ類　武官ニテ給人中ヨリ勤ム
給人　幕政法度ニ定ムル所ハ知行所ヲ給與セラレタルモノヲ云フ當藩
ハ藏米ヲ給與セラルヽモ給人ト呼フ知行取トモ呼フ其ノ數二百
四十餘家アリ　吉原善右衛門　蜂須賀小平太　青山孫平太
青山惣左衛門室九左衛門　丹羽平左衛門　金森與左衛門
浦山與右衛門　那波七郎左衛門等　天保年代ノ人ハ家老職ニ就

京都府立総合資料館所蔵

クヽヲ得ル譜代ノ重臣ニシテ數百石ノ高ヲ持ツ者

城代家老青山長十郎ハ代々第一重臣ニシテ分家ナリ

郡代ハ直接民治ニ當ル職ニテ亦給人中ヨリ出頭スル掟ナリ

目付ハ監察トモ呼ブ非違ヲ糺問スル職ナリ

勘定奉行ハ用人ノ内一名コレヲ兼務ス會計ノ總裁ナリ此ノ下ニ

勘定吟味役　元締　手代　等アリ

扶持人トハ徒士役人ヲ總稱ス祿高無シ扶持米ヲ受ク扶持米トハ

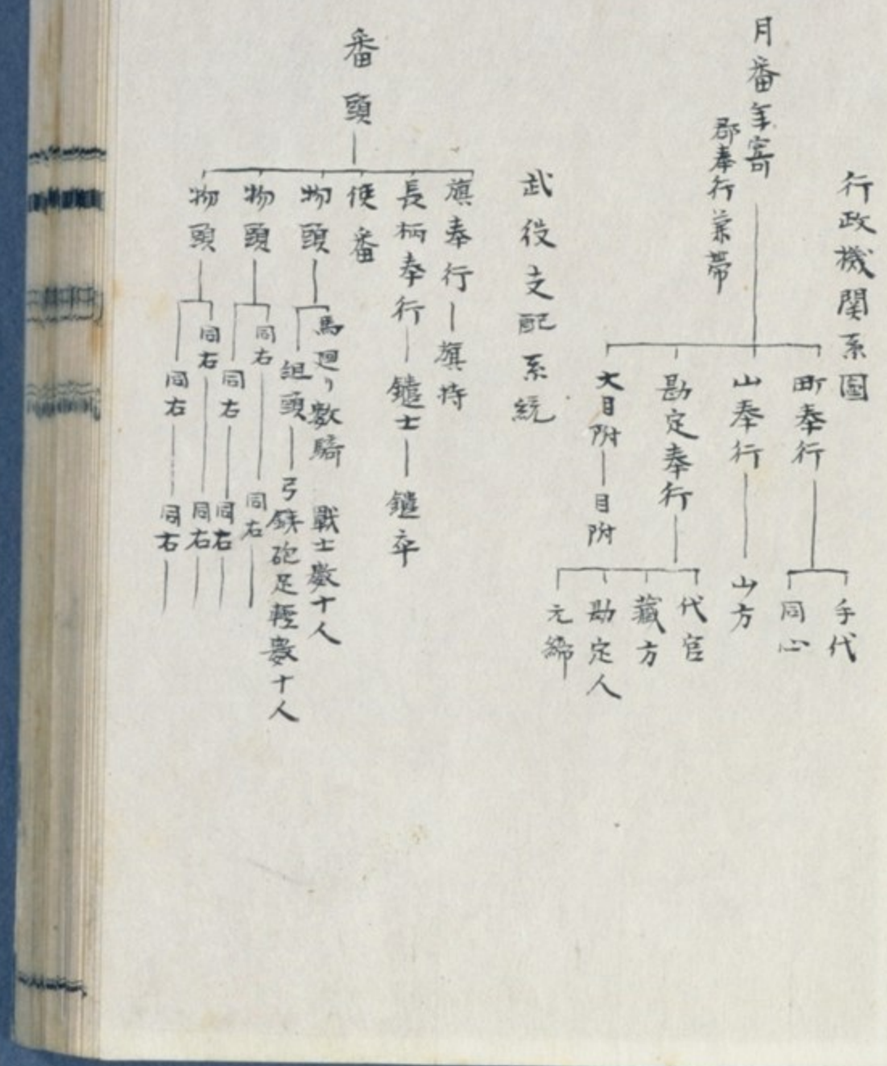
一人一日玄米五合ニテ幾人扶持又ハ幾十人扶持ヲ給與セラルヽモ

ノトス

徒士トハ騎士ニ對スルノ名稱ニシテ武職ナレドモ代官藏方山方其ノ他

諸役ヲ命ゼラレ諸長官ノ下僚トナル

足輕ノ家五百五十餘アリ



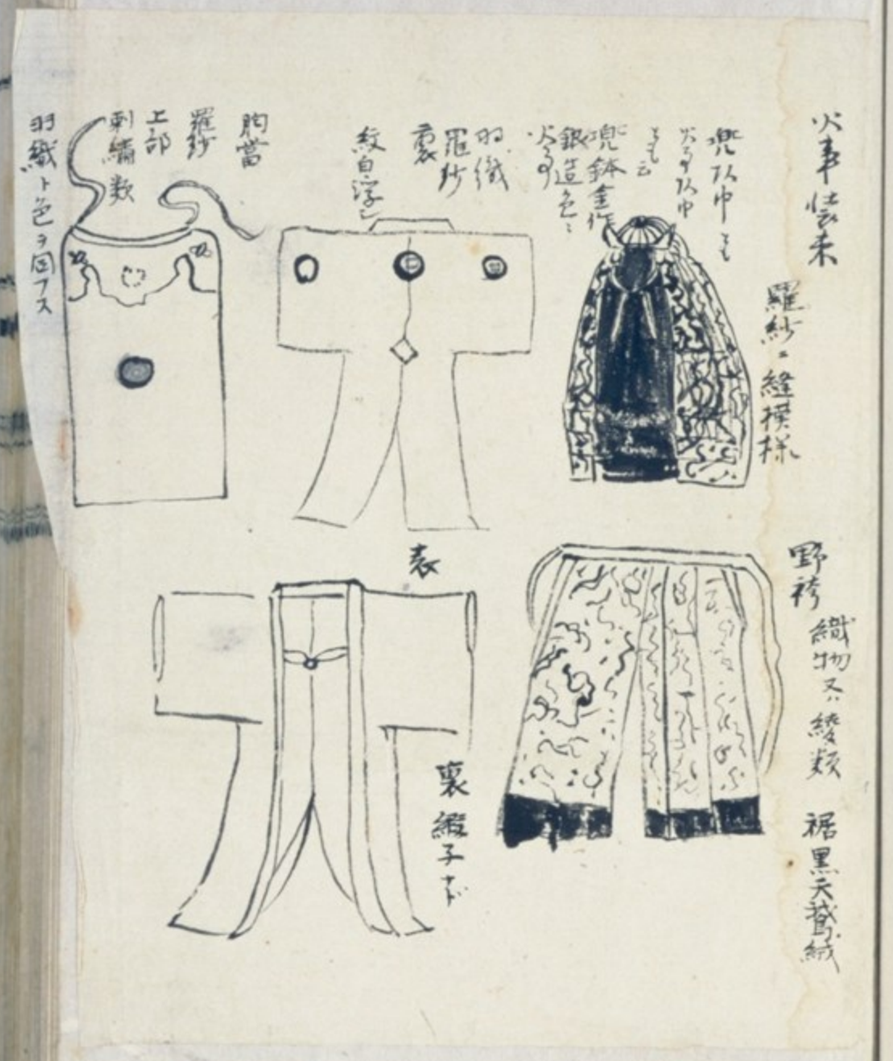
京都府立総合資料館所蔵

内役系統

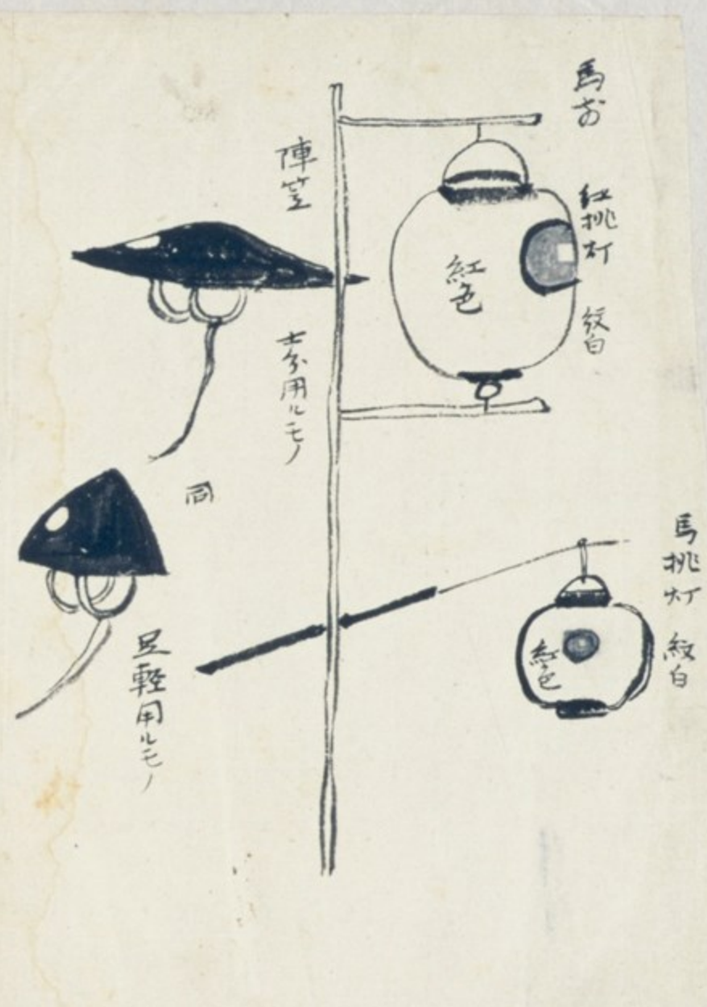
月番
年寄
- 小姓支配 — 小姓 — 小役人
- 用人 — 小役人
- 側用人 供頭及ビ徒士頭ヲ兼ス — 小役人
- 取次 — 小役人
- 留守居
- 小納戸 — 小役人

京都府立総合資料館所蔵

京都府立総合資料館所蔵



京都府立総合資料館所蔵



京都府立総合資料館所蔵

右ノ内江戸永住ノモノ在京ノ者地方ニ代官トシテ永住スル者等種々ニ分類セラル

戰時ニハ物頭隊將トナリ番頭副隊將トナリ給人徒士ヲ戰士トシ足輕ヲ戰卒トス君主出軍スレバ君主大將タリ士ハ甲冑ヲ藏ス卒ハ給與セラル

元和ノ制　軍役　馬上九十騎　鉄砲　鐵ナリ百七十挺
　　弓三十張　鑓八十本　但長柄持鑓共　旗十本

會計法ハ一年中ノ入貫定額大率先規前例ニ因リ豫等シ收納ノ一分ハ江戸邸ニ送金シ一分ハ國費ニ供ス

年貢米ノ事

封建制度ノ下ニ在ル諸領主ガ施政方法ヲ異ニスルハ當然ノ事ナルガ年貢米銀納取立ノ方法千差モ亦往々一定セズ桝目

京都府立総合資料館所蔵

サヘモ異ナル所アリテ種々ノ煩累ヲ免レズ加之ナラズ壓制強迫サヘ之レアリテ増米迄米等ノ名稱ヲ以テ苞腹ヲ盈タシガ亀岡町ノ分ヲ参考セヨ篠山藩ニモ至リテハ一俵ノ内量ヲ五斗五升トシ猶一俵ヲ以テ一石ト定メ之レヲ以テ納租シ來リシヨリ市場ノ價格ヲ見テ篠山藩米ノ高率ナルヲ訝レル人アルハ蓋ヨレガ爲ナリ

石ヲ以テ打切リトス　他領ニ於テハ斗升合勺ヲ數ヘ込ミ農耕地ノ餘裕ヲ少シモ許サズ計上シタルガ此ノ藩ハ往昔汪洋ノ遺風ヲ存シ斗升ノ數ニ目ヲ寄セズ石ヲ以テ打切リタルハ天晴大藩國主ノ風致アリ當時態度ノ汪洋寛綽ナル人アレバ之レヲ評シテ大名然タリナド言ヘルガ租税徵收ニ至リテハ合勺ヲ爭ヒ匹夫匹婦ノ採算上ニモ劣ル行爲アリ此ノ藩ノ行爲ハ実ニ比稀ナル所ト

ス

租米ハ之レヲ公費ニ付官之レヲ管理シ已納未納銀納其他ノ收納ヲ明記シ勘定奉行所ヘ差出ス奉行ハ掛カリ用人ト共ニ之レヲ保管シ一分之レヲ江戸ニ送リ餘ハ藏奉行ニ引渡ス

明治四年藩札流通高五萬二千二百四十四圓五十錢八厘是レハ大藏省發行ノ金札ニ換算シタル價格ナリ其ノ呼價ニ至リテハ大凡ソノ倍額ナリキ無制限ニ發行シタル惡結果ナリ（亀山藩札見合セノ）

丁大金入用ノ事アレバ例ノ御用金ヲ命ジ人民ヨリ納銀セシムル之レニ由リ一時不換紙幣藩札ノ丁札ニハ引換ノ丁ヲ明記スレドモ其ノ實無ク愈ガ上ニモ増スノミナリノ減少シ相場ノ差ク高マルヿアルモ一時ニシテ熄ム

當藩ノ御用金（亀岡ノ部ニモ出ダス参看ノコト）勝手掛カリ家老ヨリ用途逼迫ノ旨ヲ報ジ重臣密議ノ上コレヲ君主ニ告ゲ其ノ許

京都府立総合資料館所蔵

可ヲ得テ執行ス其ノ手續キハ代官ニ命ジ造酒株主造酒業ハ制限アリテ株式ヲ有スルニ非レバ漫ニ醸造セシメサルヽ田地山林所有者富民等ヲ計上セシメ夫レ相應ノ出銀ヲ命ジ庄屋ヲシテ之レニ當タラシム庄屋ヲ勤ムルモノハ大抵資産アルモノ故コノ選ニ漏ルヽ無シ其ノ命令ノ言ニ曰ハク御上ニハ近来御物入多ク御難義御心配遊ハサルヽヲ以テ其ノ方共モ御助勢申シ上グ異々御賴アラセラル、故精々御趣意ヲ能ク辯ヘ申シ上グ可レ云々ト而シテ其ノ期日ヲ示ス稀ニハ忠義ヲ標榜シ進ンデ出金スル者無キニシモ非レド南亲田郡千代川村字千原ノ永田清左衛門ガ亀山藩ニ於ケル ナド已ムヲ得ズシテ唯諾応者比々皆是ナリ中ニハ執酬ノ權利ヤ名譽ヲ博得セントテ應ズルモノサヘ有リ其ノ報酬トシテ得ル權利名譽ハ

式帶刀　式日ノミ禮服帶刀ナリ両刀スルノ名利

旅帶刀　旅行中両刀佩用ノ權アリテ道中藩臣ノ名ヲ唱フルヲ得テ輕侮ヲ免レ宿驛ニテ士人ノ待遇ヲ得

是レ等ノモノヲ金郷士ト呼ビ由緒アリテノ佩刀郷士ニ別ガツ

門長屋　長屋門ト モ云フ　許可　路次門許可　中庭ノ門ヲ云フ

破風許可　玄関許可

其ノ他式日登城ナド細大記スベカラズ　式帶刀ハ天保時代銀貳貫匁三貫匁位身代ニ應ジテ許可ス中産以下ノモノトランニハ百匁位ニテモ獲得スベシ相庭アリテ相庭無シトカヤ

北亲田郡鶴ヶ岡村石巻長兵衛石巻長左衛門両家相競フテ士分トナリタル一話参看スベシ

土民ノ士分ニ對スル態度　徳川幕府ノ制度トシテ戰國ノ遺風トシテ士臣ノ勢力ガ農工商人ノ頭上ニ加ハルハ珍クラレカラヌ事ナガラ天下ヲ擧ゲテ當藩士ホド土民ノ尊敬ヲ受クルハ少

京都府立総合資料館所蔵

カル可シ本郡ノ土民ガ士人ニ逢フヤ被リ物ハ之レヲ脱ギ露ハセル肩ハ之レヲ掩ヒ高屐ハ之レヲ降リ頭手ヲ下ゲテ一禮ス田ヲ耕スモノ草ヲ刈ルモノ亦同シ著者ガ明治元年四月歴遊シテ一タビハ其ノ良俗ニ感ジタルモ答禮ノ煩シキニ堪エザリキ今回（明治二十三年）ノ再遊ニハ人情一變シ高帽髞韡ノ紳士通過スト雖乗馬帶劍ノ軍人来往スト雖相顧ミスシテ冷然タリ故老曰ハク昔ノ禮儀ハ不用トセラレ裁判所ハ必用トセラル云々

士族七百餘戸　三等ニ分類シ上中ヲ士族トシ下等ヲ卒トシ上中ニ於テ上士中士下士ノ別ヲ立テタルガ終ニ全般士族ノ稱トナレリ

士族ニ秩祿公債ヲ下附シテ家祿ヲ廢止シタルノ結果目前ノ快一時ノ娛ニ耽リ前途ノ經濟ヲ立テ策ネタルハ天下ノ士族滔々皆然リシニ當藩ハ舊藩知事（舊君公）ノ恩惠ニ由リ士族授産ノ法ヲ立テ懷舊會ヲ組織シ恒産ヲ建テシノミナラズ其ノ離散スルヿ遲ク困阨ニ陷ルヿモ寡カリキ由リ他藩ニ比スレバ篠山名物　半月煎餅　栗羊羹　篠山燒　王子山燒

デカンショ歌

勘定役本郷兵太夫ハ算法堪能ノ士ナリ或時君侯ニ侍坐ス君侯其ノ謹軟ナルヲ聞キ居タレバ之レヲ試ミタルニヤ之レニ向ヒ百文ノ半分ハ何程ゾト問フ兵太夫一禮シテ算盤ヲ貸シ給ハンヿヲ乞フ君侯哂フテ侍臣ニ命ジ勘定役所ノ算盤ヲ取リ来ラシメテ之レヲ與フ兵太夫恭シク上段ノ連珠ヲ彈キ上ゲ下段ニ百文ト置キ二ヲ法トシ二一天作ノ五ト呼ビツヽ算法ノ如クシ曰ハク御尋ノ數ハ慥ニ五十文ト心得マスルト對ヘタリ（弘化年間ノ事トモ元治頃ノコトトモ云フ藩中ノ傳說）

京都府立総合資料館所蔵

學政一斑

德川幕府始政ノ一トシテ一藩一校ノ制立テ諸藩漸次學政ニ志ス所トナリ本藩モ亦城内ニ學問所ヲ設ケテ子弟ヲシテ從學セシメタリ寛延四年九月大阪ヨリ町儒者ノ關世美ヲ聘シ有志ノ者ヲ就學セシメタリ之ヲ城主青山忠朝ノ時トス明和三年藩士ノ學ニ志スモノ增加スルヲ以テ學舍ヲ城外西堀端ニ設ケ世美ヲ學士トシ舍ヲ振德堂ト名ヅケ學校ノ制初メテ立テラレタリ之ヲ城主忠高ノ時トス天明年間京都ヨリ町儒者福井軌ヲ聘シ世美ノ子延恵ト共ニ學業ヲ司ラシメ振德堂ノ傍ニ養正齋成始齋攀桂樓ヲ增築シ一大面目ヲ改メタ

京都府立総合資料館所蔵

二齋ハ修學ノ所ニシテ樓ハ孔子ノ像ヲ安シジ春秋釋菜スル所トス　藩士ノ子弟八歳必ズ入リ學ビ十五歳退學ス謹義日ニ往聽スルハ隨意トス幼時入學セズ又ハ入學シ能ハザルモノハ相續又ハ他家相續スルヿヲ許サズ下等ノモノ足輕等ハ此ノ限リニアラズ所人百姓ニモ入學ノ許可アリタルモ来リ就クモノヲシテ嘉永年間渡邊崋山ヲ招聘用セラレ大ニ振興ス學術ハ經書歴史等ノ漢學ニ尊術習字本邦禮式等トス維新ヨリ以來皇學洋學醫學等ヲ加ヘタリ

武術ハ藩士ノ其ノ術ニ長ゼルモノヽ宅ニ演場ヲ設ケシメ弓馬槍刀砲銃兵學柔術等ヲ教授シ藩ニ

シヲ保護特勵シタリ生徒ノ入學退學年限相同ジ

篠山小學校緣起ノ碑アリ安藤直紀ノ文明治八年二月建立　培根達校ノ碑亦同ジ

鳳鳴義塾　舊城内北新所ニアリ　明治九年藩主創設ノ藩學ヨリ維新後設立ノ篠山中年學舍トナリ更ニ同十七年ニ此ノ義塾トナル其ノ略歴ハ同年士族有志ヨリ成ル中年學舍ニ舊藩主青山忠誠ヨリ金五千圓ノ寄附アリ十年東京ヨリ教師數名ヲ招雇スナ一年ニ之ヲ郡ニ移シ郡立篠山中年學校トス舊藩主ヨリ毎年更ニ金貳百圓ヲ寄附ス同十七年中學校規定ノ發布アリ此ノ校ノ規模ト相容レザル所アルヨリ廢校シテ之ヲ私塾トス此

京都府立総合資料館所蔵

ノ變更ニ由ル資金四千圓是レ亦青山家ノ出資ト
ナル　名稱ヲ更メテ私立中學鳳鳴義塾トシ舊藩
主塾主トナル忠誠卒後嗣子忠允相襲キ其ノ任ニ
當ル同四十年皇太子山陰行啓ノ際金五十圓ノ下
賜アリ之ニ添フニ懇篤ナル御口上書アリ御使コ
レヲ携ヘテ臨校セリ四十三年忠精父ニ襲キ塾主
トナル四十四年二月ニ御宸影ヲ拜受ス
抑此ノ塾旨ノ在ル所ハ尚武ニアルヲ以テ塾舍ハ
素樸ニシテ黒木荒壁以テ藩校當時ノ姿ヲ存シテ
謝金ノ徴收ヲモ爲サズ銃意精神鍛錬ニ從事シ明
治十二年卒業者ヲ出ダスヿ三百餘名就中海軍將
校百五十餘名ヲ算シ高等學校專門科ヲ卒ヘテ高

等官トナリ又社會ノ各方面ニ相當ノ地位ヲ有ス
ルモノ頗多諸學校ノ試驗ニ應ズルモノ大抵合格
シ就レモ母校ノ名譽ヲ揚ゲタリ現在二百五十名
ノ生徒ヲ有ス大正九年四月ヨリ縣立中學校トナ
ル　出身者本郷大將　石橋堀内両中將　大西軍
醫総監　市瀬箕原室谷博士等以下略
同年青山家藏品骨董類賣却金寄附
門内ノ建學碑ハ福澤諭吉ノ題字ニテ芳野金陵ノ
撰文　碑陰記ハ渡邊弗措ノ文ナリ
渡邊弗措　氷上郡柏原出身ノ田邨信大臣健次郎
ハ明治末年神戸諏訪山西常磐ニ滞在中恩師弗措
ノ墓ヲ展有ス墓ハ和田岬増上寺外墓地ニアリ昔

京都府立総合資料館所蔵

懷シミノ涙ヲ浮ベニ語ル弗措先生ハ予等夢寐忘
ル可ラザル恩師ナルガ物故セラレテ今年デ三十
三回忌ニナルノデ感慨ノ切ナル所先生ハ一代ノ
鴻儒ニシテ兵庫縣ノ三儒者但馬ノ池田草庵丹波
ノ小嶋省齋ト先生ト當時著聞シタモノデ先生ハ
此較的名ガ聞コエズ ソレハ先生ガ功名ノ念ニ
皆無デアツタ故デアルガ實際ニ於テハ三人者中
嶄然頭角ヲ拔イテ居タ他ノ二家ハ博學能文ノ方
デアツタガ先生ハ氏政經濟ノ思想ニ長ジ天下ノ
趨勢ヲ達觀セラレタ維新當時早クモ息靜ニ佛
語ヲ學バシメタ位デアル此ノ事ニテ其ノ一般ガ
窺ハル云々

渡邊弗措先生碑

丹波篠山有儒者曰渡邊君諱世煩字伯信號弗措幼
好讀書上口即成誦十五遊京師從猪飼敬所學敬所
甚愛之視猶子大塩後素每詣敬所置于座發疑試之
君應對審敏後素大嘆賞丹波守福井氏多藏書常就
讀之業益進敬所說經於搢紳家有事故必使君代往
踰十年歸藩侯命往學昌平黌與四方才俊周旋時出
歷游諸國伺察時勢幕府末造天下多事君爲人推濟
疎放不屑々世故一旦絶念功名歸國下惟教授遠近
譽應絃誦之聲遍郡邑爲藩學教官兼侍講後進骨學
兼郡宰藩主靈源君特敬禮之君說經循々遵舊說而
出入古今貫穿百家融會洽歸於大中故聽者饜足

京都府立総合資料館所蔵

淡于利恣其在江戸人勧以室祿仕他藩君固辞不肯
但應諸侯招往講經會藩君還橐空不得上途人又
勧告別諸侯獲贐必多君笑曰吾不堪煩殤遂典衣物
不告而發平生著作喪然灰快一夕罹災蕩盡君絶無
愛惜色其意謂雕蟲末技何足介懷後有意再作而遂
不果交游皆一時名碩佐藤一齋嘆曰不意篠山小藩
而有此儒者也余在昌平與君同學倏忽三十餘年不
得復相見方今儒學三衰如君存於一方足以強人意
而今又亡之可不惜哉君游攝州神戸居一年得病明
治十八年三月十日卒年六十八葬湊川西門人建碑
篠山王地山面雲川々々丹之巨浸君在神戸思鄉曰
吾當爲雲川漁夫因相此地請余記碑隈考諱世敏姓

長澤氏君有至性事父母奉養備至居喪哀毀骨立觀
者泣下娶箕泉氏生五女無嗣養平野市兵衛子配長
女爲後名世誠先死孫胡太郎襲家

義士　寺坂吉右衛門信行

元祿十五年極月十四日ノ曉ナラヌ前ニ東都本所
松坂町ナル吉良上野介義央邸ニ夜襲シテ本懷ヲ
果シタル浅野故内匠頭ガ遺臣大石内藏助ヲ初ト
シテ四十七人ハ孰レモ三代相恩ノ君臣關係アル
者ノミニ非ズ新規召シ抱ヘラレタル者モ加ハリ
大臣士分ノ者ノミナラズ最下等ノ足輕ニモ加ハ
リタル者アリ所ハ寺坂吉右衛門其ノ人ニゾアル
吉右衛門ガ生ヒ立ヲ尋ヌレバ口碑ニ傳ハル所頗

京都府立総合資料館所蔵

多ク事ノ稗史小說ニ類スルモノ多キ所ヨリ話題ニ上ル道行キ演味ノ真ヲ失フ勝シトセズ左ニ其ノ真相ヲ寫シ世人ノ耳目ニ供セン

丹波篠山ノ藩士吉田忠左衛門兼亮（前段ノ吉田忠太夫兼徒ノ後稱トモ）（前段参照）ガ其ノ菩提所ナル西興寺ヘ佛参シ歸途小坂ノ邊ニテ小兒ノ啼聲ヲ聞キ人影モ無キ所ナレバ之ヲ訝リ僕ヲシテ聲ヲ傳フテ尋ネシムレバ生後百日ヲモ經サル偶然ナル男子ニ一ツ身ヲ着セ蜜相箱ニ入レ傍ニ風車ヲ立テタリ之ヲ看タル忠太夫ハ慈心勃然トシテ湧キ出デ西興寺ヘ引返シ住持ノ僧ニ心中ヲ語リ後日ノ證據ニトテ住持ノ立會ヲ乞ヒ之ヲ携ヘテ家ニ歸リ妻ニ其ノ意中ヲ聞カセ乳ノ無キモノカラ里子預カル百姓家ヲ捜ガサセテ其ノ生長スルマデ養育セシメ稍長ズルノ後己ガ家ニ引取リ紀念ノ爲トテ氏名ヲ寺坂吉右衛門トハ命ケヌ演劇ノ寺岡平右衛門ヅ此ノ人ナル試ニ習字サセ讀書サスルニ能ク勉ムルヲ以テ武術ノ一通リヲモ授ケ行ク末賴モシゲアル若者ヨト樂ミ育テサタルニ忠太夫ハ病死シ長子忠右衛門家督ヲ續ギ親ヨリ受ケタル軍學師範ヲ勤メ日々出勤スル内ニ吉右衛門ト吉田家ニ來リ居ル遠緣ノ娘ニテ下婢トナリテ働ケルヨシト呼ブモノト密通シテ子マデ孕ンデ居ルヲ知ラヌカ又ハ知ラヌ顔シテサルノカ忠右衛門ノ了簡ガ判ラヌ士

京都府立総合資料館所蔵

京都府立総合資料館所蔵

多ク事ノ稗史小說ニ類スルモノ多キ所ヨリ
ニ上ル道行キ演味ノ真ヲ失フ歟シトセズ左
ノ真相ヲ寫シ世人ノ耳目ニ供セン

丹波篠山ノ藩士吉田忠左衛門兼亮（前段、吉夫兼毫ノ後略）
（前段参照）ガ其ノ菩提所ナル西興寺ヘ佛参シ歸途
ノ邊ニテ小兒ノ啼聲ヲ聞キ人影モ無キ所ナ
之ヲ訝リ僕ヲシテ聲ヲ傳ノテ尋ネシムレバ
百日ヲモ經サル僅強ナル男子ニ一ツ身ヲ着
柑箱ニ入レ傍ニ風車ヲ立テタリ之ヲ看タル
夫ハ慈心勃然トシテ湧キ出デ西興寺ヘ引返
持ノ僧ニ心中ヲ語リ後日ノ證據ニトテ住持
會ヲ乞ヒ之ヲ携ヘテ家ニ歸リ妻ニ其ノ意中

カセ乳ノ無キモノカラ里子預カル百姓家ヲ
サセテ其ノ生長スルマデ養育セシメ稍長ズ
後已ガ家ニ引取リ紀念ノ爲トテ氏名ヲ寺坂
衛門トハ命ケヌ演劇ノ寺岡平右衛門ヲ此ノ
ル試ニ習字サセ讀書サスルニ能ク勉ムルヲ
武術ノ一通リヲモ授ケ行ク末賴モシゲアル
ヨト樂ミ育テサタルニ忠太夫ハ病死シ長子
衛門家督ヲ繼ギ親ヨリ受ケタル軍學師範ヲ
日々出勤スル内ニ吉右衛門ト吉田家ニ來リ
遠緣ノ娘ニテ下婢トナリテ働ケルヨシト呼
ノト密通シテ子マデ孕ンデ居ルヲ知ラヌカ又
ラヌ顔シテサルノカ忠右衛門ノ了簡ガ判ラ

トシテ有ル可ラザル醜體ナラズヤ斯ノ如キ師範役ノ軍學ハ之ヲ聞クベカラズナド一時ニハツト評判ヲ立テラレケレバ忠右衛門モ今ハ捨テ置キ難ク吉右衛門ヲ呼ビ蜜相箱ト一ツ身ノ着物ヲ與ヘ疾ク出テヨ汝ノ心中ニ覺アラント女諸共ニ放逐ス吉右衛門ハ進退谷マリ城内ヨリ出デ當途モ無ク蜜相箱ト一ツ身ノ衣類ヲ持チ町中ヲ歩ム處ヘ出逢フタハ吉田家出入ノ魚屋金八デアル一伍一什ヲ聞キ之ヲ吾ガ家ニ伴ヒ住マハセル所ヘ其ノ跡ヲ逐フテ來タハ妊婦ノヨシ是レモ裸體ニ袖無シヲ引キ掛ケサセラレ裏門ヨリ逐ハレ漸尋ネ當テ、此ノ家ニハ來リシナリ兩人相對シテ默然タルヤ時吉右衛門ハフト女ノ背ヲ見ルニ一物アリゲナレバ之ヲ撫デ何物カト尋ヌレバ女ハ知ラズ曉ガセテ改ムレバ金五十兩ト一通ノ手紙不思議ナルコト開キ見レバ忠右衛門ガ妻ノ手跡ニテ一面ハ意見ノ文句一面ハ此ノ金ハ腹ノ兒ニ與ヘル江戸ヘデモ出テ身ニワニ成レ折モアラバ謝罪シテ再勤セヨトノ意味ナレバ兩人ハ且讀ミ且泣キ好意恩意ヲ如何ニシテ報ズベキトゾ感ジタル吉右衛門ハ江戸ヘ出ル魚金ノ親類ノ世話ニ成ル八百屋六兵衛トテ大商人デ人手少キ所ヘ善ク働ク丈婦ヲ獲テ大ヒニ喜ビ頗ヲ店ノコトヲ任カセ遂ニハ内ノコトヲモ委ネ六兵衛ハ四國遍歴兼ネテノ思願

京都府立総合資料館所蔵

ヲ達スル好キ折トテ夫婦ハ飄然ト旅途ニ上リヌ
其ノ内ヨシハ分娩シ一女兒ヲ擧ゲ名ヲカヨト命
ケタルガ是レゾ演劇ニテノオカル其ノ女ナリ嗚
呼不運ナルカナ吉右衛門夫婦委任セラレタル家
屋ハ類焼セリ十三年ニ四度ノ火災是レガ江戸ノ
者ナラシニハ火事ハ江戸ノ花ト見ルベキデアル
ガ田舍出ノ吉右衛門夫婦ニハ如何ニ悲如何ニ酸
ナル最後ノ火災ニ出逢フタ當時資本ハ皆無漸〳〵
其ノ日々々ヲ送ル内ニ高用ノ歸ルサ愛宕下旗下
士某ノ窓下ヲ過ギ何心ナク仰キ見レバ是ハ如何
ニ舊主忠右衛門ノ妻十三年ノ間片時モ忘レヌ恩
アル人ノ伜吉右衛門ハ門番所ニテ聞キヌ又モ吃驚

子細ヲ聞ケバ故アリテ籐山藩ヲ去リ浪人シテ
新ク親類ノ厄介ニナツテ井ルトノ丁忠右衛門ヨ
リ聞キ取リ何トカシテ舊恩ヲ報ゼバヤト時々少
々ノ土産物ナド持參シテ夫婦交ル〳〵音ヅレタ
ル或ル日吉右衛門ハ舊主ノ妻ニ前途ノ丁ナド尋
ヌルニ淺野家ヨリ吾カ夫ノ軍學アルヲ以テ新知
五十石ニテ召シ抱ヘシトノ申込アルモ士ノ用具
タル鎧兜ハ櫃ノマヽ質屋ノ庫ニ在リ禮服サヘモ
調ヒカヌルヲ以テ今ハ緣無キヿト斷念ストノ丁
シテ其ノ金高ハト尋ヌレバ五十兩トノ丁歸
ツテ之ヲ婦ニ語ル ヨシ曰ハク前年御暇ノ時着
物ニ縫ヒ附ケ下サレタルモ五十兩 縱令吾カ身

京都府立総合資料館所蔵

が如何ニナルトモ此ノ金ヲ調ヘテ舊恩報ビ奉ラセント苦慮辛思コレヲ傍ニ聞ケル女兒カヨハ吾ガ身ヲ賣ツテ忠義ヲ立テヽハト泣キ〳〵勸ムル言葉ニ感動シ不義ノ爲ニ御手打ニナルガ御武家ノ定法ナルニ其レサヘ成サレズ剰ヘ五十兩ヲモ下サレタル御恩報ビハ娘ノ一言ニテ決シ娘ノ命モ舊主ノ恩誼ト年ハ行カネド平常父母ヨリ聞キ牢タルコトヲ欣然トシテ吉原廓ノモノトハナリヌ是レニヨリ支度モソコ〳〵調ヒタレバ妙人ト共ニ浪野家ノ目見ヲ濟マセ長ラクノ浪人モ今ハ一個ノ藩士トナリ軍學從トナルニ附ケ吉右衛門モ共ニ出仕スルコトナリ足輕トシテ江戸邸ニ住ミヌ不慮ノコト起ルニ及ビ吉田兼継ニ請フテ曰ハク某微賤ナリト雖ドモ國恩ヲ荷フ義コレニ背クニ忍ビズ願クハ生死ヲ共ニセント兼継其ノ志ニ感ジ大石良雄ニ請ヒ盟ニ與ラシム明年兼継ニ從フテ江戸ニ關難嶇嶇スレドモ未嘗テ相離レズ既ニ仇ヲ復シテ泉岳寺ニ至ル同盟相議シテ信行ヲ安藝ニ還シテ長廣ニ報ゼシム（同盟中ヨリ吉右衛門ヲ選ビ遠路ノ飛脚タラシムルハ其ノ足輕ナルヲ以テナリトハ外諸トヤ云ハン○長廣ハ長矩ノ家ニテ本家藝州侯淺野氏ノ嫡督中ニアルモノ衆ノ望ヲ屬スル所）而モ之ヲ秘シ行衛ヲ暗マセ脱走デモ爲シタル如クニス蓋シ長廣ハ累ノ及バンヽヲ恐レテナリ長廣止メラ歸サズ明年四月機ヲ得テ脱シ返レバ衆已ニ死スト乃チ幕府ノ當路仙石久尚ノ邸ニ詣リ死ニ就カン

京都府立総合資料館所蔵

ヲ請フ事既ニ過ギタルヲ以テ幕府問ハズ信行乃チ復仇當時ノ顛末ヲ詳シク以テ兼亮ノ族人羽田熊柘植真ニ贈ル文中兼亮ノ子ニ及ベバ用意周到ナリ兼亮ノ女壻ヲ伊藤十郎太夫ト云フ姫路侯ニ事フ信行往キ訪フ姫路侯本多氏伊藤ニ命ジ信行ヲ其ノ家ニ寓スルニ十餘年本多氏三タビ封ヲ徙サレ一タビ地ヲ削ラレ信行轉輾辛苦伊藤ト之ヲ共ニスヽ已ニシテ招聘セラレ江戸ニ入リ麻布曹溪寺ニ寓ス寺僧之ヲ山内主膳ニ薦ム主膳ソノ忠烈ノ士ヲ得タルヲ喜ビ給スルニ廩禄ヲ以テ眷遇極メテ渥シ晩年復ノ同盟ノ履歴ヲ修メ之ヲ家ニ藏ス延享四年十月六日歿ス年八十三墓曹溪寺ニアリ

義士　吉田忠左衛門兼亮　前名忠太夫兼継

兼亮軀幹魁梧氣象瑰毅ニシテ量廣ク能ク衆ヲ服ス浅野家ニ仕ヘテ長矩ノ殊遇ヲ受ケ新進ノ身ヲ以テ足軽頭ニ補セラレテ郡代トナリ俸禄二百石ヲ給セラル其ノ出處ヲ尋ヌレバ丹波國篠山藩ニシテ青山下野守ノ世臣タリ食禄二百石北條流軍學ノ師範役吉田忠太夫兼継ト呼バル、武術士夫ニテヅアリシナリ喬木風ニ折ラレテ之ヲ扶クルノ支柱ナク遂ニ住慣レシ丹波ヲ去リ東都ヲ差シテヅ旅立ケケル當時浪々ノ身トナレルモノハ孰レモ江戸ニ出デ仕途ヲ求メ諸藩主モ亦士臣ヲ其ノ夥伴ヨリ索ムルニヅ或ハ水魚トナルモ

京都府立総合資料館所蔵

アリ或ハ枘鑿相叶ハザルモアリ兼継ハ二君ニ仕ヘテ水魚ノ交ヲ得タルモノ非乎

扨モ兼継ハ江戸ニ出デ目前ニ迫マリ來ルハ活路ニテ今更足軽下部ニモ得成レズ已ムヿヲ得ズ妻子ヲ携ヘ其ノ親類ナル旗本士家ノ食客トナリ心ナラズ日ヲ送リ良主ヲ擇ミ出仕セント其ノ機ヲ覗ヒ居タリシガ浅野侯賢明ニシテ良臣ヲ得ントノ志アリト聞キ友人ノ紹介モテ問ヒ合ハセタルニ奇遇忽會シ新知五十石ニテ出仕ス新知五十石舊禄二百石ニ比スレバ大分ノ一ナレト其ノ職ガ軍學師範タルヲ以テ名譽ニ於テ恥ヅベキニ非ズ意ヲ決シテ親族ノ家ヲ辞シ茲ニ再ビ士分ノ身トハナリニケル

元禄十四年ノ春江戸ハ千代田城ナル殿中松ノ廊下ニ於テ遺恨重ナル其ノ爲ニ高家ノ筆頭吉良上野介ニ刃傷シ其ノ咎ヲ以テ主君内匠頭長矩ハ即日死ヲ賜ヒ五萬三千石ノ家名断絶シ播州赤穂ナル城地ハ籍没セラルヽノ命アリテ受城使將ニ到ラントス一藩ノ驚擾亂麻ノ如ク禍變起ラントスルノ風評アリ隣國近邑ノ諸藩皆兵ヲ境上ニ出ダシ之ニ備フ城下ノ民一夜ニ三四驚ス兼継自分ノ職外ナルモ之ヲ坐視スル能ハズ國家老大石内藏助ニ謁シカヲ悉サンヿヲ誓フ内藏助ソノ精忠ヲ識リ共ニ議シテ廨舍ニ坐シ吏民ニ接見シ四方ニ

京都府立総合資料館所蔵

應對ス籌書案ニ堆ク衆言湧クガ如キモ剖析流ル
ヽガ如ク事壅滯セズ城内郭外賴リテ安シ衆初メ
テ其ノ才幹ニ服ス一日歩卒ヲ率ヒ城内ヲ巡警ス
會〻高松藩士竹井金左衛門詐リテ傭工トナリ城ニ
入リ諜ス業縱途ニ遇フ熟視之ヲ久フシテ歩卒ニ
命ジ捕ヘシム金左衛門憶スル氣色無ク進ミ出デ
ヽ曰ハク我實ニ隣國ノ間者ナリ請フ自殺セン兼
縱笑フテ曰ハク士各〻其ノ君ノ爲ニス心敗スル勿
レ吾カ輩寡君ノ爲ニ城ヲ守ル寡君禍ニ罹ル國家
ニ主無シ命ヲ何人ニ受ケテ去ルベキヤ臣タルモ
ノヽ分唯〻上使ノ至ルヲ待チ城中ニ自刃シ以テ殉
スベキノミ我カ輩若シ守禦ノ備ヲ爲スガ如クンバ

外人ヲシテ城中ノ虛實ヲ知ラシム可ラズ今ヤ然
ラズ何ブ卿ヲ拒マンヤト導キテ徧ク城中ヲ視セ
シム金左同志ノ多サヲ問フ答ヘテ曰ハク卿百死
ヲ冒シテ諜ヒ事情ヲ悉シテ復命セントス吾ソノ
苦心ヲ察スト名簿ヲ示ス又問フ子ハ誰トカスル
兼縱答ヘテ曰ハク我カ名固ヨリ告ク可ラズ卿ノ
名亦問フヲ欲セズ只現在籠城スル所ノ情況ヲ見
バ足ルベシ我モ亦之ヲ示サバ快キノミト腰間ノ
墨斗ヲ操リ法帖ヲ懷紙ニ書キ之ヲ與ヘテ送リ城
ヲ出デシム
城地受授ノ事ヲ了シ明年ノ春ニ至リ兼亮（兼縱改名）大
石内藏助良雄ヲ京東山科ノ新居ニ訪フ深ク謀ル

京都府立総合資料館所蔵

所アリ良雄托スルニ同盟糺合ノ任ヲ以テ帰仍リ山科ヲ発シ路ヲ伊勢ニ取リ大廟ニ詣デ、深ク祈リ江戸ニ入リテ僦居シ兵學者浪人田口直一ノ表揭ヲ為シ以テ密々同志ヲ集メ居ラ轉ズル數次名ヲ改メ篠崎太郎兵衛トモ揭示シ以テ敵人ノ耳目ヲ避ケタリ仇家ヲ覘フノ方畧ニ至リ良雄ノ資材ト為リタルモノ兼亮ヲ以テ多量トス間諜ノ報ニヨリ上野介近日江戸ヲ避ケ其ノ實家ノ城邑米澤ニ移リ以テ復讎ノ挙ヲ避ケントト蓋シ世間或ハ其ノ事アランヲ風聞スレバナリ兼亮之ヲ聞クヤ心安カラズ毎夜同盟ノ士ト吉良邸ヲ覘ヒ其ノ出ヅルヲ見バ狙撃セントト欲シテナリ　謀者返リ其ノ然

ラザルヲ報ズ乃チ止ム　良雄ノ江戸ニ入ルヤ衆更ル〳〵来リ指揮ヲ乞フ其ノ盟ヲ尋ヌルヤ兼亮誓書ノ巻首ニ書シテ曰ハク吾ガ輩事ニ臨ミ部署ニ就ク或ハ闘ヒ或ハ守ル要スル所ソノ心ヲ一ニスルニ在リ門ニ在リテ衛ルモノ何ブ讎ヲ斬ルニ劣ラン守ル者輕〳〵シク動ク勿レ闘フモノ沮縮スル勿レ衆看テ歎服シ各自ソノ命ニ従フ　讎復ノ日ハ定マリ　元禄十五年十二月十四日敵邸ニ茶會アルノ翌暁ナリ本所松坂町吉良邸ニ押寄セタルハ夜最中ヲ過キ暁雪降リ来ル最中　兼亮同志集々ニ命ヲ傳ヘ吉良邸ノ比隣ナル土屋主税ノ家ニ至ラシメ門ヲ叩キ告ゲシメテ曰ハク赤穂藩ノ舊

京都府立総合資料館所蔵

臣等先君浅野内匠頭ノ爲ニ讎家ニ復仇セントス
恐クハ近隣ヲ騷擾セシメン然レ𪜈義ヲ以テ相許
スハ武士ノ常ナリ君幸ニ吾ガ輩ヲシテ其ノ志ヲ
遂ケシメヨ近隣ノ故ヲ以テ仇家ヲ相助クル勿レ
ト主税諾ス兼亮乃チ衆士ヲ率ヒテ後門ヨリ入リ檐
ヲ揮ヒ二人ヲ斃ス　進ミ入リ義央ヲ索メシム得
ズ　衆士呼ビテ曰ハク仇人安クニカ在ル豈ソレ
逃レタル乎ト諮嗟スル者在リ倦怠スル者在リ
兼亮聲ヲ勵マシテ曰ハク徐々ニセヨ天明ケテ尚
獲ズンバ終日之ヲ求メント衆心復奮フ　既ニ義
央ヲ獲テ之ヲ知ル者無シ兼亮一見シテ曰ハク畀
賤ノ人ニシテ此ノ如ク白襯衣ヲ着クルアランヤ
衆初メテ其ノ屍ノ義央ナルヲ知リ歓聲始メテ起
コル　兼亮復人ヲ遣シ主税ニ謝シ志ヲ成シタル
ヲ告ゲテ後去ル
大石良雄幕府ニ届書ヲ差出スニ貝人ヲ選ミ兼亮
ヲシテ其ノ任ニ當ラシメ副ヲ冨森正因ヲ以テ
仙石久尚邸ニ抵ラシム　幕府命シテ細川家ヲシ
テ之ヲ衛ラシム　一日兼亮貝ノ家臣ニ告ゲテ曰
ハク我身體肥大他日死ニ就ク若シ大布囊ヲ以テ
アラ盛リ醜ヲ藏セシヿヲ願フ吾ガ今日猶若干金
ヲ有スルハ布大囊貫ナリ請フ怪ム勿レト　死ヲ
歸フ年六十三　兼亮文學アリ和歌ヲ好ム近藤源
八ニ就キ兵法ヲ學ブ源八ハ同藩ノ士ナルモ義擧

京都府立総合資料館所蔵

ニ應ゼズ兼亮曰ハク吾何ノ暇アリテカ人ヲ擇ビンヤト國破レテ後猶學ンデ業ヲ了ヘ遂ニ京師ニ往キ良雄ト恢議ス良雄亦心ヲ傾ケテ任ス其ノ江戸ニ赴クヤ逢古戰場ヲ經ル毎ニ徘徊顧望慨然トシテ胸懷ヲ吟出シ其ノ地形ヲ寫シ悠々然トシテ去ル仇家攻鑿ノ策ニ至リテハ兼亮ノ計畫多ク用ヒラレタリト云フ

民事訴訟一例

萬延ノ頃ニヤ有ケン多紀郡福住ニ民甲アリ性質豪俠ニシテ領主ノ士臣ニ虐待セラルヽヲ嘆キ常ニコレニ抗セントス一日差紙アリ代官所ヘ出頭スベキヲ命ズ甲某命令ノ通リ代官所ノ白洲ニ出レバ代官命ジテ曰ハク其方ノ親族某大ニ貧困シ難澁スル趣ニ付銀一貫二百匁ヲ遣シ之ヲ救フベシト乎ハ其親族某ガ賄賂シテ代官ニ斯ク命ゼラレタシト内願シタルナリ甲某曰ハク私トテモ富裕ノ身ナラザレバ御受致シ難シ代官ノ下僚側ヨリ出デ詰ルヲ加ヘテ曰ハク御上ニ於テ甚方ノ身元ハ能ク〳〵御存ジノ事故無理ナル仰セ渡サレ

京都府立総合資料館所蔵

ニ非ズ早ク御受スベシ甲某前説ヲ立テヽ狂ゲズ
代官曰ハク暫時ノ猶豫ヲ遣スニヨリ能ク勘考ノ
上返答ニ及ベ下僚マタ其意ヲ布演スヒムヲ得ズ
日洲ヲ退キ休所ニ腰ヲ懸ケ居レバ暫時ニシテ又
呼出ス代官其ノ答ヲ促ス甲某答フル所前説ニ異
ナラズ代官怒リ宿預ケヲ命ズ宿預ケトハ郷宿ノ
主人ニ係管セシムルノ謂ナリ主人其ノ召ニ應シ
來リ甲某ヲ伴ヒ歸リ一夜懇ニ説得テ代官ノ命ニ
應ズベキヲ勸ノ且言フ命ニ應ゼザレバ家ニ歸ル
ノ期ナカラント甲某漸ク應ズルモノヽ如シ主人
喜色アリ因而之ヲ代官ニ啓聚ス主人ハ代官ノ内
命ヲ實行スルナリ翌朝出迚ノ命アリ乃チ出デヽ白

洲ニ坐スレバ代官出デ來リテ曰ハク其方一夜勘
考致シ今日ハ御受ヲ快クスルナラン甲某身ハ叩
頭スレドモ怒氣滿身勃然トシテ曰ハク御請仕リ
難シト郷宿主人驚怯措ク所ヲ知ラズ側ヨリ甲某
ノ袖ヲ引キ目示意令シテ命ニ應ズベキヲ暗報ス
レドモ甲某ハ知ラザルモノヽ如シ下僚厲聲一番
叱シテ曰ハク此ノ御場所ヲ何ト思フゾ粗忽ノ振
舞シテ後悔スナト甲某代官ニ向ヒ高聲ニ曰ヒケ
ルハ私ヒ父母ガ御坐リマス老祖母モ御座リマス
ル私ハ之ヲ養ハネバナリマセヌ親老人ノ難渋ス
ルヲ見捨テヽ親類縁者ノ世話ハ得ナリマセヌ但
御上ガ私ニ代リ御養ヒ下サルヽニ於テハ何時ニ

京都府立総合資料館所蔵

テモ御請仕リマス代官黙然坐ヲ立テテ入ル郷宿主人曰ハク今日ハ御代官ノ御立ニテ事濟ミタルガ如シト云ヘドモ後日或ハ大ナル御咎メアラント郷宿ニ歸レバ甲某宿復ケヲ免ゼラル便欣然トシテ家ニ歸レバ家人其ノ無事ニ歸リタルヲ祝シ甲某ハ旅籠銭ヲ拂ヒシノミニテ出金ヲ免レタルヲ悦ビ且又ソノ官吏ノ壓制ヲ破リ得タルヲ自負ス

一月モ立タヌ内ニ又差紙アリ一家驚キ村役人驚キ開キ見レバ這ハ如何ニ意外實ニ意外明日ハツ時禮服着用御役所ヘ罷出ヅベシト是レ吉例ナリ役所ニシテ白洲ニハアラズ代官ニ面スルニ非ズシテ用人ニ面スルナリ登廳スレバ諸産役人嚴メシク列坐スル所ヘ呼込マル甲某匍匐シテ出デ畏マレバ用人ヨリ令書ヲ渡ス文ニ曰ハク式帶刀御免被仰渡ト副書アリ文ニ曰ハク銀貳貫匁上納可致事ト是ハコレ領主ノ命令ニテ背ク可ラザルモノ背ケバ刑罰忽至ルヲ以テ甲某ソノ賣ラレタルヲ知リツヽ如何トモスル能ハズ御請シテ退出シ家老用人其他役々ノ家ニ回禮シテ歸リ數日ノ後ニ篠山藩札貳貫目ヲ納金シタリ内探スレバ其内壹貫貳百匁ハ親族ノ貧困者某ノ手ニ入リタリトナン

孝行受賞者　上整町小間物商人　彌左衛門　年齢五十三　天明五年

京都府立総合資料館所蔵

同	二階町	板屋	勘兵衛	五十六同
同	下西町	町人	標左衛門	五十七同
同	同	同人弟	善八	四十六同
同	下竪町	町人	矢代屋儀左衛門娘 せつ	三十三同
同	同	同	鍋屋七兵衛後家 やな	五十二同
同	上竪町	小間物屋	十右衛門	二十七同八年
同	下河原町	鍋屋	喜兵衛	四十九同
同	下魚屋町	松本屋源七		四十一同
同	同		左七	五十三同
同	下竪町		嘉助	三十三同
農業出精受賞	下西町		七兵衛	七十一同
同	同	同人妻	つな	六十九同

同			長助	五十九同
同	下竪町	新左屋市左衛門後家	ろき	四十七同

日本六十餘州ニ於テ斯カル多數ノ善行者ヲ一小城下ヨリ出セルハ篠山町ノ幸福ニシテ藩主ノ名譽ナリ從前此ノ如キ良政美治ガ幕府ニ是レアリシカ抑〻天明ハ如何ナル年ゾ天明ノ年號ハ八年ニシテ終リ之ニ次グニ即チ寛政ナリ史家ガ謂ハ所ル寛政之治有可觀者ニテ松平越中守定信少將樂翁ガ大政ヲ輔翼シ天下ヲ以テ自任スルノ時ナレバコソ善行褒賞ノ行ハルヽモ理ナレ著者コレヲ故老ニ聞ケルトアリ老人ニシテ此ノ恩典ニ浴シタルモノヽ感泣シタルガ多カリシトゾ勢政ニ次ギ

京都府立総合資料館所蔵

タル良政ハ早ニ雨ヲ得タルノ心地ヤシニケン

孝女於久ノ事　孝女久ハ篠山近傍ノ農家ニ生レ年十二三ノ時出ダサレテ篠山ノ富商ニ婢使セラルニ十歳ニ達スルマデ其ノ家ニアリテ忠々敷ク立働キ日夜郷里ヲ懷ヒ銭菓布帛ナドヲ得レバ少許ヲ割トモ之ヲ父母ニ致ス久性愚直ナルヲ以テ主人夫妻ニ愛養セラル主家ニ一兒アリ或ル人コレニ女ノ假面ト鬼ノ假面トヲ與フ兒ノ母鬼面ノ醜悪ナルヲ以テ兒ノ之ヲ嫌悪恐懼セン事ヲ慮リ之ヲ匿シテ女面ノミヲ與ヘタリ兒コレヲ得テ喜ビ玩ビ終日手ヲ離サズ久女偶〻ソレヲ見ルヤ俄ニ泣キ涙止メアヘズ主人夫婦大ニ怪ミ交ル〻之ヲ

問ヘドモ急ニ答フル能ハズ主人其ノ故アルヲ察シ兒ニ諭シ之ヲ久ニ與ヘシム兒モ亦察スル所アルモノヽ如ク愛ヲ割ク女大ニ喜ビ之ヲ以テ直ニ己ガ室ニ入リ假面ニ對シ獨語シ獨笑シ或ハ悲泣スルヿ恰狂者ノ如シ主人主婦益〻怪ミ久ノ在ラザルヲ伺ヒ曩ニ匿セシ鬼面ヲ出シ潛ニ女面ニ換フ久コノヿアルヲ知ラズ其ノ室ニ入リ大ニ驚キ泣クヿ良久シク俄ニ暇ヲ乞ヒ得テ父母ニ歸省ス時已ニ薄暮道途ノ昏黑ナルヲ以テ之ヲ止ムレドモ聞カズ鬼面ヲ袖ニシテ奔リ出ヅ行キ曠野ヲ過グ悪漢ノ火ヲ焚キ煖ヲ取ルアリ斯カルヿノアリトハ知ラズ久其ノ火光ヲ認メテ赴キ一瞥愕然走

京都府立総合資料館所蔵

リ逃レントス悪漢爭テカ之ヲ放チ去ラシムベキ
呼ビ留メ且火ニ當テシム辭スレドモ許サズ久其
ノ傍ヲ看レバ筵ノ上ニ博器アリ錢財アリ衣服ア
リ皆盜ミ來レル物ヲ賭スルナリ久女ノ面火熟ニ
炙ラルヽヲ以テ身ヲ荊棘ノ際ニ側メ懷中ノ鬼面
ヲ出シテ之レヲ己ガ面ニ當テ火焔ヲ避ク時ニ火
光稍燈ヲシトシ夜氣暗澹タリ悪漢中ノ一ツ年コ
トヲ一見シ絶叫シテ怕レ奔ル餘漢ソノ何故ナル
ヲ知ラズ創持ツ足ノ所撰バズ東西ニ散走ス久亦
其ノ何故ナルヲ解セズ虎口ヲ脫シテ急走家ニ歸
リ戸前ヨリ父母ヲ呼ブ父母訝リ怪ミ其ノ由ヲ問
フ久其ノ面ノ丁及ビ其ノ面ガ甚シク母ニ似タル

ヿ且一夕ニシテ其ノ鬼面ニ代ハレルヿヲ叙ベ若シ
ヤ母上ノ身ニ事アルカト案ジ煩ヒ暇ヲ乞ヒ歸レ
ルヿ及ビ途中悪漢ニ逢ヒシヿ其ノ一時ニ散乱シ
タルヲ以テ禍ヲ免レタルヿ等ヲ語ル父曰ハク是
レ追剥ナリ汝ヲ以テ鬼ノ化ケタルナリトシテ逃
ゲタルナラン俄ニ起チ近隣ニ乞ヒ數十人到リ看
レバ衣物財貨依然トシテ在リ炬ニ照シテ熟視ス
レバ女ノ言フ所ヨリモ多シ悉ク拾ヒ集メ之ヲ村
役人ニ告グ翌日村役人ヨリ代官ニ訴フ代官コレ
ヲ奉行ニ言フ奉行初メテ久ノ篤孝ヲ領主ニ言上
ス領主コレヲ聞キ久ノ孝ニヨリ天ノ之レヲ以テ
賞賜スルナリトシ盡ク之ヲ父母ニ與ヘタリ惜ム

京都府立総合資料館所蔵

ベシ其ノ年月ヲ知ルモノ無ク只其ノ話柄アリ

誓願寺　浄土宗　京都市誓願寺末ニテ本末同名

開基覺山上人　上人三歳ノ時父足利將軍義輝ガ三好等ニ弑セラルヽヤ波多野秀治之ヲ憐ミ八上城ニテ養育シ成長シテ誓願寺ニ入リ披剃スハ上ニ復歸シ北麓ニ一寺ヲ立テ天正年間ノ兵火ニカヽリ慶長築城ノ際ニ今ノ地ニ移ス　秀治ノ墓老松ノ下ニアリ寛政年間波多野源左衛門外八名ノ立ツル所タリ

天正六戊寅六月二日卒

大雄院殿英山玄功大居士

姓名波多野中務丞秀治

藩士ト記者トノ問答

舊藩士坂本某曰ハク先生記者ヲハ當藩主ナリシ青山家トハ御縁屬デアラセラレマスカ予曰ハク否青山家ノ分家ナル青山長十郎ト迴縁ニナルノデス藩士曰ハク如何ナル御縁故デゴザリマス予曰ハク京都町奉行與力不破ト申ス拙者ノ叔母ガ嫁シテ井マシタ家カラナノデス藩士某曰ハク夫レ故當藩ノ丁ヲ色々御聞及ビニナツテ井ルノデゴザリマスカ予曰ハク左様デハゴザリマセヌ長十郎ノ息子モ裁判官トナツテ井マスシ逢フタフモゴザリマセヌ云々是等ノ話題ヨリ餘談話ニナリ遂ニ左ノ事柄ヲモ聞クコトハナシトリ

京都府立総合資料館所蔵

城下ニ他領ナク一郡ニ少許ノ地ヲ除ク外悉皆當藩ノ有ニ歸シタルハ國主大名ニ髣髴タルモノヽ如ク從フテ施政ノ便ト申ス迄モ無ク鼎々デアル他方ノ領地トテモ左迄遠隔ノモノトテハ無キ故所々ニ代官ヲ置クノ必要モ無ク是レガ爲ニ他藩ノ如キ輒スレバ出張スルナドノ煩モ無シ故ニ其ノ費用モ少シ維新前ニ於ケル諸藩ノ如キ其ノ飛地ヲ有スルモノハ其ノ地々々ニ警備ヲ要シ莫大ナル費途ニ窮セシ樣ノ弊ハ受ケザリシ他國ハ去來此ノ丹波ニ於ケル大名中此ノ藩ノ如ク裕ナルハ無カリシ故ニ維新後諸藩ガ壞城破郎ノ競爭的行爲ヲ敢スルモ當藩自若トシテ居タリキ故ヲ以テ明治二十年ニ至ルモ郭内ニ士族郎ノ依然トシテ羅列スルアリシナリ其ノ本丸ノ廳舍ヲ元形ニテ小學校ト爲セル等恐ク他藩ニ之ナカラン

維新ノ際デスカ是レハ實ニ不手際不面目ノ極デ圖藩ノ汚點トモ申スベシ勤王家タル能ハズ佐幕黨トモ爲リ得ズ世間ノ日和ヲ見テ居ル箭先ニ幕軍ノ伏見淀ニ戰フト聞キ定見無キニモ係ハラズ元治以來京都ニ變事アレバ藩兵ヲ繰リ出ス習慣ヲ襲ヒ藩兵ヲ三隊ト爲シ進ンデ亀山ノ西端ニ至ルヤ伺候到リ報シテ曰ハク官軍大堰川ノ彼方ナル馬路ニアリ大將ハ西園寺三位中將ニシテ長州薩州ノ兵無數ナリト此ニ於テ君臣旅舍ニ鳩首シ

京都府立総合資料館所蔵

ヲ謀議スルモ妙策ノ出ズベキ無シ京都ノ方モ亦
許無シト急騎ヲ発シテ探報セシム二騎相前後シ
馬首ヲ東ニ向ケ一鞭ヲ加ヘテ出テタリ仆候復タ
報ズラク官軍ノ使者ヲシキモノ数名軍隊ヲ引キ
連レ亀山城ニ向ヘリト又曰ハク亀山藩ハ官軍ニ
降レリト之ヲ聞クシテ一騎帰報シ官軍勝利幕軍
敗北シ京都ハ事無シト方向斯ノ如ク定マリ急皇ト
シテ帰路ニ就キ翌朝篠山城ニ入ルコトナリマシ
タ是ハ慶應四年一月ノコトデ五日デアッタト思
ヒマス サア是様ニナリマスト君侯ヲ始メ其ノ
一行カ無事ニ帰城トナッタハ悦バシ耳ト申スモ
ノ、重役共ノ心配ハ一通リデハ無イ物

頭目附等ヨリ以上城内ニ詰切リデ合議トナリ是
レ迄京都ニアリタル周旋方ニモ問ヒ方向ヲ申シ
出サセントスルモ口ヲ箝シテ云ハズ否言ヒ得ザ
ルナリ其ノ故ハ近年周旋方トテ諸藩ヨリ才學ア
ル者ヲ出シ諸藩トノ交際機関トシテ相互氣脈
ヲ通シ時トシテ幕政ヲモ多ウ左右スルコノ出来
タニ慶應三年ノ秋冬ヨリ薩長土三藩ノ権力ニ推
シ倒サレ諸藩ノ勢力カ地ニ落チタル故スガ〻帰
藩スルサヘアッテ京都ノ情實カ國元ヘ知ヒメ景
況ナル上ニ主君ハ在國スル勤王スルヤ好キ佐幕
スルヤ好キ藩論一定セズ日一日ト推シ遷リ正月
ノ祝宴ドコロカ城中城外張氣ニ閉ザ籠メラレ孰

京都府立総合資料館所蔵

レヲ敵トスベキ平熟トヲ味方トスベキカ四方塞
かり音信通ゼヌ内ニ德川將軍ハ大阪ヲ去テ退キ
紀州ヘ落テラレタ伏見鳥羽ノ戰爭ハ一昨日ニ片
附イタナド噂トリ〳〵ノ所ヘ官軍ハ亀山ヲ落トシ
國都ヲ降シ須ラ當城ヘ推シ寄スル云々ノ飛語ア
リ九日ノ拂曉作候馳セ歸ツテ報スル樣ハ官軍今
明日ニ至ルベシ其ノタニハ福住ヘ參着シタ訴驛
ノ炬火ハ煌々トシテ天ヲ焦カサン計リ若州侯ガ
大阪ヨリノ歸國ヲ待ヲ受ケ一戰スルトノ噂アリ
（終論ニ出ダマル山陰道鎮撫総督西園寺公望卿出陣ノ都ヲ參着スベシ）今ハ猶豫スベキ
時ナラズト重役數名軍前ニテ降伏ノ願書ヲ差シ
出シ城門ヲ開キ明ケ渡シノ命ヲ待ツ官軍本營ヲ

町内宿屋々々ニ設ケ官軍執事數名士卒ヲ率ヒ城
内ニ臨ミ降伏聞濟ミノ沙汰アリ是ニ於テ前日ノ
迷雲漸晴レ一藩ノ旗色鮮明トナリ物頭一名士卒
一隊ヲ官軍ニ差出シ降伏ノ實ヲ表ス是等ノモノ
ハ官軍トナリテ山陰道ヲ鎮撫シマシタ　ヤレ〳〵
ト胸撫デ卸ス間モ無ク散居一件ガ起コリマシタ

散居始末

明治元年ニ德川幕府ハ曉クモ倒レタリ從フテ伏
幕ノ大名旗下モ倒レタリ尤レド勤王大名ヤ從順
諸藩ハ依然トシテ舊封ニ割據ノ姿ヲ維持シウヽ
アルヲ以テ藩士ハ一日ノ肩ヲ休メ一夜ノ安ヲ偷
ミ居タルニ同三年ニ到リ廢藩ノ令出デヽ當藩侯

京都府立総合資料館所蔵

ハ知事トナリ藩ハ縣トナリ家臣ハ朝臣トナリタルモ大シタ事トハ云フ程ノ影響無カリシニ篠山藩知事ハ舊藩主ノ資格ヲ以テ臣家大小高下ヲ論ゼズ惣登城セヨトノ命ヲ下シ大廣間ニ於テ舊來ノ交誼モ今日ヨリ禁止シ君臣ノ因ヲ絶ツ旨ヲ示シ且ツ各自封祿知行モ何日廢絶トナルヤモ計リ難ケレバ面々自立ノ基ヲ立ツベシト演ベ數萬圓ノ金銀紙幣ヲ取雜セ舊家老ヨリ足輕ニ至ル迄家祿相應ニ配分シテ別レヲ告ゲタリ之ヲ聞ク臣下ハ驚クアリ泣クアリ茫然タルアリテ此ノ日ハ罷ミヌ

數日ヲ經テ誰言フトナク散居トハ云フ新語出デ來リ一日モ早ク城郭ヲ出デ歸農歸商スルカ朝廷ノ御趣意トカ士族ノ急務トカ云ヒ離シ親類緣者アルモノハ之ヲ便リテ村居セント企テ村落ニ由緣ノ無キモノハ舊來出入ノ義取百姓ニ依賴シテ其ノ村落ニ住居セント朝ヨリ暇雜當ニテ邸宅ヲ出デ適當ノ地ヲ搜索スルヿ闔藩皆然リトス中ニ就キ足輕ノ如キハ五石二人扶持ノ給與ニテ生活シ難キヨリ孰レモ從前手内職ノ覺アルヲ以テ元住ノ長居ニテ働キ又ハ商業出稼ヲナセシモヨリ以上ノモノハ自活ノ道無キ故田地ヲ買ヒ農トナルノ經營ヲナセシガ賣田ハ常ニアルモノナラズ且一時ニ士族ガ需用スルヨリ價格奔騰ノ勢アリ己

京都府立総合資料館所蔵

ヲ得ズ賜金ト邸宅家具ノ沽却代金トヲ以テ居喰スルアリ之ニ加フルニ新宅ヲ作ルニ資金ヲ要シ從前勢力アリタル士族モ村落ニ住スルトナルカラハ村法ニ從ヒ振舞トカ何トカ費用ヲ課セラルヽヲ以テ居溜マラズシテ離散スルヿトナリ散居又散居トモフ場合ニ至レリ間モ無ク家祿返換公債證書附與トナリ人氣一時ニ春ヲ回ヘシ種々ノ計畫ヲ企テシガ是亦画餅トナリ了レリ中ニ頑固吶ハリヲセラレツヽ依然トシテ爲スヿ無ク舊邸宅ニ蟄伏シテ居タルモノ却テ生計ヲ長ク維持シタリ是トテモ二十年頃ニ至リテハ其ノ影ヲ失ヘリ前陳ノ足輕ニ二様アリ五石二人扶持ノモノハ之ヲ株トシテ賣買ヲ許スヲ以テ銀壹貫匁ニテ之ヲ讓リ賣ルモノハ出デヽ農商トナリ買フモノハ両刀ヲ帶ビテ藩臣トナル農家ノ多子アルモノ養子ニ遣ルヿモ無ク分家スル資方モナキモノ往々之ヲ買フテ生計ス其ノ上七石五人扶持及ビソレ以上ノ家格ハ株ノ賣買ヲ許サヾルノ法ナリシ

京都府立総合資料館所蔵

藤原姓　波多野氏

京都府立総合資料館所蔵

藤原姓　波多野氏

秀郷　田原藤太

公光　相模守

經範　佐伯兵庫助

經秀　民部丞

遠義　筑後守

義通　三郎　二郎太夫　筑後守

別系

秀高　美作守　少將

義秀　三郎

秀清　四郎

宗高　出雲守

宗貞

秀綱　因幡中將　刑部太輔

秀行　正四位下侍從　因幡守　小家二條氏子

清秀

秀治　左衛門大夫

女子

秀尚　遠江守

女子

秀香　伊豆守

本家紋

分家　松田家紋

同　河村家紋

別系

義通

義經　檜右馬允

高義　波多野三郎

忠綱　同小太郎

義定　三郎

義景

實方　廣澤與三

有經　檜三郎

有常ト云

義重　出雲守

經朝　二郎

朝定　彌二郎

宗重　川村又太郎

秀賴　緣野五郎

宣時　川尻左衛門尉

政基　松田左衛門尉

政泰　松田五郎

系圖不分明ノ人々

通鄉　肥後守　元基入道

秀忠

義基　備前守

長通

經基

經秀

行秀　山名氏章子

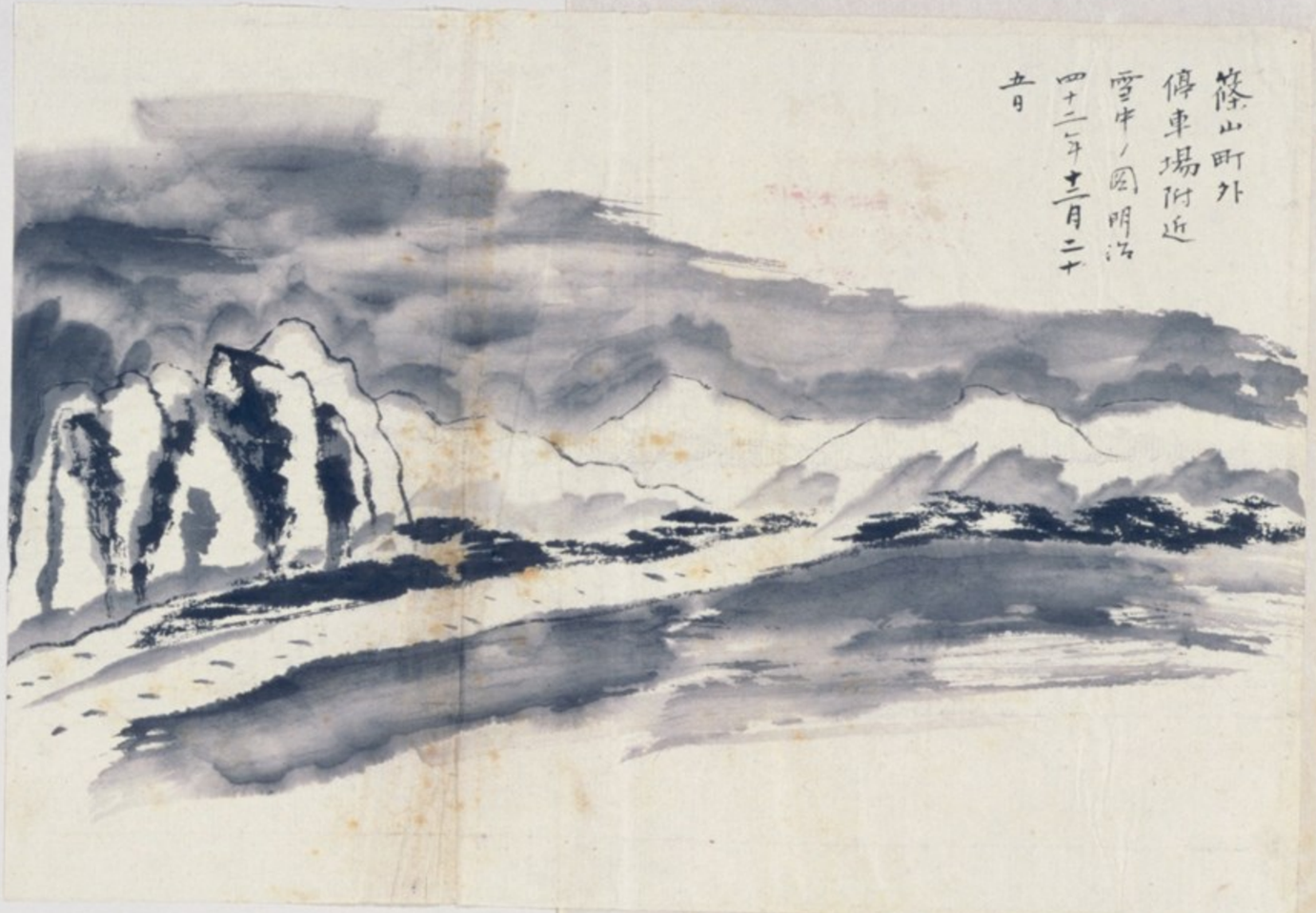
通秀　彦五郎

元秀　上總介

秀經　同

京都府立総合資料館所蔵

京都府立総合資料館所蔵



京都府立総合資料館所蔵

京都府立総合資料館所蔵

仮東直三郎　維新前十五年ニ生レ維新後明治二十年頃ヨリ調帶ノ耐久カト伸縮ノ程度トニ苦心シ終ニ良成績ヲ効シタルニ今明治四十二年発明品試驗中奇禍ニ罹リテ無惨ノ最後ヲ遂ゲタリ齡五十七歲其ノ志ヲ起シテヨリ年ヲ經ル二十年財ヲ費ス十餘萬圓其ノ甥ナル陸軍省人事局長少將本郷房太郎ヲ始メ親族ヨリ累ノ及バンヲ恐レ其ノ企圖ヲ中止セシメントスルモ聞カズ一言之ヲ退ケテ曰ハク國家ノ利益ヲ知ラヌ奴メト昂然トシテ研究ヲ持續シ他ノ容喙ヲ容レシメズ而シテ家道コレガ爲ニ一貧洗フガ如ク終ニハ妻女ノ湯具マデヲモ賣却シ調帶ノ堂料ヲ買入レタル程ナ

り候爵將校ノ内ニ其ノ志ヲ助ケントテ拾金申込アリシガト應ゼズ曰ハク研究中ニ閣下ノ私財ヲ費盡シテハ相濟マヌト此ノ如クシテ悲慘ノ歳月ヲ積ミ漸ク阪東式調帶ハ發明セラレ工場ヲ起スヿ前後七回其ノ度毎ニ多額ノ損失ヲ以テ閉鎖シタリ其ノ第八回目ニ設置シタルハ兵庫東瓦池村ニアルモノニテ成効シ日露戰役以來各方面ニ於ケル需用ニ供給シテ成效ノ美果ヲ樂ミ居タリシガ更ニ進ンデヨリ以上ノ發明ヲ爲サント昨年吳鎮守府ノ大截斷機ノ調帶製造ノ研究ニ着手シタリ此ノ大截斷機ハ世界ニ二個ノミト稱セラルヽ有名ノ強力機械ニシテ之ヲ要スル革帶ハ一萬餘圓ト稱セラル而モ屢破損シテ其ノ經費莫大ナルヲ以テ山内長官ハ阪東式調帶ヲ採用セントシ本人モ亦全力ヲ盡シテ製造ニ後事シ普通ノ製造試驗ヲ了リ更ニ最高ノ試驗ヲ行ヒテ成効シ歡天喜地ノ姿ニテ試驗場ヲ跳下リ調帶ノ傍ニ立チタル一刹那俄然大音響ヲ發スルト共ニ其ノ調帶ハ真二フニ截斷セラレ此レト同時ニ其ノ本人ハ斷片ニ撲タレテ右足ハ寸斷々々トナリ右手ハ押潰サレ茲ニ日本ノ大發家ハ其ノ發明ノ爲ニ殉セリ嗚呼悲ムベシ慘ムベシ然リト雖ソノ効績ハ永ク陸軍海軍ヲ益ス

京都府立総合資料館所蔵

波多野氏記事

波多野氏ハ藤原秀郷ヨリ出ヅ秀郷五世相模守公光ノ次男佐伯兵庫助經範ハ源頼義ニ隨ヒ奥州前九年ノ役ニ數回ノ高名ヲ顯ハシテ戰死ス其ノ子民部丞經秀モ亦戰功アリ賊徒亡ビテ相模國波多野庄ヲ賜ハリ之レヲ氏トス故ニ波多野家ハ經秀ヲ以テ始祖トス義通モ亦武勇祖父ニ讓ラズ保元平治ノ亂ニ源義朝方トナリ義朝旗本十六騎ノ一ニ居リ從五位下大夫ニ叙任セラレ二郎大夫ト名乘ル義通ノ妹坊間ノ姫ハ義朝ノ侍女ト為リテ寵セラレ朝長ヲ生ノリ

義通ノ長子ヲ義經トス松田右馬允ト呼ブ義經ガ

京都府立総合資料館所蔵

相模ノ松田ニ住セルヲ以テ氏トナセシナリ頼朝ノ義兵ヲ揚グルニ際シ其ノ嫡子ニ有リナガラ一族ト離レテ敵軍ニ與シテ敗レ大庭平太景能ニ寄ル景能其ノ外孫ナルヲ以テ哀訴スレドモ赦サレズ七年後ソノ子有常ニ松田ノ庄ヲ賜ヒ家名ヲ繼ガシメラレタリ

中務丞忠綱ハ幼名ヲ小太郎ト呼ブ幼ヨリ勇壯ニシテ名アリ熊野ノ衆徒神領ノ事ニテ志摩ノ國ニ於テ江一雄ノ四郎ト戰フヤ第義定三郎ト共ニ恥セ向ヒ四郎ノ二子ヲ打取リ敵兵ヲ追ヒ退ケ頼朝ノ感狀ヲ受ケ三男ナレド本家ヲ相續ス和田合戰ノ時鎌倉ニ在リ幕府ニ參ジ先陣ニ加ハリテ功了リ御所方（幕府黨ノコト）無二ノ者ナリトテ許定衆ニ加ヘラレ大ニ家名ヲ揚ゲヲ忠綱ノ三男朝定ハ和田ノ戰ニ數創ヲ受ケタレド物トモセズ將軍ノ御教書ヲ軍中ニ讀ミ揚ゲ衆人ノ感賞ヲ受ケタル豪傑ナリ

忠綱ノ次子經朝ガ子孫ハ緣野河村ノ氏トナレリ就レモ波多野ヲ以テ本宗トス

義通ノ五男義景ハ波多野庄ヲ父ヨリ讓リ受ケ之レニ居レリ六男實方ハ廣澤與三ト呼ブ亦强勇ノ士ナリ

義通ノ弟秀高其ノ母ハ頼朝ノ妻政子ノ侍女ニシテ京極ノ局ト呼ブ此ノ緣由ヲ以テ（子孫清ハ）幕中ニ伺候シ奥州陣ニハ十三歳ニテ從軍シ陣中ニテ元服シハ

京都府立総合資料館所蔵

笠原太郎長清加冠タリ戰功少カラズ
秀高ノ子義秀ハ石橋山ノ役ニ敵方トナリテ降リ
大庭景能ノ囚人トナリテ誅セラル程經テ其ノ子太
郎時秀ヲ召サレ家人ト為シ子孫相襲ゲリ
本國相模ヲ出デ越前ニ住スルハ義通ニシテ
越前ヨリ丹波ニ入リタルモノハ經基ナリ
東波多野ハ八上ニアリテ本宗トシ
西波多野ハ氷上ニアリテ支庶トス
美作波多野ハ經秀ノ系ヲ云ヒ
伯耆波多野ハ義基ノ系ヲ云フ
經基ハ武畧アリテ先見ノ明ニ富ム能ク丹波ノ
情勢ヲ察シ亀山ニ假住シテ奥丹波ニ入リ奥谷
八上ノ郡ニ出ダス城ツキ更ニ高城山桐上参ノ城ツキ波多
野家ノ本據ヲ遠レリ山陰道ヲ西征シテ數國ヲ切リ從
ヘ因幡國八上郡ニ姻族ヲ置キ領地ヲ固守セシメテ自
身東歸シテ八上ニ住ス其ノ住處ノ共ニ八上ナルハ
奇ナリ
宗高出雲守ト稱ス父秀高ヨリ軍學ヲ受ケ其ノ秘奥
ヲ極ム波多野家ノ戰術家ナリ因伯作三國ヲ掌ル
秀高作州ノ少將左京大夫ト稱ス老功ノ弓術家ニシ
テ諸葛孔明八陣ノ圖六ノ巻ノ極意ヲ傳ハリ運命ヲ
知ルノ奥秘ヲ極メタリト云フ父子ハ西波多野
秀範ハ其ノ系圖ヲ詳ニセズ波多野氏ニシテ武略ア
リ德望アリ奥丹波ニ働キ豪族舊家ノ赤井久下長澤

京都府立総合資料館所蔵

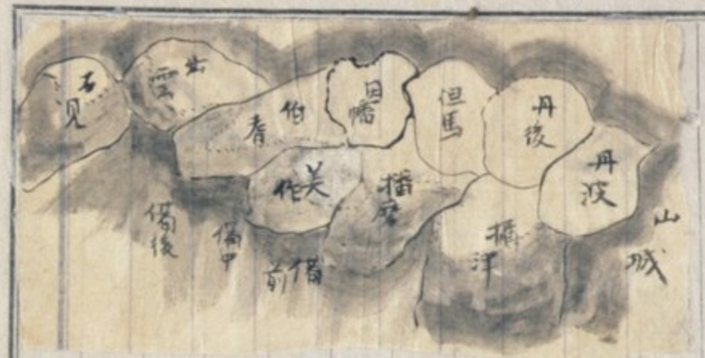
以下ノ家々ヲ攻降シ勲功ヲ建テタル一將ナリ
秀尚ハ遠江守ト稱シ勇氣アリ膽力アリ龜山城ノ鎮
將トシテ餘威ヲ京畿ニ揮ヘリ　以下略ス
室町將軍府ノ威烈ノ如何ニ豪ヘ武將割據ノ時勢成
ルノ秋トハ云ヘ波多野氏勃興ノ速度ハ一瀉千里ノ
勢ハ史家ヲシテ其ノ實否ヲ疑ハシムルノ概ナキニ
非ズ其ノ將軍家ヨリ得タル格式ト待遇ハ全然其ノ
支家タルニ似タリ其ノ紋所ハ鳳凰豎ニ引ニシテ將
用フルモノト其ノ趣ヲ同フス柳營記載
中ヨリ抜萃シテ其ノ一二ヲ叙スルヲ左
ノ如シ

明德四年正月十一日於室町殿行之評定

管領右京亮　佐々木治部大輔高詮
御座　攝津掃部頭能秀　問注所越前守長康
波多野肥後守通卿
御座トハ將軍着座ノ所ニテ將軍ハ足利三代義滿ナ
リ管領ハ細川頼之ナリ
同六月二十六日職始着坐　波多野肥後守通卿
應永五年八月四日同着坐　波多野肥後入道
同　七年正月七日門注所　同人
同十二月十九日御判始評諚同人
同八年正月十一日　新加　波多野肥後元喜
同十年正月十一日　波多野元喜入道
右孰レモ外様衆評定衆奉行衆ニテ政事ニ參與ス

京都府立総合資料館所蔵

ルモノトス



領國ハ丹波丹後但馬因幡伯耆出雲石見攝津播磨美作等トス而シテ其ノ國中淡墨ノ所ハ未領地ニ屬スルモノトス因伯作三國ハ秀高ニ屬ス

城寨數合シテ七十餘個

幹部ハ三人衆老中家七組頭先鋒衆ノ四部トス

三人衆ハ軍功抜群ノ者ヲ撰任ス

大路城主二陛堂伊豆守秀香（波多野秀香ニ）

宮田城主山名和泉守豊恒

攝津能勢城主能勢丹波守久基

其ノ職タル軍國ノ重要事件ヲ合議シ管領（波多野ノ宗主）ノ裁可ヲ得テ命令ヲ下ス最高ノ地位ニ在リ

老中家ハ平林大膳秀衡　澁谷播磨守宗貞

三田肥後守綱氏　澁谷伯耆守氏秀

波邊入學綱俊　荒木藤内左衛門氏修（トシ）

右ハ家老ニシテ政務ヲ執ル

七組頭ハ荻野城主荻野彦六左衛門朝道

須知城主須知主水景氏

内藤備中守顯勝　曽地城主

足立右近光永　足立城主

波々伯部次郎左衛門光政波々伯部城主

野尻玄蕃康長　多紀郡岡野々尻城主

京都府立総合資料館所蔵

酒井佐渡守重貞　真南城主

旗頭ハ　久下城主　久下越前守重氏

大山城主　長澤治部大輔義遠

綾部城主　江田兵庫頭行範

高仙寺城主大館左近將監氏忠

澤田城主　小林修理之進重範

園部城主　荒木山城守氏綱

穗垂城主　赤井惡右衛門景遠

右ノ人々ハ州内ノ豪族ニシテ從屬セシモノ

先鋒衆ハ　籾井越中守教業　八田城主

小野木縫殿助吉澄福知山城主

籾井ハ東方頭ト云ヒ小野木ヲ西方頭ト云フ

丹波衆トハ弓馬ノ故實ヲ受ケ續ギタル名家ヲ云フ一ニ

丹波侍トモ云フ此ノ舊家ニシテ新ニ波多野ノ幕下

ニ歸屬シタルモノ左ノ如シ

波々伯部　酒井　長澤　曽地　位田　余田

内藤　籾井　小野木　足立　須知　久下　江田

大館　赤井　小林　薗部　新庄　今庄　中庄

小野原　山内　荒木

新來ノ侍ニハ

越前ノ朝倉權之助景茂　堀江左衛門景詮　足田

孫太郎以下

越後ノ詫美七郎景光以下

丹後ノ成合城主　成合平七郎以下

足田一ニ足檀ニ作ル

若狭ヨリ　松宮藏人以下
播磨ヨリ　佐用主税之助以下
大和ヨリ　十市十郎左衛門　古市舎人以下
紀伊ヨリ　和田次郎　牲河佐兵衛以下
京都ヨリ　村井作兵衛繁春以下
右ノ人々ハ御客位衆ト呼バレ八上附トナル
名和又左衛門貞俊　富士名左衛門義高　佐伯主税
廣仲　松浦七郎兵衛茂生　塩谷四郎次郎　穂田刑
部　佐々木四郎左衛門　菊地源右衛門　秋月十四
郎　安木平九郎　大友藏人義直以下細田平林本朋
菅谷等諸國ヨリ追々ニ来リタルモノ
右ノ人々ハ同様ノ稱號ニテ氷上附トナル

嘉吉二年八月二十二日室町御評定始ニ評定衆飯尾肥前
入道永祥ハ頭人波多野出雲守ト座席ノ論爭アリ肥前ノ
申ス様ハ評定衆タルノ上ハ位階ノ上首ニ任セ頭人出
頭人ノ上ニ座ス可シト出雲守曰ハク衆タリト雖奉行
人タルノ間ハ頭人ノ上ニ着ス可ラズ候フニ由リ肥前
ノ上ニ着ス可キノ由申シ夢ル云々
應仁ノ乱ニ秀國秀高秀行秀長父子兄弟山名宗全ニ
隨ヒ京ニ攻ノ上リ秀長遂ニ八上ニ留マル
享祿四年三月六日池田攻ニ波多野又四郎落行キ山田
ニテ切腹ス云々
天文五年波多野備前守三好三黨ト相談シ九月六日
多田一藏城ヲ攻ム同二十九日一藏ヘ後巻ノ勢来ル

京都府立総合資料館所蔵

故ニ波多野丹波ヘ歸ル云々

同十四年〇〇次郎氏綱方ノ内藤備前守丹波ノ關ト云フ所ニ出張ス波多野方本望ニテ矢上ヘ歸ル氏綱ハ尹賢ノ子ナリ云々

同年九月二十七日三好方丹波ノ八上ヘ生瀬口ヨリ取入リ取懸カレドモ仕合惡シク曖ニテ漸歸ル云々

永祿九年丹波屋上城ニ松永彈正忠ノ甥松永孫六ト申ス人入城候ニ波多野方前々我カ家ノ城ナリトテ取卷キ責メラレ既ニ水ノ手留メラレ難儀ニ及候間三木ノ別所ガ曖ニテ退城候ナリ云々

右ハ細川家記事中ヨリ拔萃シタルモノニテ前後揃ハザルモ參考ノ一助ニモヤト記入ス　七ケ條

波多野ハ丹波ノ守護代内藤ヲ逐ヒ長澤久下赤井等ノ地侍ヲ幕下ニ容レ丹後ノ一色ヲ逐ヒ但馬ノ小田垣ヲ服シ攝津ノ能勢ニ及ビ西ハ毛利ト相輔ケ東ハ朝倉ト相援ヒ南ニ向フテ別所ト相睦ビ以テ勢力ヲ維持ス今其ノ起因ヲ尤ニ略舉セン

足利將軍家ノ中葉以後ハ天下ニ天子將軍アルヲ知ラズシテ其ノ臣三室町ノ管領細川氏アルヲ知ル否細川氏アルヲ知ラズシテ其ノ臣三好松永アルヲ知ルノミ而シテ三好ノ三黨ナルモノ近畿四國ヲ專制シ皇家將家ハ名ノミ存シ御所ノ御築地（オツイヂ）外垣ノ下ニテ筋壁トモ云フ白壁ノ横筋アルモノ數ハ五節ナリハ壞レテ三條橋（ナイシヂ）上ヨリ内侍所（ナイシドコロ）神器奉安ノ宮殿ニテ内侍コレヲ掌ル内侍トハ女官ヲ云フナリ）ノ燈影ヲ認メ得ベクナリ近傍民家ハ兒ハ宮庭ニ入リ沙盛リノ遊ヲ為セシトカヤ紫宸殿前白沙ヲ敷ク一天萬乘ノ君ノ住マハセ給フ所トハ想ヒモ寄ラズ正親町天皇ノ御踐祚ハ形ノ如クアラセラレタルモ悠紀主基（總論）

以下所々ニ出グル ノ御料ヲ奉ル者無ク即位ノ御大禮ハ何時行ハセラルル
可キヤ二年ヲ經ルモ其ノ御沙汰無キモノカラ百官有司ノ嘆カサ
ルハ無シ關白藤原前嗣モ逢フ人々ニ之レヲ嘆キ聞カセケルガ流
石ハ丹波衆トラ古來悠紀主基ノ國柄トテ誰レ曰フト無ク國人
ノ流布スル所トナリテ宗高ノ耳ニ入リ秀治ノ聞ク所トナリ幷
ハ臺テ置ク可キ事カハトテ丹波家ノ親分ナル毛利家ヘ使者ヲ
立テ御大禮御手傳ノ相談ニゾ及バレケル高宗ハ當時波多野
家ノ謀主ニシテ兼ネテヨリ因伯作ヲ毛利元就ニ附ケ丹波ヲ
其ノ先鋒トシ兩家相輔ケテ以テ京畿ニ旗揚セントノ希望ヲ
持テ元就モ兇賊陶全薑ヲ討ツ時天皇ノ敕諚ヲ仰キ乞ヒクル
勤王家ニテ都思ヒノ人ナレバ實ニモト同心シテ多分ノ資料アグ
奉リケル丹波家ヨリハ黄金白銀俵米土産ノ絹布雜品許

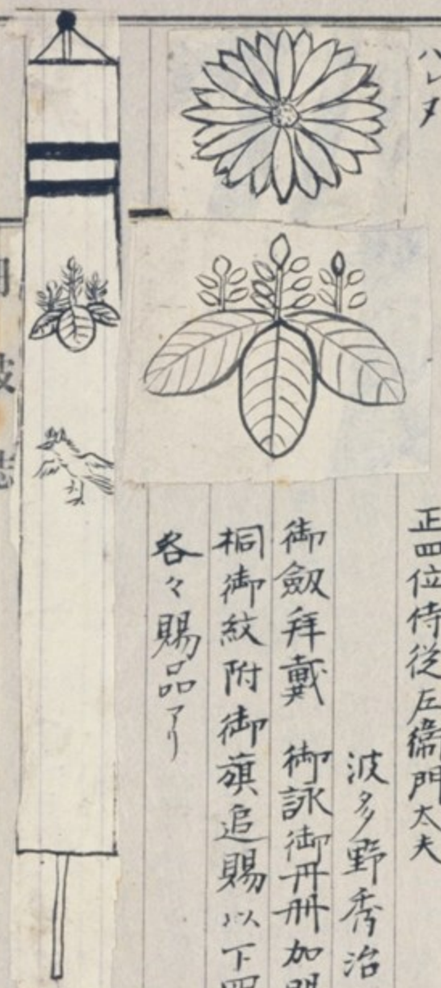
多奉獻シテ布施地ヲ掩ヒ朝廷ヲ賑ハセ天下ヲシテ丹波ノ忠誠
ヲ認メシメタリ臺萬二千ノ兵ハ江田兵庫頭行範大館左近氏
忠荒木兵部大輔氏好同山城守氏綱及ビ赤井景綱コレヲ率ヒ
テ宮城ヲ守衛シ秀治宗高一族參内シテ宮中ニ伺候シ大禮
ノ終リヲ告グル迄怠ル所無ク勤ノシカバ左ノ如ク任叙ノ式ヲ行
ハレヌ

正四位侍從左衛門太夫　波多野秀治

御劔拜戴　御詠御丹冊加賜

桐御紋附御旗追賜以下四名

各々賜品アリ



京都府立総合資料館所蔵

正親町天皇　正四位侍従　波多野宗高
永祿三年ノ　従四位　波多野秀尚
事　従四位　波多野宗貞
従五位　二階堂秀香

爾後戰陣ニハ桐紋旗幟ヲ中軍ニ建テ先陣ニハ足利氏ヨリ許サレタル屋形家ノ旗章ニ引龍（龍ハ付ケ字シ）ニ桐鳳凰又ハ二引龍鳳凰ヲ用ヒタリ五七ノ桐章ハ源義家ガ奥州征伐嶽旋ノ時ニ免許セラレテ之ヲ用ヒ其ノ例ヲ襲ヒ室町家モ之レヲ用ヒタルナリト云フ是ノ時ヨリ伯耆以西ヲ毛利領トシ以東ヲ波多野領ト定メ美作ノ豪將蘆谷舍重ヲ攻メ滅シテ秀高ヨリ其ノ地ヲ毛利ニ入レ又丹波衆ノ廣澤忠政ハ備前ノ赤松筑前守ヲ緣者トシテ之レヲ毛利ノ配下ニ歸セシメタリ忠政ハ秀治ノ外緣者ナリ遂ニ播磨ヨリ何波ニ及ブマデ兩家ノ手ニ屬セリ出雲ノ尼子氏ヲ亡ボシタルハ毛利氏ナルモ其國ノ豪族塩谷畢名冨士名等ハ年來心ヲ東方ニ寄セ居タルニ由リ毛利ヲシテ早ク效ヲ奏セシメタルナリ　元就ト宗高トハ性格ヲ同ブシ大志ヲ抱キ宗高ハ東方ノ事ニ當リ毛利ヲシテ東顧北省ノ憂ナカラシメタリ御郎位ノ獻資ニ於テ毛利氏ヲシテ獨リノ名ヲ成サシメタルハ宗高ガ元就ヲ父兄視シテ每事相讓リタルニ職由ス之レニ由リ元就モ亦波多野ノ功勞ヲ重ンジ畢生事端ヲ生ゼシメザリキ

秀治初名千熊丸因州ノ波多野清秀（秀行トモ云フ）ノ子ナリ宗家ノ元秀ニ嗣子無キヲ以テ入リテ家名ヲ襲ギ左衛門大夫ト稱シ八上城ニ居ル年秀尚ヲシテ亀山城主タラシメシノ東北方ノ鎮將タラシム遠江守ト稱ス

京都府立総合資料館所蔵

交際範圍

朝臣（関白以下後記前示参看）　幕臣（細川以下前示参看）　武田（甲斐）　上杉（越後）

石山本願寺（大阪）　毛利　親分トシテ　朝倉（越前宗高ノ舅家）

宗高ノ最後　親縁アル越前ノ朝倉ハ織田信長ト兵ヲ構ヘ尾張勢ノ敵ス可キニ非ルヲ以テ加勢ヲ乞フノ使者數輩来リテ出援ヲ促スニ〻宗高ハ坐視シ得ズ自ヒ自進ミ之レニ赴カントスルヤ秀治ヲ始メ一族其ノ不可ヲ陳ベ尾張トノ葛藤ヲ生ズルノ端緒ヲ開ク可ラズトノ論議モアリシカドモ宗高ノミ應ゼズ兵二千ヲ率ヒ北陸ニ趨ケリ當時ハ織田氏ノ勢力ガ畿内北部ト近江ニ及ベル事トテ二千ノ同勢ガ何レノ道ヨリセシカ容易ノ事ニハ非ザリシナラン若狭路ヲ取リタルカ二千ハ扨置キ二百ノ兵サヘ進退シ易カラザル間道ナリ況ンヤ兵粮器械ノ運搬ニ於テオヤ智アリ勇アル宗高ハ舅家ノ城郭ニハ入リ得タルモ朝倉ハ夕暮ノ空ナリ宗高獨イカニ焦ルトモ之レヲシテ旭日ノ光ニ浴セシム可クモアラズ尾張勢ニ驅リ立テラレ惣崩レトナリテ宗高ハ一騎打スル迄ニ奮闘シ待臣ニ命ジ首ト佩刀トヲ丹波ニ持ケ還ラシメ介錯サセテ自刎セリ丹波家ノ柱石一個先ヅ失ヒ北西波多野家ノ大將コヽニ亡ビタリ

宗貞ハ父ノ死後父ノ遺業ヲ襲ギ氷上大將家ノ武威ヲ發揮セント天正三年三月攝津ニ出軍シ青野城ヲ責問シ屈伏セサルヲ以テ青野民部大輔ヲ攻撃スルコト數晝夜遂ニ之レヲ陷レ民部大輔ヲ斬リ全城ヲ屠リ捷ヲ丹波ニ報ズ越前敗後ノ一功大ニ士氣ヲ振ハセリ首實檢ニ入ルモノ華隈甲斐譽田主馬ノ冑首ヲ始メトシテ十五級士卒ノ首級百數十負傷巨額天主城コレヲ聞キ潰ヘニ

京都府立総合資料館所蔵

城遂ニ丹波家ノ有ニ歸ス宗貞亦肩背ニ創傷ス
天正五年毛利氏ニ於テハ元就既ニ卒シテ孫輝元續ギ二叔元春
隆景コレヲ佐佑ス織田信長ガ將軍足利義昭ト不諧ニシテ其
ノ毛利氏ト内相親ムヲ嫉視シ將佐ヲ攝播ニ遣ハシ毛利氏ノ羽
翼タル諸將ニ解說シ或ハ諸城ヲ攻陷スルヲ以テ二叔相議シ將
軍ヲ京都ニ復シ東軍ヲ攘ヒ旗幟ヲ洛水ノ上ニ竪テ以テ亡
父ノ遺志ヲ遂ゲシノント欲シ元春ハ兵ヲ山陰道ヨリ東向シ丹
波衆ト協同シテ愛宕山ニ陣シテ京師ヲ下瞰シ隆景ハ四國山
陽ノ兵ヲ以テ東行シ兄弟狹擊シテ織田軍ヲ殲滅セント謀
リシニ隆景熟計シテ之レヲ中止ス使者ヲ毛利氏ニ送リ言ハシ
ムル樣ハ元就公宗高公ノ在世中天下一統ノ大望ヲ懷カセラ
レ山陽山陰兩道ハ殆ンド御手ニ入リ餘威遠キヲ四國九州ニモ

及ベリ當家ハ三丹播州北攝ヲ取リ朝倉トモ一致合體シタル
カラニハ兩家ノ所領ヲ合ハセ二十個國ノ勢力モテ業已ニ天下
ヲ掌中ニ握リタラン心地セシニ兩將同時ニ物故セラレタルハ遺憾
是ノ上ヤアル朝倉ノ亡ブルヤ信長ノ勢力俄然相加ハリ畿内モ
殆ンド彼レガ手中ニ歸シ吾ガ管下ナル丹後但馬攝津播磨ノ諸
將士モ其ノ威風ニ呑マレ輒モスレバ其ノ顧下ニ容レラレンズル樣ニ社
アレ御家ノ麾下衆ニモ其ノ模樣アリト風聞スルカラニハ今ノ
中ニ兩家合力シテ備前ノ浮田ヲ始ノ觀望者ヲ招徠シタラン二ハ
東軍ニ當タルモ易々ナラン ノミトアリシモ毛利氏ヨリハ首鼠兩端
ノ返答ナルヲ以テ再度使者ヲ以テ前說ヲ反覆セルモ要領ヲ
得ズ丹波衆モ此ノ内容ヲ聞キ毛利氏ノ腑甲斐ナキニ落膽セリ
信長ハ此ノ内容ヲ探聞シ機會到リトシテ先鋒明智光明ノ手

京都府立総合資料館所蔵

ヲ西行セシム光秀ハ先ツ青龍寺嵐山等ノ地ニ足溜マリノ城堡ヲ
修造シ小勢ヲ出ダシ時々丹波方トハ衝突ヲ試ミケル
同年春夏ノ候八田城主粉井啟業以下諸所ノ城主砦將ヨリノ
報至リ東軍來リ迫ルヲ告グ軍議ヤリ遠江守秀尚ヲ以テ亀山城
ニ入ラシメノ防禦ノ方術ヲ講ジ要害ヲ固守セシム信長コレヲ聞キ
織田信澄ヲ以テ己ガ名代トシ瀧川一益細川藤孝ヲ以テ副將
トシ光秀ト策應セシム信澄ハ公族ナリ二將ハ良撰ナリ世人思ヘ
テク丹波一國日ヲ期シテ擧ゲラル可シト
光秀ハ青龍寺城ニアリ一益藤孝ハ鞍置山ト嵐山トニアリ而シ
テ大將代旗ハ京都ノ西郊ニ竪テラレ明智軍ノ報告ヲ待ツ光秀ハ
數度ノハ迫合ヲ試ミクルモ山路險塞急速ノ進軍望マシカラズ
後繼ノ諸將ニ面目無シト苦慮ケ百遂ニ一策計ヲ案出シ嘗テヨ

リ知リ合ヒノ愛宕山大善院法師ヲ介シテ山伏ノ頭目ナル野々口西
藏坊ヲ味方ニ引キ入レ其ノ甘言ヲ以テ秀治ノ臣ナル並河内匠同
太郎左衛門物集女孫右衛門中川喜兵衛舟枝出雲木村治郎
右衛門茨木左衛門村上源兵衛等ニ説キ和議ヲ申シ込マセケ
ル其ノ趣旨ニ曰ハク晴秀殿輝秀殿ハ毛利元就ノ親縁アルヲ以
テ若年ノ輝元ト相結バレ先代ノ時ノ如ク武威ヲ四方ニ輝カシ給ハ
ンヿヲ可ラズ冥ニク織田氏ト一致シテ功業ヲ樹テ給ヘ某誓フ
テ善キ取リ計ラフベシ左アランニハ毛利家ト共ニ客分ノ取扱致シ
參ラセン毛利家ニ於テ合體ナクバ貴國ノミニテモ同心アレトヱヒ
聞キ並河物集女以下實ニモト同心シ之レヲ秀治ニ聞カセタレバ
宗貞ト談合シクルヱニ畑半之助澁谷伯耆並河内匠毋内膳名
和又左衛門ヲ使者トシテ東軍ニ遣ハシ和平ヲ謀ル可シトテ下相談

京都府立総合資料館所蔵

ラモ利家ニ申シ送ル輝元其ノ言ヲ聞キ言フ樣ハ信長モ一時ハ義昭殿ヲ吾ガ方ヨリ迎ヘ尊ビ仰グベキモ是レハ信長ガ謀計ニテ自分ガ將軍ニナルベキ足代ニスル下心淺墓ナル腹皮ノヨレル種ナル可キニ何條子細ラシク丹波家ニテ取リ揚ゲ多分ノ使者ヲモ遣ラル・ヤト嘲時ノ言葉モテ答ヘラレケレバ更ニ畑半之助ヲ以テ毛利氏ニ申シ込マセケル半之助輝元ニ向ヒ曰ヒケルハ元就公ガ安藝半國御知リアリシ時一陶全薑入道御退治アリ其ノ宣旨其ノ御啟書ハ晴秀輝秀ガハ早川殿ヲ召シ連レ參内シテ奏聞シ參府シテ上達セシ所ニ非スヤ猶モ丹波家ヨリ但馬國ニ軍勢ヲ出ダシ尼子ノ者共ヲ押ヘタル時ニ成サレタル元就公隆元公ノ御誓約御作法ハ今日ニ至リ迹形モ無キ有樣且只今御列座歴々方ノ御挨拶モ法外無禮ニ候フヾヤ丹波家ハ御旗下ノ樣ニ持テ扱ハル、モノ哉秀治秀貞ハ良將ニテ候フ何條無益ノ工ニ其等ヲ差シ越シ候ハヾヤ意地惡キ丹波地侍モ物大將トシテ仰キ居リ候フモノヲ斯カル御詞聞カセバ此ノ上ハ思ヒツノ丹波丹後但馬播磨攝津ヲ一纏ノトシテ良將ト云ハル、信長ヲ後檢トスルナラバ御當家ノ御運命如何ガアラン元就公ノ御遺言ノ旨モ御手長ノ御國々ヲ御守リアリテ天下ニ旗ヲ樹ツルコトハ望ム可ラズト社承リツレ御歴々方モ信長ヲ御嘲時ノ樣ニ候ヘトモ丹波ノ國人ハ秀治秀貞ヲ毛利ノ守殿トハ申シ候フヾヤ是レハモ利家ノ乳母ジヤトノ心ニテ候フ此ノ度使者トシテ參リシ者ハ皆名アルモノニテ候フ程ニ秀治秀貞ノ名代ト思シ召サバ角アルマジキモノニテ候ヘ其モ波多野家ノ被官ニアラズ譜代ニモアラズ新田公ノ御内ニ於テ人ニ知ラレタル畑六郎左衛門時能ノ子孫ニテ一城ノ主ニテ候フヾヤ士ハ禮儀ヲ先ニシテ馬合戰ノ作業

京都府立総合資料館所蔵

ヲ磨ク可ク覺エテ大身ハ身ノ差別ヲ覺エズ候ヲ元就公モ多治見三千餘貫ノ領主ヨリレテ大身トハ為リ給ヒタレ丹波ハ朝家ノ主基御領ナレバ鎌倉殿ニモ御心ヲ置カセラレタリト承リメ將軍家ニハ御懷國ニテ一入御情ヲ下シ賜ハリテ候ヲ國風ハ他國ニ勝レテ意地强ク候ヲ元就公ノ禮讓ハ正風トナラント承リテ候ヲ和漢トモ良將ニ無禮ハ無キモノト承リテ候ヲ名將達ガ秀治秀貞ノ密談主旨ヲ一句ニ吸ニ盡クサルヽ御慮アル樣ニテ一向ニ淺間敷ク候ヲ是非得失御評議如何程モアラバ謀略トテモ有ル間敷キニモ非ズ御一座ノ御不興申スハ無禮ト思シ召ス可ケレド此ノ方ヨリ申シ出ダセシ所ニアラズ作法ノ久ケクルヲ論談致セシマデニテ候ヲ某ガ申シ狀ニ御一座御氣色昏ハリテ候ヲ大行ハ細瑾ヲ顧ミズ御家ノ御為ニ御前ヲ憚ラズ謹ミテ申シ上グル所ニテ候ヲナリト猶モ言ヒ續ケントスルヲ見カネテ副使ノ澁谷伯耆並河内匠ガ大ハルヽヽヽヽ之レヲ抑止セルヲモ知ラヌ風シテ滔々數百言ヲ演ベクルニゾ流石ノ宗戸以下ノ人々顏色無ク憤レル人モアレド大事ノ前ノ小事トシテ見逃ガシタリ

牛之助ハ元春隆ヲ始メ宗戸天野江刑部福原内藤阿曾沼赤川穗田以下ノ面々ヘ會釋シテ退出シ城下ニ止宿シテ返答如何ニト待ケタルニ何ニ一ツ取リ纏マリクル話モ無ク空敷ク館伴ト談話スルノミニテ歸途ニ就キ播州三木ノ城ニ立チ寄リ城將別所長治ニ面會シ毛利家談判ノ顚末ヲ述ベクレバ別所ガ宗徒ノ者等之レヲ聞キテ憤慨シモ毛利家ガ丹波家ヲ蔑視ニ於テハ我等ハ信長方トナリ軍ヲ出ダス可シ其ノ内面ハ云々ト秘計ヲ陳述シ之レヲ管領ニ傳ヘ玉ヘト懇ニ別辭シテ五人ヲ送リヌ丹波家ニ於テ使者ノ歸國ヲ今ヤ遲シト待テ構ヘ使者ノ馬蹄ノ音スルヤ否會議ハ上高城ニ開カレ宗貞ヲ始メ將校ハ牛之助ヨリ應對折衝ノ

京都府立総合資料館所蔵

一伍一什ヲ聞キ案外ノ感ニ打タレ一語ヲ出ダスモノ無シ半之助更ニ言ヒケル様毛利家ノ衰運目前ニ現ハレタリ輝元公ハ無智柔弱ノ愚將ニシテ吾等ト相對スルヿヲヘ少ク宗戸ハ氣隨驕慢ナリ列坐ノ面々皆盲將ニテ前途ヲ看ルヿ能ハズ武勇ノ人々ハ之レアル可ケンモ思慮無キ男共ニテ元就公隆元公ノ遺武ノ迹トテハ無キモノ、如ク諸侍ノ風儀モ武役ヲ取失ヒ遊樂ニ耽リ華美ニ流レ下媚ヒ上誇リ大内義隆卿衰運ノ頃モ斯クヤアリケント存ゼラレヌ御當家古來ノ關係モアレバ如何ニ捨テ難ク有レド向後ハ毛利ノ守殿ヲ止ノ尾張ト同心シ度ク社存ズレ左リナガラ當國ハ數代ノ弓矢取リ共ガ大將ヲ立テ申シタル所ナレバ管領ノ思シ召シニテ風儀ヲバ變ヘサセ難カルベシ就キテハ信長公ガ西ニ旗ヲ建テラルヽ時ニ御遠慮アラセラレ後陣ニ候ヘ今丹波丹後但馬播磨北攝津一面ハ穩ナリ然ルニモ毛利家ハ大友ト一族ノ間ナガラ不和ナレバ或ハ

九州ヨリ事起コラン歟其ノ由々數キ大事ニ眼ヲ着ケズ親ニ睦ブベキ當方ヲ旗下風ニ取扱ヒ社凡愚奇怪ノ至リナレ宗戸ノ高振リ様ハ將士ノ見習フ所トナリ見捨テ果テタル實情アリト云々

畑牛之助ノ報道ハ一座ヲ動揺セシノミナラズ口論スル者心計スルモノ期セズシテ二派トナリ大將次將ノ輩ハ永年入魂ノ毛利家ニ反スルヲ悲ノリ之レニ反シテ新參ノ者又ハ若年壯士ハ力量ノ程ヲ西ニ向ケ新ニ手柄ノ程ヲ顯ハサバヤト欣悦ノ情ヲ面ニ浮ベリ

八上會議ノ開カルヽコト數回ニ及ベドモ是レゾト言フ程ノ事モ出デザレバ赤井惡石衛門長澤治部大輔久下越前守仁木三郎萩野彦六左衛門各自一様ニ言ヒケル様ハ御歴々御評定ノ旨ニ某等神明佛陀ノ冥加ニ掛ケ八幡大菩薩モ照覽アレ更ニ別心無シ生滅即心即佛ノ道臺ト共ニ一所ノ誓約ナリ國家ノ一大事ナレバ

京都府立総合資料館所蔵

今一評定アツテ然ルベシ思ヒ寄リノ品アラバ異論タリトモ仔細
アル可ラズ淵底ヲ残サズ申レ出ダサル可シ不審ノ議アラバ高声ノ
別無ク告ゲラレヨト言ヘルモ誰レ一言モ出ダサヾリキ
其ノ日ノ暮程ニ赤井五郎同惡右衛門同新八郎同治郎左衛門
山國玄蕃允須知主水正誘引セテレテ秀治秀貞ノ前ニ仕候ス赤
井長澤等ノ意見ニ曰ハク今度當國ヲ擧ゲテ織田方トナルニ付
キ多年親ミ厚キ毛利家ト中違ヘスルハ粗忽ニテ情無キ極ミニテ
候ヲ當國ヲ矢ノ風モ衰ヘ明智ガ申ス趣旨ニ屈伏ヒラレタル樣ニ
テ降參同樣ニ聞コヘナバ世ノ人口ノ程モ口惜シク社候ヘ今武田ヨリ
懇意ノ通信モアリ上杉ヨリハ託善七郎次郎ニ申シ越サル、旨モアア
リ當家樣モ利家大軍ヲ引率シ江濃ニ向ハヾ武田上杉其ノ後テ
遽テシ然レドモ毛利ハ重兵ニシテ後寛ナレバ賴ミ難シ今度ハ先ヅ

光秀ガ申シ條ニ任セ表ニ和議ヲ容レ計畧トシテ左ノ如ク言ヒ入レシノ
ナバ然ル可カラン曰ハク赤井惡右衛門同苗五郎ナンド申ス者常々引
矢ニ自慢シ管領家ノ下知ヲ賄シ旗頭共ニ萩野内藤仁木谷野木
以下不和ノモノ多ク候ヲ仰セ越サル、御和睦ニ同心致サズ剩ヘ無理ノ評
議ナリトテ諫言理屈ヲ申シ募リ候ヲ管領家ヨリ手ヲ出シ候ヘバ國
亂トナリ毛利家ヨリ加勢來リ由々敷キ大事ト成ル可ク候ヘバ繕ヒ申ス
ベキニモ非ズ秀治秀貞等毛利家ト手切レニ及ブ本意ニハアラネド
モ又教訓ヲ加ヘ毛利ヲ御味方ニ引キ入ル、折モアル可シ今ノ毛利家ハ
元就隆元ノ時ノ如クアラズ大運ノ開クモノトハ存ゼラレズ候ヲ密々信長
公ニ言上アツテ誓約ノ條々書キ付ケ參ラスル間コノ六人質給ハル可シ貴
所一分ノ功ヲ先ンゼントナラバ某等ソノ期ニ臨ミ先陣致ス可シ富田城ニ
在ル山田和泉守豊恒ハ當家ノ一族ニテ赤井ノ為ニモ縁家殊ニ斷金ノ

京都府立総合資料館所蔵

民友ナレバ赤井ノ為ニ後語トシテ出陣致スヘシ長澤治部大輔義遠ハ
加勢トシテ籠城致サン孰レモ剛ノ者ニテ候ヘ討テ洩ラサレバ後悔ア
ラシ宗徒ノ人達誘引セラレ大勢ヲ以テ来リ給ヘ努々輕ンジ給フヘカラズ
御名代ヲ遣ハサレヨ國人ノ評定モ今ハモ利家ヲ贊シ信長公ヲ憑ト
忍ビ様相見エ候ヘト申シ送リ給フヘシ某等光秀ノ攻ノ来ルヲ待チ之レ
ヲ生擒ニセバ信長怒リテ大軍ヲ當地ニ差シ向フ候ヘベシ箭日牒ジ合
ハセタル如ク武田上杉ト夾ミ討タハ叡山本願寺等佐々木承禎ナド、
共ニ起コルベク義昭朝臣ノ御教書モ下ルベシ輝元公モ此ノ時ニ至リテハ
何ゾ緩怠ナル可キ此ノ條何ンゾ御教書ニ洩レ候ハン四角八面ヨリ包ミ攻
メラレナバ龍虎ノ勢一舉ニシテ御當家弓矢ノ御威光萬々代ナルベシ
晴信公ヘハ波多野彌次郎殿ニ戸田式部丞ヲ副ヘテ遣ハサレ景虎公ヘハ
平林平太郎殿ニ託美七郎次郎ヲ副ヘ遣ハサレヨ此ノ計畧ニ相違ノ千合ハ

セ候ハヾ其ノ時コソハ信長ガ天運ヲ得タルニテ候ヘ爾アランニハ夫ヨリ
信長ト永ク御合體アラレ候ヘト精神滿面ニ述ベケルニゾ同席ノ人
々ハ心痛ノ體ナリ
織田ヨリハ口丹波ノ地侍ニ傳言シ光秀ヨリハ直々使者ヲ以テ和平
ノ議ヲ申シ來ルコト數度ソノ度々會議ハ開カレタルモ基々數キ
相談無ク打過ギタルガ赤井等ノ議論ヲ采用スベキヲ不ト八上城ニ於テ
荒木氏好粉丹敵紫小林重敎バカリ召サレ三草左京盛繁小野原
右京勝繁本庄左兵衛氏倫列席内議アリ前條ノ秘計ヲ諸旗頭
ヘ密々ニ知ラスベシト命ゼラレタリ
光秀ヘノ返事トシテ平林大膳亮名代トシテ出デ向ヒ福住四郎左衛
門伏屋左門廣瀬豊後安木平左衛門太宰齋之助西牟田
次郎左衛門鷲尾平太夫等出向ヒ青龍寺城ヨリ三澤庄

兵衛堀尾與次郎堀部兵太夫案内者トシテ差添ヘラレ高嶋ニテ光秀ニ面會ス其ノ口上ノ趣ハ前節述ベタル赤井等ノ計策ノ如ク丹波家ハ御味方トナル可シ赤井悪右衛門ハ征討アルヘシ丹波家ヨリ御案内仕ラン云々光秀大ニ喜ビ使者ヲ饗應シテ之レヲ留メ置キ信長ヘ逐條報告ス信長モ亦大ニ喜ビ平林廣瀬ニハ太刀ヲ伐屋以下ハ脇差ヲ與ヘ北國産ノ絹紙等ヲ添ヘテ歸國セシメタリ

光秀ハ信長ヨリ見續ギノ人々織田信澄ヲ始メ美濃尾張地附ノ諸將及ビ旗下撰出ノ士合シテ三千餘騎ニ自分ノ家衆ヲモ率ヒ出陣ス信長之レヲ誡メテク丹波ハ意地强キ士風ナレバ地侍ヨリノ加擔モ容易ニ信ヲ置キ難シ必其ノ人質ヲ取レト之レニヨリ天正五年四月十八日波多野彌四郎公秀澁谷又七郎治氏荒木但馬守教定籾井小六左衛門業光等ハ人質トシテ明智軍ニ入ル本間小四郎義清荒木藤内兵衛氏藝畑中兵衛守國次所大五郎亘理大夫以下猛石衛門武者之助叢松石衛門金城寺太郎兵衛速雄雷光兄宅稲妻三國沖風早飛ナンド呼ベル力士早業士等姓名ヲ脅ヘテ從者トナリ保護ノ任ニ當タリテ隨行セリ秀治秀貞ヨリ別使安井外記田井内膳ヲ以テ兵粮壹萬石馬糧大豆三千石塩糠噌油魚薪炭若干數十車馬ニテ贈レリ此ニ於テ光秀ハ安心シテ奥丹波ニ入リタルガ黒井城ヲ攻メントシテ不意ノ襲撃ニ遇ヒ大敗退走戰死過半ノ所ニ陷リ這々ノ體ニテ京都ニ逃ケ歸ル主從僅ニ七人（氷上郡所々ニ大參看スベシ）記又一軍攝津ニ出デ池上ニ於テ織田軍ヲ襲フ秀治ハ宗貞ノ功ヲ譽ノ稱ヘクルガ毛利家ヨリ特使ヲ以テ巨多ノ物品ヲ贈リ中國接壤ノ領分ニ

京都府立総合資料館所蔵

シテ地勢上丹波家ノ領地トナルベキ所ヲ切リ取リテ之レヲ譲リ
上杉謙信ヨリ飛札ヲ以テ稱揚シタルナド丹波方ノ勢力俄ニ
加ハリタルニ反シ光秀ハ如何ニモセレテ此ノ怨報イデヤク置クベキ
剰ヘ曽根式部ハ秀治ノ手ニテ討タレ小田四郎次郎ノ功勲ト為リ
齊藤九郎次郎ハ荒木藤内兵衛ニ討タレ明智助右衛門ハ宗貞ノ手
ニテ討タレ伊田内匠ノ手柄トナリ氏家金七ハ安丹外記ニ稲葉數馬ハ
賴勝々左衛門ニ三枝縫殿助ハ畑牛兵衛ニ夫レ〳〵討チ取リ赤井
ノ手ニテ諏訪備中ヲ深須七郎左衛門重成ガ明智庄五郎ヲ鎌田次
郎ハ光忠ガ討チ取リ信長ノ目代佐治八郎ヲ長澤隊八田知澄ガ平
手伊與ヲ粉井備ヘノ西尾源十郎ガ梶原平三郎ヲ山名ノ客將上杉
藏人範氏ガ討チ取リタリ此ノ報京都ニ達スルヤ信長急怒大ニ加ハリ
丹波家丹波士ヲ根絶シテ此ノ怨恨ヲ散ゼントハ誓ヒケル

天正五年冬ノ初メツカタ東軍ハ追々桂川ノ東邊ニ出没ス
トノ報ハ時々刻々ニ亀山城ニ入ル此ノ手ノ大將ハ前役ノ如ク明
智光秀ニテ前役ニ宗徒ノ衆ヲ喪フノミカ借リ受ケタル所
ノ將士ヤ加擔ノ士人ヲモ多ク失ヒ苦辛萬チナル折柄信長ヨリ
ノ命令嚴峻ニシテ今ハ猶豫ナシ得ベキ秋ナラズ去リ乍ラ前役
ノ如キ無謀無理押シスベキニアラズ一城一砦順次ニ攻陷シツヽ
進ムコソ良策ナラン明智左馬助同次右衛門ニ其ノ方略ヲ授ケ
氏家外記久德六左衛門小河上佐溝尾庄兵衛ヲ士大將トシテ
人數配リヲ為シ山城西面ノ砦將物集女縫殿助高廣ハ開田五郎
左衛門國時梅津ノ砦將梅津皐人等ト文戰度々アリテ一戰毎
ニ東軍增加シテ来ル
亀山城主秀尚ノ下知ニ由リ東方衆ハ笠原六郎同四郎次郎船井

京都府立総合資料館所蔵

左衛門西五郎兵衛川勝左近紹田三郎兵衛澁谷左衛門赤井
五郎左衛門谷田秀遠畑守廣及ビ東先鋒衆ノ籾井兵庫助日
下部石見大江彈正等加勢トシテ来着ス荒木氏綱江田行範小林
重範須知景氏足立光永酒井重負前示等来着シ酒井佐渡
守重負佐野城主仁木三郎兵衛賴永及ビ碓井丹後伏屋美
濃小野原右京等来着ス　織田方ノ退陣スル援アルヲ以テ西ノ
岡ノ小戰ニ打取リタル首級ヲ掛ケ並ベテ川向フノ敵兵ニ示シ以テ
挑ノドモ應セズ六月信長ハ大坂ニテ本願寺軍ト對峙シ居タル軍
勢ヲ引キ拂ヒ押ヘノ兵ノミヲ殘シ歸東シタリトノ報知ニ接シ油斷
シタルハ丹波家ノ不覺ニテ是レヲ信長ノ深謀ナリケン俄然東兵ハ
桂川東岸ニ群集セリ信長ノ名代織田信孝其ノ手ニ屬スル所ノ
將士ニハ明智荒木瀧川長岡一色筒井蜂尾佐々等ノ兵三萬餘

騎ト聞コエタリ十二日東軍川ヲ渡ル可シトノ報アリ同日夕刻秀尚五
百騎ヲ召シ具シ馳セ附ク敵ハ三備トナリ光秀ハ佐々左毛原木破等
ノ人數八千餘ト手勢トヲ以テ後陣トナリ左軍瀧川ノ五千餘人
同苗彦九郎同三九郎コレヲ率ヒ同苗左近後陣トナリ右軍ハ荒川
勢七千餘人攝津守村重後陣ニ在リ宗徒ノ者前軍トシテ川側マデ
進ミ筒井順慶ノ四千人其ノ後方ニ備ヘタリ　丹波勢ニハ籾井兵庫敎
親七百餘人ヲ三軍トシ八田彦七郎西尾小藤太ト前軍ニ在リ弓削式部
丞ノ百五十人其ノ後陣トナリ江田行範ノ手ニ大館ノ一族ヲ合ハセテ一
千餘人之ニ次ギ大嶋民部世良田彦次郎ノ四百人又コレニ次ド里
見平右衛門義保瀧川内匠ノ三百人最後ニ在リ　第三ノ備トシテ荒
木氏綱ノ五百人此ノ先手ニハ次男同苗彌太郎同藤左衛門增尾
十郎兵衛等ノ三百人　左陣ニ在ル備ハ紹田家廣澁谷氏合赤井

京都府立総合資料館所蔵

景久畑寺廣ノ三百人　右陣ノ二ノ備ニハ平林秀家谷田秀遠安井外記ノ三百人　伏兵トシテ伏谷氏信日下部尚則ノ三百人ハ西岡北ノ森ニアリ大江尚重川勝左近船井左衛門西五郎兵衛ノ三百人ハ梅津ニアリ　仁木頼氏雄井則近足立石近ハ野原石京ノ七百人ハ嵯峨ヨリ夜襲ス可ク小林重範同民部須知景氏酒井重貞ノ七百人ハ遊軍タリ　此ノ手ハ嵯峨朱雀東寺仁和寺ヨリノ集合組ナリ西大寺ノ瀬ヲ渡リ下ノ瀬ヲ渡リ鳥羽ノ戀塚アタリマデ出没スハ林民部須知伊豫鴨次郎左衛門和久太郎太郎左衛門ハ騎馬ニテ諸陣ヲ巡視ス兵粮亀山ニ在リ中馬ニテ運搬シ忍ノモノ許ク敵方ニ入ル等用意周到ナリ

六月十二日ノ夜更ケ渡ル折リシモ一發ノ狼烟ヲ合図ニ粂井教親ノ七百餘騎桂川ヲ東ニ渡ル江田荒木二隊コレニ續ク敵ハ此處ヲ渡ラセジト拒グ上流ニハ既ニ大軍渡リ河水為ニ堰カレテ下流ノ水涸レ兩軍河中ニ戰フ狼烟復揚ガル仁木足立野原雄井ノ七百餘人筒井ノ本陣ヲ襲ヒ其ノ驚騰ニ乘ジ須知小林南條等ノ三百人喚ト叫ビテ衝キ其ノ中堅ヲ貫キ次ノ陣ナル蜂屋隊ヘ掛カル雜人勢子等合圍ニ應ジ幾百千ノ松明敵軍ノ後方ニ炎々タリ敵軍左顧右眄シテ狼狽スルヤ須知酒井勢瀧川ノ後方ヲ衝ク忍ビノ者亦敵中ニ於テ鯨波ノ聲ヲ揚グ小林小笠原勢荒木村重ノ陣ヲ打ツ敵隊大ニ崩レ後方本陣ニ走ル信孝ノ陣後方ニ在リテ備ヘタルヲ酒井須知小林小笠原ノ勢ヨレニ向フ敵士木造宮内日置大學富田信濃笠寺左兵衛佐久間大六津田與十郎同小藤太岡田助兵衛津川平左衛門等名乘リヲ揚ゲテ進リ戰フ助兵衛ハ酒井重貞ノ郎等蜂伏吉久ニ打タレ大學ハ須知次郎ニ打タレ小藤太ハ須知景久ニ打タレ與十郎ハ館宮太夫ニ打タル　川端ニ

京都府立総合資料館所蔵

於テ瀧川明智荒木ノ三千ヲ籾井江田ト荒木氏綱トニ由リテ打チ押ヘ
紹田澁谷赤井畑ノ軍ハ左方ヨリ平林谷田安井ノ軍ハ右方ヨリ突貫
シ四方八方ヨリ合圍セントスルヤ東軍大ニ崩レ辛フテ東奔ス籾井教
親ノ軍コレヲ逐ヒ明智陣ニ入リ光秀ニ迫ル所ヲ安藤平左衛門宮川
但馬飯沼勘平関小十郎氏家民部不破彦作等返リ戰ヒ敗
井方ノ弓削民部ノ手ヲ敗ル塚本大膳平手監物塙喜太郎
諏訪飛彈武藤惣左衛門左毛三郎左衛門佐藤六郎左衛門
等一組トナリ弓削ノ陣側ヲ衝ク 教親苦戰ス仁木足立雄井
小野原ノ七百餘人籾井勢ヲ助ケントテ馳セ付ケ遂ニ敵ヲ逐
ヒ押ノ明智勢今ハ天ヲ可キ餘力無ク八幡山崎邊ヘ落チ美
濃尾張勢ハ栗田口ニ向テ退却ス伏谷日下部小笠原小林等
追擊シ三條通リヲ東進セントス

十四日ノ曉天ニ屋形ノ名代波多野秀基兵士二千ヲ以テ来リ援ク
籾井ノ兵卒千人八田本梅等ヨリ来ル之レニ秀基ノ兵士ノ半ヲ
加ヘテ追擊隊トシ前隊ト合ヒ東向ス秀基ハ一千ヲ以テ本陣
ヲ桂川ノ東面ニ据ヘ菅盛氏ヲ前衛トシ林氏光ヲ後衛トス
瀧川一益ハ前夜ノ敗走ニ信孝ヲ促シ栗田口ヘ退却ノ途中同
姓武藏ヲシテ伏兵トシ追擊ヲ横擊セシム秀基ノ兵之レガ為ニ
敗ル林氏光之レヲ横擊スレバ丹波衆菅盛氏ニ迫マル畑半之助細
野藤十郎等前進シ將ニ一大苦戰セントス物集女縫殿之助會圖
ノ烽火ヲ揚ケ急ニ瀧川勢ヲ斫ル須知景氏酒井重貞三百人ヲ
以テ驅ケ戰ヒ瀧川隊ヲ殲滅ス津田主水ハ秀基ニ打チ瀧川武
藏ハ須知景鄕ニ打チ蜂屋左近ハ物集女右近ニ打チ殺傷セラ
レ丁無數トナリ瀧川勢ヲ追ヘルモノハ伏見ニ及ビ荒木村重ヲ追ヘルモ

京都府立総合資料館所蔵

ハ竹田ニ至リ勝利ヲ得タルモ天明ニ至リテ敵軍ノ返撃スル所トナリ荒木氏綱寺苦戰シテ退クヲ得タリ此ノ一戰ハ諸家ノ紀傳誇人ニ失シ丹波衆ノ名譽トスルモ其ノ實ナラザルノ辯アレバ之レヲ省ク

信長ハ此等ノ戰報ニ接スル毎ニ光秀ノ輕舉ヲ怒リ（光秀ノ輕舉ナリトアラザルヿハ丹波方ノ有力者ノ味方ニ引キ入レタルニテモ其ノ苦辛ヤ其ノ失策ヲ悔サ更ニ知リ得ベシ南桑田郡ノ部所々參看アルベシ）會議ヲ開キ諸將ノ論スル所ヲモ聞キ木下秀吉ノ意見ヲ吾ス二秀吉ノ言ノ所大ニ采ル可シトテ急ニ命ジテ光秀ノ策應ヲ為サシム其意見ニ曰ハク丹波勢強キハ則強シ然レトモ深謀遠慮ノ人ニ乏シ彼レガ憑依スル所ハ毛利ニアリ而シテ毛利ハ援軍ヲ送ラズト聞ク又大坂本願寺主光佐ハ織田氏ニ不快ノ念ヲ抱ケトモ丹波家ノ倚賴トモ為ラザルモノヽ如シ是レ與シ易キ敵ナリ間諜ヲ放チ内亂ヲ誘起セレバ何程ノヿガ在ラン丹後以西ノ骨從セラレタルモノ皆共ニ波多野ニ向フテ反旗ヲ翻サン云々秀吉内命ヲ受ケ潛ニ但馬丹後ノ間ヲ徘徊シ費用ヲ惜マズ間諜ヲ放チ流言ヲ布カシノ遊説者ヲシテ利害ヲ説キ諸將士ヲシテ心ヲ東方ニ向ハシム此ニ於テ丹後ノ内藤筑後同筑前與謝右京渡邊彈正成合備中熊谷傳左衛門白松左近田邊平左衛門等不平ノ徒ハ宮津城ニ入リテ籠モリ但馬ニ於テハ出石原太左衛門白井備後熊谷越中綿貫兵部飯嶋左衛門白井石見寺井左京香川主馬等山口城ヲ根據トシ面々ノ城砦ヲ嚴守シタリ丹波家ニ於テハ斯カル事情ノ有リトモ知ラズ改メテ美作守宗長ヲ大將トシテ廣澤中務代屋美濃ヲ屋形ノ名代トシ溝谷掃部以下宗徒ノ輩コレニ隨ヒ前隊ハ小野木吉澄谷大膳雲林院式部足立三郎左衛門等大手ニ向フ久下彌次郎佐田五郎左衛門田邊大内藏熊谷隼人葦田四郎左衛門

京都府立総合資料館所蔵

等ハ若狭口ニ向ヒ大館氏忠大嶋民部赤井景遠同景光須賀景氏
同伊豫平林平太夫等ノ兵其ノ後繼トナリ田邊口搦手ノ隊トシ
テ長治名代別所彦之進大將トナリ附キ隨フ面々ニハ櫛橋左京
神吉民部淡河兵部衣笠十郎次郎小寺藤兵衛等トシテ播
州勢コレニ加ハリ惣勢一萬三千餘騎ト注セラレシテ人氣恢復ニコ
レ勤ム斯カル處ヘ與丹波但馬等ニ不穏ノ形狀アリトノ報知日ヲ
逐フテ來ルモノカラ其ノ鎮撫トシテ大將伊豆守秀香ヲ始メトシ
澁谷雅樂櫛田豊前ハ屋形ノ名代トナリ先中酒井左衛門伏淵
右衛門荒木甚右衛門以下宗徒ノ之レニ從フ仁木頼永荻野道
朝足立光永碓井丹後先陣トナリ山名豊恒同次郎江田采女小
林重範同主馬小山小五郎今庄經久等合セテ五千人コレヲ大手
軍ト呼ビ別所長治ノ一隊ハ衣笠豊後宇野能登上月十郎四郎長
井四郎左衛門等ヲ搦手軍ト呼ビ秀香ハ福知山城ニ入リ屋形名代
ハ久下城ニ入リ二番後詰ノ兵等ハ各自々分ノ城砦ニ入リ後令ヲ待
ツ

江州安土城ニ於テハ謀策ノ効果アルヲ認メ卒ヤ一舉ニ之レヲ殲
滅セシメント荒木村重ノ兵一萬五千ヲシテ摂津ニ入ラシメ三
田城ヲ攻略ス城主多田肥後ノ留後伊田綱豊波多野ノ監
使太宰齊之助等強拒堅守ス氷上ヨリ在番衆ノミニテハ心
ナラズトテ澁谷因幡ヲ將トシ千五百人ニ氷上ノ高山寺黨ノ千
人之レニ加ハリ石堂黒岡小林寒川渡邊山内栗栖野今庄
澤田平林長澤德壺ノ士馳セ參シ二千人ヲ增ス三草五箇
所ノ砦ニハ小野原三草黨コレヲ守ル小野原石京ハ甑山在番
ナルヲ以テ村雲ヨリ荒木勢千人入リ守ル更ニ酒井碓井高屋

京都府立総合資料館所蔵

内藤佐野伊丹岩成神池桂ノ兵五百人入リ助ク　敵兵三艘
口ニ迫ル能勢口ヲ塞ク小衛突數回ヲ丹波勢ヲ此所ニ引
キ東面ノ防禦ヲ殺ガシメントノ計策ニシテ明智勢ハ青龍寺
城ヨリ津田七兵衛瀧川一益丹羽長秀長岡忠興ハ西岡ヨリ機
ヲ看テ西進セントス　丹波方ニハ龜山ヲ以テ第一ノ切所防禦
地トシ秀尚之レガ主將トナリ小野原右京平林平太郎紹田三郎兵衛澁
谷左衛門赤井五郎左衛門高屋越後物集女孫右衛門同主膳
寒川左内知足十郎左衛門鷲尾十郎次郎曽地五郎左衛門余
田小次郎位田次郎左衛門山内記内等八上宗徒ノ輩在番トナ
ル　飛報ハ日ニ來リ急騎ハ時ニ到ルモ一報ハ一報ヨリモ凶ナ
リ丹後但馬ノ反徒ハ大抵平ギ首謀者ハ刎首セラレ從フモノハ
寛典ニ處セラレ悉分ヲリ舉軍東歸セントシテ峠亀山細

野等落城ノ報アリ（南北朝田部及ビ亀岡ノ部参看ノコト）三田三草ノ勝報モ今
ハ却テ心痛ノ基トハナリ又ハ上城内ノ會議ヲ聞ク處ヘ秀尚ハ
敗將殘卒ヲ引キ連レ来ルトノ報アリ今後ヒタルカト東向シテ駛
スルモノ數十騎粉井ニ到レバ兵四千餘悉續ク八田城ニ入リ粉井敘
業ニ會シ進退ヲ議ス　飛報アリ敵勢愈加ハリ亀山城ヲ根據ト
シ西南ニ向ハントスト衆以為ヘラク此ノ敗兵縱令ヤ生兵加ハルトモ東
方ノ恢復ハ思ヒモ寄ラズト數千ノ軍兵手ヲ懷ニシテ引キ去リ軍氣
頓ニ挫ク斯カル所ヘ秀香ハ但馬トシテ歸着シ敗軍ノ罪ヲ謝シ再擧
シテ亀山ヲ復シ以テ前敗ヲ雪ガントヒヲ聞カレバ南方ヨリノ變報
アリ曰ハク能勢方面危殆ニ瀕スト其ノ故ハ能勢丹波守久基ノ姪ニ
シテ青野城ニ在ル同苗大學助變心シ東軍ヲ入城セシノ北向軍ノ
根據地トシ野勢口ヲ閉塞セントス云々宗貞コレヲ聞クヤ急ニ旗

京都府立総合資料館所蔵

鼓ヲ進ノテ青野城ニ入リ叛者ヲ戮シ大學助ヲ逐ヒ敵ノ築キタル諸砦ヲ燒燬シ在番衆ヲ入レ守ラシメテ歸ル

織田方ヨリ和議ノ申込ミアリ汗ハ秀吉ノ意見ニシテ第一波多野ト多年相戰フニ於テハ山陽南海九州ニ向テ發展スルヲ得ズ第二丹波士ノ風習根氣強キヿ第三勅命アリテ早ク近畿ヲ靜穩ニスベキヿ等ニテ殆ンド實行セラルベク期待シタルニ此ノ頃ニ至リ毛利家ヨリ共同シテ東軍ニ當ルベシトノ勸告アリ國内ノ議論二派ニ分カレ甲乙相互ニ衝突シタルモ遂ニ毛利家ノ勸誘ニ應シ其ノ戰鬪力ヲ借リ龜山城以下ノ城砦ヲ恢復セント秀尚ヲシテ東面ニ當ラシメ之レニ隨フ面ニハ籾井赤井江田荒木酒井等前敗ヲ償ハント志スモノニシテ疾行急攻龜山ニ迫マリ攻擊頗ル強ク外郭ハ陷リ内城危殆ナラントシタル折柄勅使日野廣幡ノ兩轉奏下降アリテ宣旨ヲ齎ス其ノ詞ニ云ヘリ兩軍速ニ和解シテ宸襟ヲ安ンジ奉レト秀治宗貞コレヲ八田城ニ迎フ信長コレニ添ヘテ申シ越ス旨尤ノ如シ曰ハク當方ト丹波家ト交戰スル次第ハ宿怨アルニ非ズ情況相通セザルノ致ス所ノミ木下秀吉但馬ニ在リテ中國ノ援路ヲ梗塞シタレバモ利ノ未軍望ムベクモアラズ速ニ和議ニ及ビ舊領ヲ保存セヨ因伯作三國モ隨意處分アルベシ和議ノ成ル日ニ於テ龜山城以下諸城砦ハ返附スベシ云々丹波家ニ於テハ敕諚ノ違背ス可ラザルヲ以テ謹ミテ拜承シ和議ニ一決シテ敕使ヲ奉送シ信長ノ使者ヲモ送リ歸フセ七頭七先鋒衆評定衆等鳩首交膝シテ談合ス福知山城主小野木縫殿助山家城主谷大膳亘喬鬼ヶ洞城主雲林院式部國任等ノ論ニ云フ今回幸ニモ先方ヨリノ和議申込アルヲ機トシ時節ノ來ルヲ待タン信長モ丹波方

京都府立総合資料館所蔵

ノ手ニ餘レバ社斯ク和議ニ及ブナレ信長ノ股肱トモ言ハルヽ木下ヨリモ申シ込ムトアレバ尚更ナリ秀吉ハ信義ノ人ナリト聞クエハ後患アリトモ思ハレズ云々園部城主荒木山城守氏綱其ノ説ヲ可トス富田城主山名和泉守豊恒能勢城主能勢丹波守久基等モ之レニ賛同シテ曰ハクモ利家ハ元ノモ利家ニアラズ今ハ憑ムノ甲斐無シ前後數回ノ手合ハセニ東軍ノ侮リヲ受クベキ戰ハセズ東軍モ丹波家ノ手並ヲ知リタレバ社和議スルナレ今和議シタリトテ當方ノ恥辱トハ思ハレズ且又領知ニ聊ノ欠所モ無シトイヘバ誠ニ以テ和睦ノ好機會ナリト　村雲ノ荒木氏好穂壺ノ赤井景遠綾部ノ江田行範高山寺ノ大館氏忠大山ノ長澤義遠澤田ノ小林重範ハ飽ク迄モ弓矢ノ道ヲ汚メマジ義理カヘ立タバ和スルモ可ナリ織田ハ正義ナラザル可ク明智ハ虚偽多シ木下ニモ利ノ援路ヲ絶タレタル

上ノ和睦エレバ吾ガ弱味ヲ見テノ申シ込ミナリ若其ノ議ニ應ゼバ彼レハ吾レヲ以テ臣列ニ加ヘ拭フ可ラザル辱ヲ蒙ラン味方衰ヘタリトハ云ヘ運ヲ天ニ任セ一擧雌雄ヲ決センノミ旗鼓押シ立テ逆寄セレテ畿内ニ入ラバ大阪本願寺ハ俳敵退治ヲ名トシ信長ニ抗スベシ伊丹ノ荒木モ亦起ツベシ古来丹波ノ弓矢ノ道モ茲ニ初メテ立ケ源平以来當國ニ籠モレル祖先ノ意志モ亦立ツナリ新參者ガ秀吉ノ誘ニ應ジタルハ之レヲ捨テ又モ利ノ縁モ是レ迄ナリト見切リヲ著ケ有リ合フ兵ヲ糾セバ以テ恥辱ヲ雪メント一言一語舌頭ニ火花ヲ放ツバカリニテ何日果ツベクモ見エザリケレバ叛旗欲業永ク兼ネ云ヘル樣ハ各方ノ所論ハ實ニ波多野弓矢ノ花トシテ天下ニ誇ル二足リ末代ノ鑑ニコソハ成ルベケレ拙者覺エズ感涙ニ咽ビタリ他國ノ評議沙汰ヲ聞クニ多クハ各自ノ利ニ迷ヒ一身ノ為ヲ考ヘ十

京都府立総合資料館所蔵

人十色ニテ評議ノ纏マリタル例無シト承レリ武士ハ眼ノ据ヱ所ハ只
一ツナレバ多ク異論ノ立ツベキモノナラジ西方先鋒衆及ビ城州小野木等
ノ説ト荒木山城守ノ論ト萬全ノ論ハ殊勝ノ至リニテ候フ兵部大輔殿嘗不氏好
ノ説ハ弓矢ノ正道ニテ利害得失ヲ眼中ニ置カザルハ只管武士ノ
采ルベキ所惡石衛門殿ハ五十年間丹波衆ノ纖ニ鍛フタル所ニ
テ我モ人モ斯ク潔クアラマホシキ心白髮ノ拙老モ年ヲ忘レヲ昔
ニ立チ還リ腕ノ鳴ルヲ覺ユタリモ利ト一致スル説モ一利アリ一害
モアリ信長ト和スル説モ理アリ非理アリ此等諸説ノ内ニ於テ弓
矢ノ正道ヲ見出スヲ得ベケレバ其ノ裁斷一ニ惟カリテ大將軍ノ
胸中ニアルベシトアリケレバ諸將一同期セズシテ秀治ニ面スレバ
秀治モ今ハ默止ス時ナラズ曰ク面々ノ陳述スル所ハ吾ガ家ヲ思ヒ
祖先ヲ懷フ忠孝ニ外ナラズ斯クナル上ハ三子モ亦身ヲ忘レ國ヲ忘レ

只一筋ニ弓矢ノ道ヲ主トスベシ此ノ心ヲ以テ弓矢ヲ取ラバ其ノ上ハ運
命ニ任サンノミ顧フニ吾ガ家ハ近頃ノ合戰ニ一度モ敗レヲ取ラズ目
ニ餘ル大敵ヲ打チ退ケ敵ヲ殺スヿ數知レズ然リト雖國勢今ヤ衰
ヘ能登大學ヲ始メ柴田船井川勝並河西ノ輩ノ不義ニ由リ紹田平
林小野原赤井日下部大江細野等宗徒忠義ノ輩ヲ討ツセ回
復スヿ可ラザル武力ヲ殺ギ遺恨遺ル方無シ朝倉家ノ滅亡モ利家ノ
衰運當家ノ旗下ガ叛心等皆是レ逆運ノ證據ニシテ其ノ前兆ハ
早クモ元就宗高殿逝去ノ時ニ顯ハレタリ斯カル非運ニ向ヒテハ臆怯
未練ナル侍ハ一歩モ進ム能ハズ弓矢ノ正法ヲ取リ失ヒ易シ古來名アル
武士ノ末路ヲ踏ミ違ヘ再度世ニ立ツ能ハザルハ皆此ノ逆運ノ道ヲ踏
ミ締メタ故ナリ面々ノ堅固ナル志ハ流石ニ源平以來弓矢ノ道ヲ正ク
踏ミ古ノクル武士ノ子孫ニ恥ヂズ今更感涙止ノ難シト語聲闇

京都府立総合資料館所蔵

澹泞泗滂沱タラントシ語聲中止シ滿座蕭寂タリ暫クアリテ曰ハク信長トノ和議ハ予ニ深慮アリ今一度毛利ニ通ジテ諾否ヲ決セン其間ニ信長ヨリ面々ニ對シ音信ヲ通スル乎或ハ國人中不良ヲ謀ルモノアラバ前規ニ由リ能ク檢察シ詳細ニ申シ出ヅベシ云々秀吉坐ヲ進ノテ曰ハク運ハ逆ニマレ順ニマレ開カバ開ケ散ラハ散レ汗ハ伊豆ノ自分ノ一ガ知ル所ナラズ弓矢ノ道ニ二筋ハ無シ大將軍ノ仰セハ正ニ此所ニアリ明日ニモアレ信長ト對陣セラルヽニ於テハ此ノ伊豆一番ニ彼ヒガ本陣ニ衝キ入リ信長信忠ト一戰ヲ決セン武運開カバ當家ノ弓矢ヲ天下ニ示サン開カズンバ軍神ト為リ永ク此ノ國ヲ守ラントテ會議ハ果テ三田肥後守氏綱會釋スレバ廣澤中務ハ秀治ニ申シ退席セシメ一同次ヲ逐フテ退出ス　小野木吉澄谷重衛雲林院式部ハ和議ノ主唱者ニシテ秀吉ト協議スル所アリテ各自城守シ復來會セズナリヌ會議ノ席ニハ屋形秀治　大將軍宗貞　左ニ美作守宗長　右ニ遠江守秀尚　伊豆守秀春

一族ニテ　廣瀬中務綱忠　澁谷雅樂頭秀辰　紹田右馬助秀盛　平林右馬助秀宗　澁谷又七郎治氏　伏谷美濃守氏信　澁谷因幡守氏昌　櫛田豊前守利種　波多野瑞次郎秀基　波多野兵部秀忠

八上老臣家ニテ　平林大膳秀衛　澁谷隱岐守同伯耆守氏秀　浸邊大學綱俊

氷上老臣家ニテ　伊田肥後守綱氏　澁谷掃部宗清　同播磨守宗忠　名和又左衛門貞俊

國家衆ニハ　能勢丹波守久基　山名和泉守豊恒　仁木頼永　荒木兵部大輔氏好　粟井越中守敬

京都府立総合資料館所蔵

業　粕井兵庫助敎親　江田兵庫頭行範　大館左
近將監氏忠　赤井惡右衛門尉景意　同次郎左衛
門景光　荒木山城守氏綱　小林修理進重範　久
下越後守重氏　長澤治部大輔義遠　須知主水景
氏　荻野彦六左衛門朝道　内藤備中守顯勝　波
々伯部治部左衛門光政　野尻玄蕃庵長　山内左
衛門　酒井佐渡守重貞　碓井丹後守則近　今左
久兵衛經久　新庄藤内左衛門　畑牛之丞守國
碓井宮内　佐田五郎左衛門　小野原右京勝繁
三草左京
旗頭衆ノ老臣名代家ニテハ　山名ノ老臣石堂全
左入道　能勢ノ老臣　尾林大膳基康　廣澤ノ老
臣廣澤隼人行鄕　平林ノ老臣佐伯八郎兵衛廣康
荒木兵部大輔ノ老臣越智左平太吉道　粕井ノ
老臣弓削式部尚道　江田ノ老臣大井田大膳大
館ノ老臣堀口豐前　赤井ノ老臣穗壺宗運入道
久下ノ老臣久下彌次郎　長澤ノ老臣長澤内記
荒木山城守ノ老臣新庄彌藏　小林ノ老臣黑岡肥
後祐國
以上
會議ハ數次開カレタルモ一致ノ了トテハ無シ
然ル所以ハ第一ニ毛利ト意見ノ合ハザル丁毛
利ハ東方ノ了ヲ波多野トヲ別所トニ委シ領地内ノ
敵者ヲ鎮撫スルニ全力ヲ竭クサント欲スルニア

京都府立総合資料館所蔵

り備前ノ浮田ニ於ケルハ其ノ苦心スル所ノ一ナリ　毛利輝元ノ將畧ナクシテ吉川小早川ニ委任レテ軍令ノ一ナラザルニアリ　毛利方ガ動スレバ丹波衆ヲ下目ニ見レヲ屑トセザル不平ニアリ　元就在世ノ時ノ交誼ハ没却セラレタリ　輝元ノ無智ナル秀治ノ無謀ナル兩家ノ運命年一年危殆ニ赴カントス　而モ焦眉ノ急ナル東軍ニ向フテハ和否ハ決セザル可ラズ　宗貞將軍ニ於テハ尚モ舊誼ヲ憶ヒ毛利家ニ眷戀シテ離レ遺ラズ　毛利ヨリ使者來リ信長軍ト雌雄ヲ決スベシト告ゲ　斯ニ於テカ宗貞モ亦丹波衆ニ告ゲ一時冷却シタルル意ヲ毛利ニ向ケシメント企テ播磨ニ入リ別所長治ト合シテ東軍ニ當リ毛利勢ヲシテ海路矢ヲ進メテ東軍ヲ惱マシメント謀レリ　天正六年正月二十五日廣澤中務綱忠淀谷雅樂助秀辰淀谷伯耆氏秀酒井藤左衛門重好土屋四郎左衛門義興畑牛之丞守國荒木藤内矢衛氏藝谷田左吉氏豊ヲ使者トシテ羽柴別所毛利ノ三家ニ派遣シタリ　斯ク多人數中ヨリ撰定シタル士ハ秘計詭謀ヲ齎シ成果ヲ期シテ丹波ヲ發シタリ

廣澤綱忠淀谷秀辰ハ三家ヘノ正使タリ

淀谷氏秀ハ羽柴ヘノ副使タリ

土屋義興ハ別所ヘノ副使タリ

酒井重好ハ毛利ヘノ副使タリ

京都府立総合資料館所蔵

荒木氏藝谷田氏豊ハ羽柴ヘノ音物使タリ

畑守國ハ毛利ヘノ目代タリ（秀治ノ名代ナリ）

使者ノ一行ハ先ヅ西口守備ノ陣ニ至リ小野木吉澄谷重衛雲林院國任足立光長ニ遭フテ屋形ト將軍トノ旨ヲ傳ヘ云フ樣ハ今度ハ信長ニ合體スベシ然ルニ明智ニハ宿怨アルヲ以テ之ヲ除キ羽柴ニ由リテ和議ノ取扱ヲ爲サン幸ニ足下等ハ秀吉ト交際アレバ取次ヲ爲セ秀吉之ヲ承知セバ我等ハ別所毛利ニ說キ三家一致シテ和議ヲ成就セシメン吾等ハ此ノ大任ヲ委ネラレタルナリト誠シヤカニ叙ベタレバ小野木ト谷ハ使者ノ口ニ載セラレ云フ樣コレ我等ガ度々諫言申シ上ゲタル所ニシテ今コヽニ御象ノ附カレタルハ波多野家繁榮ノ端相大慶至極ナリ羽柴ヘ斡旋ノ役ハ誓ワテ首尾能ク調フベシ我等ハ是トヨリ書寫山ニ赴キ羽柴ヘ内意ヲ通ズベケレバ御使者ハ其ノ上ニテ秀吉ニ面會セラルベシト云ヒ残シ置ヲ馳セテ播磨國飾磨郡書寫山ニ至リ羽柴ヘ此ノ旨ヲ通ズレバ秀吉モ大ニ欣ビテ使者ノ來ルヲ待ツ日ナラズシテ廣澤渋谷等ハ案内者小野木同道ニテ面會ス其ノ口上ニ曰ハク丹波ノ國司波多野秀治并ニ大將家波多野宗貞謹ンデ羽柴筑前守殿ニ申シ上ゲ〻次第ハ秀治宗貞數年信長ニ抗敵スルヿ全ク本意ニアラズ信長公三台ニ登ラセラレシ上ハ直ニ幕

京都府立総合資料館所蔵

下ニ参シ忠節ヲ抽ンズ可キハ豫ネテ希望スル所ナリシニ慮ラズモ丹波守護職ヲ明智日向守殿ニ仰セ付ラレシ趣ニテ日向守殿卒然鋒ヲ差シ向ケラレタル旨武士ノ面目トシテ黙止シ難ク已ムヲ得ズ防禦ニ及ベリ其ノ後和議ニ就キテ信長公ヨリ再ビ懇命ヲ蒙リ羽柴殿ヨリモ屢同情ヲ寄セラレ厚情肝ニ徹スレバ如何ンセン日向殿散々ニ波多野ヲ讒訴セラルヽ由ニテ信長公ノ憤怒容易ナラズト思考シ且祖先以来弓矢一體ノ盟約アル毛利ノ同意セザル為茲萬今日ニ至リタリ然ルニ今回新ニ攝津守護ノ件其ノ他數個條ノ恩命ヲ蒙リ弓矢ノ面目過分ノ光榮トスル所ナリ然カノミナラズ畏キ敕諚ノ前ニハ區々タル私情ヲ挾ムヲ許サズ速ニ信長公ノ軍門ニ降リ東國西國ノ先鋒ヲ承リ永ク軍忠ヲ勵ムベキ覺悟ナリ依リテ曩ニ毛利ヘ使者ヲ遣シ百方利害ヲ說キ和議ヲ勸告シタルニ毛利遂ニ同意ヲ表スルニ至レリ別所ハ波多野ノ差圖次第ニテ左右シ得ベシ日向殿ハ丹波討入リノ先鋒ニシテ事順序ヨリスレバ此ノ儀明智殿ニ謀ルベキナレド數年ノ交戰ニ遺恨深ク今更手ヲ東ネテ憐ミヲ乞フモ心苦シク又明智殿ノ性質トシテ波多野ニ同情ヲ寄セラルヽハ有ル間敷ク羽柴殿ハ智謀絶倫ニシテ胸襟ノ洒落ナル四海ノ武士擧リテ景慕仰シテ措カザル所希クバ

京都府立総合資料館所蔵

高慮ヲ以テ信長公ト君臣ノ義ヲ結ビ驥尾ニ附キ功業ヲ建ツルヲ得バ波多野ノ幸福何モノカ之レニ如カン幸ニ同情ヲ垂レラルヽニ於テハ我等ハ今ヨリ三木及ビ藝州ニ赴キ愈三家同ジク共ニ和議ノ實ヲ擧ゲント言ヘバ荒木氏藝谷田氏豊ハ持チ來レル包ヲ開キ國光作ノ太刀一振黄絹百段白銀百枚ニ目録ヲ添ヘ秀吉ニ贈ル秀吉モ喜ンデ之ヲ受ケ波多野家累代ノ武功ヲ褒メ丹波衆ガ頼朝以來ノ名家ナルヲモ稱ヘ毛利トノ交義ヲモ叙ベ今ハ毛利ト與センヨリハ織田家ニ從ハルベシ從ハレザルニ於テハ其ノ禍量ルベカラズト威シ付ケ明智滝川ヘ心中ヲ初明カサズ此ノ秀吉ニ於テ明カサルヽ事情ヲ聞クカラニハ萬事善キニ取リ計ラフベシ丹後但馬ハ今我ガ手ニ屬セタルモ波多野家ニ返スベシ附イテハ人質ヲ入レラルヽヤト尋ヌ使者ハ疾ク用意シタリト答ヘ會談ヲ了リテ復命ス別所ヘノ使者ハ長治及ビ具ノ臣下ト秘密ノ談合ヲ遂ゲ秀吉ヲ誑カシ一擧ニ東軍ヲ鏖殺スルノ計畫ヲ爲シテ丹波ヘ歸ヘル廣澤以下毛利家ヘ赴クベキ一行ハ三木ヨリ安藝吉田城ニ入リ屋形ト大將軍ヨリノ進物ヲ披露ス太刀一振黄絹五十段馬代一封又別所ヨリモ贈リ物アリテ輝元元春隆景以下列席ノ上ニテ使命ヲ叙シ且軍略ヲ叙シテ曰ハク羽柴ヲ誑カシテ之ヲ山陰山陽ノ間

京都府立総合資料館所蔵

ニ攻ムルニハ毛利家ヨリ大軍ヲ備前播磨ニ出セ
波多野軍ハ信長父子ヲ安土ヘ追撃セシ本願寺荒
木武田上杉ニ隙ヲ合ハセテ織田ヲ亡ボサン信長
ヲ誑カス手段トシテ人質ヲ送ラン
天正六年二月十八日丹波家ノ名代人廣澤中務以
下數人丹波衆ヲ人質トシテ之ヲ護送シ將軍足利
氏ヘノ獻物織田氏ヘノ進物ヲ齎ラセ和議紹介人
ヘノ贈物ヲモ持タセ數千人ノ行列ニテ信長ノ旅
館東福寺ニ入リ謁見ノ式アリ和議ノ盟約アリテ
首尾能ク禮ヲ了セリ　表面ハ丹波家織田氏ノ交
誼成レリト見ルベクモ裏面ハ之ニ反シ丹波家ノ
狡詐ハ信長ノ勘破スル所トナリ軍令狀出デ部署

ハ定マリ明智光秀ハ東面ヨリ羽柴秀吉ハ西面ヨ
リ相應ジテ攻メ込ムヿトナル秀吉西丹波ヘ赴カ
ント欲スルニ三木表ヲ去テ明ケテ丹波ヘ越エン
モ心元無シトヤ思ヒケン舍弟小一郎秀長ヲ大將
トシ脇坂甚内安治中村孫平次一氏糟谷助左衛門
尉加藤孫六等ヲ添ヘテ二千餘人夏ノ外ニ丹波但
馬播磨ノ降人松田攝津守太田垣但馬守小野木雅
樂頭出石源右衛門杉原七郎左衛門尉谷出羽守長
井四郎左衛門尉櫛橋左京亮神吉藤八郎等ヲ先導
トシ總軍三千八百人檢視到着アラバ即時発足セ
シト待ツ間程無ク織田上野介筒井順慶堀久太郎
等着到ス秀長即時出発シ西丹波ニ向フ丹波家ニ

京都府立総合資料館所蔵

於テハ丹後但馬方面ヘ防禦トシテ差シ向ケタル波多野主殿頭宗長ノ旗下長澤内記久下彌五郎等國境處々ニ支ヘタルモ秀長ノ猛威ニ攻メ立ケラレ久下長澤ハ數戰シテ討死ス秀長手合ハセノ軍ニ勝チ勇氣數倍シ破竹ノ勢モテ淺部城ニ向フ波多野宗長ノ嫡男美作守宗貞血氣盛リノ勇將ナレバ敵寄セ来ラバ速ニ追ヒ散ラサンモノヲト逞兵二千餘騎ヲ引率シテ出デ正面ニ敵ヲ引受ケント待チカケタリ秀長コノ由ヲ聞キ遠間モ無ク押シ寄セタリ宗貞待チ遠フシクヤ思ヒケン峠ヲ下リ羽柴ノ先陣ヘ大山ノ崩レヽ如キ勢ニテ真一文字ニ突キ入リ命ヲ限リ狂ヒニ狂フテ闘ヘバ誘

導ノ小野木太田垣神吉等忽ニ四度路ニ突キ崩サレテ引退クスハコソ掛カレト宗貞自身ニ驅ケヽレバ三人ノ者相助ケテ防ギ止メントシテ能ハズ今ハコレマデトヤ思ヒケン鋒ヨリ火花ヲ出ダシ戰ヒケル處ヲ波多野勢ニ取リ圍マレ三人共ニ討タレタリ勝ニ乗リタル丹波勢ハ敵ノ第二陣ヲモ此ノ勢ニテ打チスクメント進ム宗貞踏令シテ進メヤ進メト馬ニ鞭ウツ處ヘ羽柴方ノ旗下ニテモ殊ニ名ヲ得タル加藤孫六腸坂安治糟谷助左衛門蜂須賀小六以下宗徒ノ輩ソノ數大凡三十騎バカリ寄竟ノモノ共磨ヲ并ベテ勝ニノリタル波多野勢ヲ少モ恐レズドットヨメイテ打ッテ懸リ右ニ

京都府立総合資料館所蔵

當りたヲ排ヒ駈ケ立テ〳〵シケルニヨリ波多野ガ勢心ニハヤレドモ先刻ヨリ度々ノ戰ニ疲レシ上デハアリ荒手ノ勇士ニカケ悩マサレ何カハ以テタマルベキ暫時ニ數オ人討タレ手負又多ケレバ便宜ニツレテ敗走ス秀長カクト見ルヨリモ敵ハ色メキ立チタルゾ是幾ヲ操メヤモノ共引イテハ誰ニ面ヲ合ハスベキゾカヽレ〳〵ト勇メシカバ加藤服坂蜂須賀糟谷中村等愈〳〵カヲ得テ透間アラセバ追立〳〵突キ防ギ切リ防ギ働キケレバ宗貞モ乱軍ノ内ニ討タルベク見ヘツレ氏爰ニテ討死其ノ詮アルベカラズ一先引テ又コソ戰ハメト引返スヲ勝誇ツタル勇士ノガスマジト追カケシカドモ日夕陽ニ傾キヌレバ案内知ラヌ土地ノ夜軍ぶモトナシトテ大將コレヲ止メタマヘバ明日コソ城ヲ取ルベケレ夫迄彼等ヲユルスベシト荒言シテ人數ヲ引揚ゲ其夜ハ野陣ヲ張テ終夜燒キツヾケタル篝火ノ影スサマシク勢ヲ示シ明クレバ天正七年五月九日早天ニ八幡山ノ麓ニ押寄セ関ヲ作リ鉄砲ヲ打カケ人數ヲ進ムレバ城ノ大將美作守打出デヽ又一合戰ト思ヘドモ寄手ハ次第ニ勢嵩ミツレバ荒手ノ人數加ハリシナルベシ味方ハ昨日ノ軍ニ疲レ其上手疵一ケ所ニケ所負ハヌモノ無ケレバ勿々此ノ勢バカリニテ籠城セシモ無益ナルベシ切出デヽ敵ヲ追フベキ案カ

京都府立総合資料館所蔵

無ク唯落支度ノミスルゾト見ヘシカバ宗貞カクテハ防戰其カナシ氷上ヘ馳入リテ敵ヲ防グベシトテ引入リケレバ秀長直ニ押寄セ之ヲ攻メントモ思ハレシカドモ波多野數代ノ恩ヲ思フ國人マタ多クシテ一朝一タノコトニハ行クマジト思ヘバ兼ネテ敵前守ノ授ケシ謀ヨリゾト思ヒ出シ先ツ其邊ノ百姓共ヲ呼出シ老若男女ヲ云ハズソレ〳〵ニ金銀錢帛ヲ與ヘ其方共是迄國ニ波多野アルヿヲ知ワテ却テ其方共ノ天子ノ民タルヿヲ知ル者ナカルベシ當キノ軍勢ヲ案内スベシ遠カラズ波多野ヲ亡シ其方共ヲ安樂ニナシテ得サスベシ所當ノ年貢ヲ出シヽ後土地ハ百姓ノモノタルベシト下知セラレ且ツ札ニシルシテ立テラレシカバ百姓等大ニ悦ビテ此ノ大將ニ從ハバ我々安堵ノ基タルベシト古ヲ厭ヒ新ヲ慕フ人情若キ者共ハ一揆ヲ起シ氷上城下ニ押寄セ乱暴シ或ハ寄手ニ加ハリテ案内セバヤト云フモノアリケル程ニ秀長益〻喜ビ便宜ヲ得タリト同月十六日進ミテ萩野城ヲ取圍ム城主萩野彦右衛門尉朝道カヲ盡シ防ギ戰フモ寄手多勢ニシテ入替リ〳〵息ヲモツガズ攻立テケレバ城兵今ハ防ギカネテ見ヘケル處ヘ撿使ノ堀久太郎秀政手勢ヲ勵マシ一番ニ乘リ入ツタリ順慶法印之ヲ見テ堀モ我身モ撿使スルニヨリ軍ノ次第ヲ見物シテ居タリシニ秀政既ニ

京都府立総合資料館所蔵

集リ入ツタリサスレバ果トテモ後ルベキニ非ズ
進メヤ者共攻メヤ壯者共トセリ立テ〳〵攻メケ
レバ筒井ガ勢モハヤ城中ヘ集リ入ツタリ是等ヲ
初トシテ秀長ガ手ノ者共餘々ニ攻メ入リシカバ
彦六左衛門今ハ是迄ナリト多勢ノ中ヘ切ツテ入
リ切リ立〳〵戰ヒシカドモ寄手ハ多勢ナリ終ニ
ハ叶ハズ討タレタリ首ヲバ加藤嘉明ガ手ニ取リ
タリケリ同十九日久下ノ城ヘ押寄スル城主久下
越前守無双ノ勇士ナリシカバ寄手何程大勢ナリ
トモ恐氣ナク居タリケル處ヘ美作守宗貞加勢シ
テ入来アリシカバ久下大ニ喜ビ羽柴勢雲霞ノ如
ク寄来リ當國ノ城共多ク落失セラ今ハ當城ト永

上バカリニナリタリ去ラバ我等ガ運ノ末ト見ヘ
ツルニ花々シキ軍シテ討死セバヤト思フナリイ
ザヤ打出テ一軍シ敵味方ノ目ヲ驚カスベシト
テ五百餘騎西モフラズ打フラ出デ散々ニコソハ
戰ヒケレ寄手大勢ナレバ死武者ニ切立ラユレシ
ドロニコソナリニケレ去レドモ大勢ナレバスキ
間アラセズ様々合フ程ニ久下波多野三百餘騎ニ
打ナサレ手ヲ負ヒシモノ數シレズサテバ城中ヘ
引返ヘシ腹ヲ切ラント馬ヲ立直シ城門ヲ入リケ
ルヲ附入ニセントト攻附ケシカドモ久下取テカヘ
シ防キ戰フ其ノ隙ニ宗貞主從自害シテ失セシカ
バ久下モ同ク腹ヲ切ル久下ノ城落チシカバ寄手

京都府立総合資料館所蔵

直ニ氷上ニ押寄セ使者ヲ城中ニ遣ハシ降参ヲ進メケルニ主殿頭宗長先ツ使者ヲ請ジ入レ御口上ノ旨畏リ入ツリ候何様御陣頭ヘ参上仕ルベク候ヘ共若キモノ既ニ久下ノ城ニ於テ自害シテ候余ヲ惜ム子孫ノ為ニテ候サテバ何ノ為ニ降参シテ餘命ヲ全クスベキヤ使者立返リ此ノ由ヲ秀長ニ申シ玉ヘトテ懇ニ接待シ城門ノ外ヘ送リ出シ其後心静ニ自害シケレバ従臣思ヒ〳〵ニ腹ヲ切リ又ハ差違ヘ〳〵ナシケレバ城ハ遂ニ落チテ西丹波平均ニ治マリタリケリ

六年四月ニ至リ城トナク砦トナク悉ク平ゲラレ東軍ニ後顧ノ憂ナク進ンデ多紀ノ郡ニ入リ先ツ

大蜂ノ城ニ迫ル城将荒木行重嬰守堅カリシモ東軍ニ水路ヲ絶タレテ落城セリ

七年二月羽柴秀長ノ一軍西丹波ヲ侵畧ス久下源太郎内澤内記拒戦スレドカ屈シテ之ニ死ス丹波勢次第ニ萎縮シ宗長及ビ子宗夏八幡山ニ據リ拒戦スレドモ逃セト死傷ト益〻多ク小野木淮桑助神吉藤太夫等戰没ス秀長進ミ八幡山ヲ拔キ國人ヲ募リテ先鋒トシ嚮導トシテ荻野ヲ圍ム荻野道朝禦戰シテ没ス東軍進ンテ久下城ヲ攻ム寺特久下越後守ト援將宗夏ト戰没シ城陷ル秀長乃チ氷上城將ニ勸メ降ラシムレドモ従ハズシテ死ス光秀ノ軍進デハ上ニ迫ル街道ニ當ル城寨本目ノ如キハ

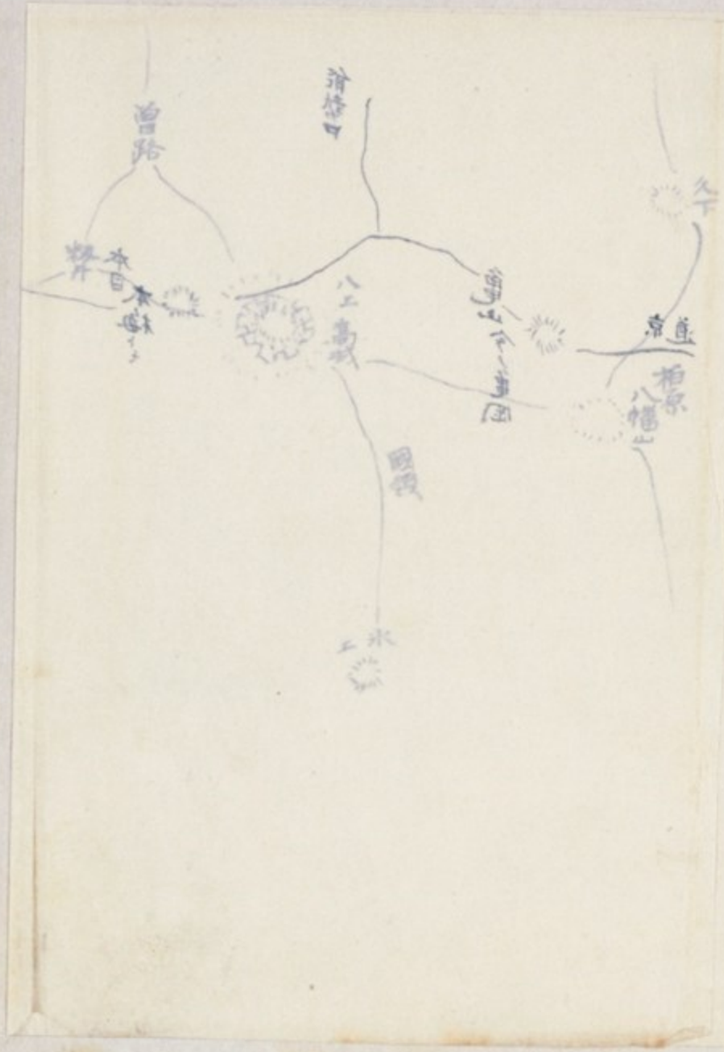
京都府立総合資料館所蔵

皆已ニ陷リ丹羽長秀池田信輝等又能勢口ヨリ入ル虎杖山天王山尼岡山等ノ諸砦ヲ取リ秀長々秀ハ亂旋シ唯〻光秀ノ軍ハ上ニ在リ是ヨリ先キ小野木逢殿助谷大膳ハ反キ西方ノ軍ニ入ル東方ニハ八田叔井ヨリ南方ニ能勢三田陸ノ賴ルベキアリテ窪川口ノ山側ニ糧食ヲ輸送スル宇土酒井渋谷曽路數氏アリ東軍其間ヲ遮リテ陣ス城中ノ勢孤ニシテ人々危惧ス將士之ヲ憂ヒ平林大膳等敵陣ヲ夜襲シ數百ノ首級ヲ得タリ然レドモ城中ニモ亦百餘ノ死傷アリ爾後晝夜鬪數度アリタレドモ寡手砦易ニ勝筭ナシ尚〻高山寺ノ大館江田金谷又ハ岡屋ノ渋谷櫛田叔ハ宮田ノ山名等殘黨ノ起ル

ベキ兆候アルヲ以テ光秀ノ陣ヨリ人數ヲ分ケ夫〻ノ押ヘトナシタレバ本陣差〻手薄トハナリヌ抑〻光秀ノ丹波ヲ攻ムルヤ天正三年正月ニ始マリ七年ニ至リ猶之ヲ平定スル丁能ハズ毎ニ東丹十里ノ間ニ躊躇セリ八上ノ一城ハ其ノ尤難ニズル所タリ今ヤ其ノ陣ノ廣ガリ四方三十里ニ亘ルトハナレリ爰ニ當國返忠ノ者ニ村上並河中川木村人見ナド呼ベルモノ光秀ニ怒計ヲ進ム光秀便〻之ニ軍ヲ借シ深更間道ヲ取リ城ニ入リ一手ハ伏兵トナリ一手ハ粮倉ニ趨キ勢ヲ合セテ燔キ立テ切立テタリ城兵モ亦善ク拒キ殺傷相當ル大手ノ寄手モ鯨波ヲ発シテ攻メ付ケ〻レドモ亦城矢ニ斃

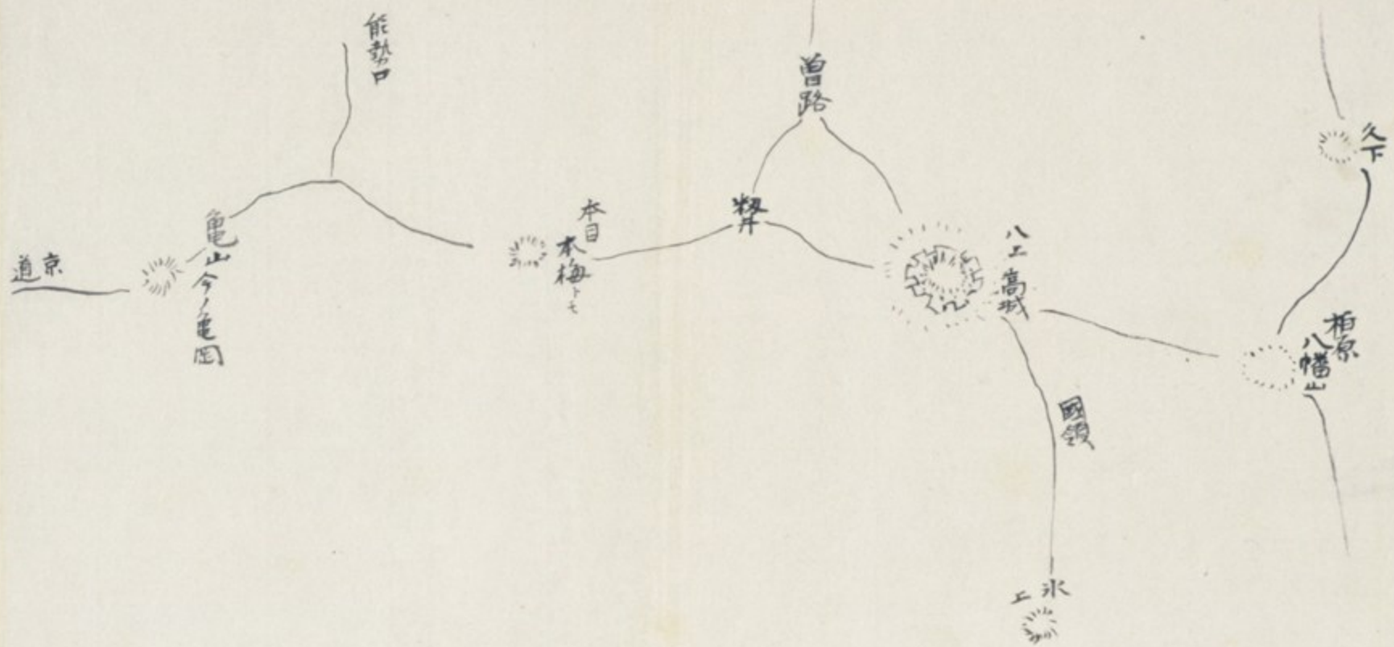
京都府立総合資料館所蔵

退セラル然レドモ城中是ノ時ヨリ糧食ノ乏欲ヲ
訴ヘヌ光秀此ノ機ヲ外サズ一策ヲ案ジ大善院及
ビ西藏坊ヲシテ盟約書ヲ携ヘ城内ニ就キ和議ヲ
講ゼシム降テハ嘉領安堵相違無キ旨ヲ言ハシム
秀治之ヲ信ジ其ノ議ニ從ハントス秀香ハ信ズ可
ラズトシ城中二派ニ分レ將士一致セズ光秀軍
遲引シテ功成ラズバ信長ノ怒ニ觸レント思ヒ急
ニ母ヲ近江ヨリ呼ビ之ヲ人質トシテ城中ニ送リ
以テ信ヲ表ス母氏ト云フハ光安入道宗伯ノ妻ナ
ルヲ以テ光秀ニ於テハ伯父ノ妻ニシテ光秀ノ幼
孤ナルヲ以テ養育セラレタル恩義アリ荒木行室
モ亦聞說ス秀香ノ疑心亦ヤヽ解ク秀治毛利ノ賴



京都府立総合資料館所蔵

孤ナルヲ以テ養育セラレタル恩義アリ荒木行重モ亦関氏ノ秀香ノ疑心亦ヤヽ解ケ秀治毛利ノ頼



京都府立総合資料館所蔵

ミ無キヲ怒ミ東軍ノ言フ所ニ從ヒ秀尚ヲ拉ヘテ光秀ニ會見セント本日ノ要路ニ赴キ秀香其ノ輕率ヲ諫ムレドモ聞カズ時ニ天正七年己卯六月二日ナリ

波多野左衛門大夫秀治同秀尚ハ明智光秀ト相對シテ坐シ對會盟約及ビ式獻ノ禮アリ荒木山城高屋筑後西藏坊等出席シ瀧川一益モ上使ナリトテ出席シ式獻ハ老中ニ迄及ヒテ千秋萬歳ヲ祝ス瀧川曰ハク某ハ信長公ヨリ管領ノ御迎ヒトシテ參候セリ光秀曰ハク將軍今上洛中ナリ早速對面アラレ度候暫時ノ支度ニテ是ヨリ上洛アレト某モ瀧川モ御供仕ルベシ他家ノ人々ノ陣參ノ法ナラバ法

京都府立総合資料館所蔵

躰黒衣ノ御姿ニテモト申ス可キナレド夫程ニ社ハ無カラメ宗徒ノ衆五七人ニテ上洛アレ左無クバ今日ノ御供ノ行列ニテト云ヒケレハ秀治曰ハク管領ガ將軍ヘノ降参ハ別ニ作法コソ候ヘ各達ノ知ル所ニアラズ作法ヲ整ヘテ上洛ハスベシト坐中白ラゲテ見ヘケルヲ西藏坊樣々ニ異見ヲ加ヘ取宥セドモ秀尚其ノ將士斷乎トシテ應セズ坐中愈〻白ラゲ渡リケルヲ

波多野一同退出ト觸レケレバ遂サズ光秀一益令ヲ下シ人々ヲ呼ブ並河掃部開田五郎左衛門四王天又兵衛比田玄蕃進士作左衛門以下ノ士進ミ出デ、曰ハク將軍京都ニ御待チアルニヨリ平ニ御立アルベシトノ語未ダ終ラザル内ニ比田開田ノ二人秀治ノ後ヘ廻ハリケレバ秀治聲ヲ放ツテ已等下人共ト云ヒツヽ拔討ニ玄蕃ノ眉間ヲ斬リ割ル之ヲ見テ開田ハ秀治ニ躍リ掛カリ組付カントスルヲ服ニ居タル渡邊大學綱俊飛懸カリ一討ニ切殺ス進士四王天秀治ニ打ツテ懸カヽルヲ兩人共真甲ニ手ヲ負ヒ遂巡スル刹那秀治ハ小刀ヲ拔キ自ラ腹ヲ刺ス四王天躍リ掛カリテ秀治ノ肩ヲ

京都府立総合資料館所蔵

切ル創深キガ爲ニ斃ル秀尚ヘハ溝尾勝左衛門并河掃部斬斫スルヲ溝尾ハ一擊セラレテ仆ル掃部ハ刀傷ニ仆ル齊藤新八進ミテ秀尚ノ眉間ヲ伐ツ亦斃レテ仆ル掃部持ツ所ノ刀ヲ投ジ秀尚ノ腰ニ中ツ秀尚終ニ其ノ創ニ仆ル斯カル所ヘ伏兵四百餘人斬殺シ來リ六十餘人ノ丹波勢ト格鬪シ東兵ノ斃ルモノ百餘光秀一益西藏坊山城筑後ハ早ク已ニ身ヲ匿スヲ以テ丹波勢ハ是等ノモノヲ探シ出シ君ノ讎ヲ打タント志シ矢猛ニ働ク所ヘ外ニ和ヘタル千餘騎モ騷動ト聞キ入リ來リテ援ケ戰ヒケル所ヲ光秀一益ノ兵共掩ニ來リテ終ニ盡ク波多野勢ヲ殲ス波多野綱兵衛秀則以下將校死スルモノ十數人虜セラルヽモノ十有三人殺傷無筭ナリキ（船井郡本目ノ部ト重複スルモノ多シ）

光秀ハ思フ樣ニ丹波家君臣ヲ誑誘殺禽ハシタルモノヽ義理アル母ヲ歆手ニ委シテアルモノカラ如何ニモシテ奪ヒ還ヘサントテ城兵ヲ利誘シタレドモ應スルモノ無キノミカ之ニ應ヘラ云ヒケラク吾カ主君ヲ還ヘセ扶亦汝ノ母ヲ返サント光秀義母鞠育恩遇ヲ懷ヒ之ヲ歆手ニ委シタルコトノ無念サヒ爲ス所ヲ知テズ急使ヲ發シ安土ニ請フテ曰ハク秀治以下ヲ生還セシメ賜ハザレバ臣オ母ノ命ヲ失ハン柱ゲテ臣ガ請願ヲ容レ玉ヘト無情ノ信長如何ンゾ之ヲ容レン因人ヲ近江ニ護

京都府立総合資料館所蔵

送ス可シトノ命下ル秀治創傷特ニ深ケレバ明智左馬助松田太郎左衛門等ヲシテ輿側ニ侍セシメ勞リ護リテ藥ヲ勧メナドシツヽ道ニ上セケルガ秀治是等ノ人々ニ云ヒケル樣運命盡キテ屍ヲ軍前ニ曝スハ大將ノ法ナレバ敵ニ對シテ何條遺恨ノ之アルベキ然レドモ弟怯ノ謀計モテ人ヲ欺ケル信長光秀等ニハ大遺恨アリ今ニ思ヒ知ラセルゾ三年ハヨモ出デジ此ノ言葉ノ若シ相違セバ秀治ガ弓箭ノ越度タルベシ又加賀源七郎ニ向ヒ汝ハ吾ガ言ヲ秀尚ニ申セ今生ノ望ハ盡キ果テヌレド彼ノ土ニ到リ一家ノ怨靈モテ信長光秀ヲ召取リ思ヒヲ知ラセンズトアリケレバ源七郎畏リ云フ樣

御心易ク御臨終候ヘ頸テ修羅ノ軍門ニ信長光秀ヲ搦メ取リ御前ニ仕侯シ奉ラン今生ニテハ采配ノ御許シハ之無カリシカドモ今ハ御免シヲ蒙リ未來ノ御先驅仕ラント云ヒ了ラヌニ秀治莞爾トシテ息ハ絶ヘヌ織田氏ノ兵之ヲ檢シ屍ヲ荷フテ何レニカ持テ去リヌ東軍進ンデ多紀郡ニ入ル此ノ時城兵猶ホ壁ニ據リ明智ノ兵城外ニ充滿シ八上ノ四邊軍勢ナラザルハ無シ城中主君ノ死ヲ聞キ人氣動搖シテ鼎ノ沸クガ如シ秀香余ジテ人質ヲ殺サシム城矢便ヲ光秀ノ母ヲ縛シ之ヲ城壁ニ懸ケ倒ニ吊シテ外兵ニ示ス光秀慾嘆スレドモ是非ゾ無キ蓋嗟シシツヽ眥ル内ニ城矢大聲ニ罵リテ

京都府立総合資料館所蔵

曰ハク汝ノ人質ハ今之ヲ返ス又ソ来リテ受取レト
輒チ一刀ニ提切リシテ一度ニドット笑ヒタリ光秀
忿炎スレドモ今ハ詮術無ク一手ハ城ヲ攻メシメ
一手ヲシテ其ノ屍ヲ收メシムレバ哀レム可シ上
下両断セラレタリヌ是ニ於テカ光秀ノ心魂一
ハ城矢ヲ前ニ恨ミ一ハ信長ヲ後ニ怒ミ心火炎々
トシテ逆上シ急ニ攻メ撃タシム是ゾ後一年本能
寺ノ挙ノ一大原因トハ知ラレケル城矢卿ヲ人質ニ
隨行シ来トリシ明智左近進士作十郎信樂太九郎
首ヲ刎ネ悠々トシテ差違ヘ〳〵刃ニ斃ルヽモノ
無數ナリ秀香モ差違ヘニ十八將ト共ニ死ス光秀
頸ヲ城ニ入リ苟モ生命アルモノハ之ヲ斬殺シ婦

女小兒ニ及ビ遂ニ犬猫ニ及ビ復遺類無シ而シテ
其ノ憤リヲ漏ラシ其ノ情ヲ慰メタルヅ是非死ケ
レ

勅使アリ安土ニ下リ信長ニ宣スラク再汲家ハ世
々忠ヲ朕ガ家ニ竭セリ宜シク寛大ニ其ノ罪ヲ宥
フセヨ信長之ヲ拜シ之ヲ秀尚ニ傳ヘ降ヲ勸ムレ
ドモ秀尚性剛厲嘗テ人ノ下タルヲ恥ヅ故ヲ以テ
應ゼズ二十五歳ヲ一期トシテ自殺ス或ハ云フ佐
久間信盛命ヲ受ケテ殺ス

秀治ノ辞世　逐中ニテ

うきりけら人ろ閑るよのなかを以でとめ又世ノ後の世をさを

秀尚絶命ノ辞　慈恩寺ノ富所ニテ年二十五　并ニ後世ノ歌

京都府立総合資料館所蔵

今載嚴骨蓮　將開眼三天　おほけなきそらの恵も
長し　そ　爭て忘れ人をい

怨恨ノ情想像ラレテ哀ナリ同十七年六月二日右大臣織田信長其ノ臣明智日向守光秀ニ弑セラル（亀岡ノ部参看）秀治ノ死ニ後ルヽ一四年ニシテ其絶命ノ日ヲ同フス光秀モ亦小栗栖林中竹槍下ノ露ト消エルヿ秀治秀尚辭世ト思ヒ合ハサレテ物凄シ

明智光忠ハ光久ノ子ニシテ光秀ノ從弟ナリ光秀丹波ニ克チ八上城ニ光忠ヲ入レ剃髮シ長閑齋ト號ス光秀反逆ノ際ニ條城ヲ攻ムルニ與リ銃傷シ知恩院ニ療養ス故ヲ以テ山崎ニ會戰セズ又八

上城ヘモ還ラズ光秀ノ敗死ヲ聞キ悔憤シテ曰ハク今ヨリ數日ヲ經ナバ吾ガ創癒エント乃チ光春ト坂本ニ奔ル八上ニ在ルモノ之ヲ聞キ往々遁竄ス前田玄以法印五萬石ニ封ゼラレ此ノ地ニ居ル後年五奉行ノ一トナリ伏見ニ常住ス

山中鹿之助（尼子ノ十勇ノ一）嘗テ云ヘリ丹波ニハ四天王ト二武者アリ畑牛兵衛叔井六左衛門渡邊大助荒木藤内兵衛安口源内兵衛安井外記是レナリ管領家ハ源頼光ノ郎黨ニ一人ヲ增セリト

荒木大藏大輔一家ハ攻多野一門ニテ摂津ニ渡人ス當分池田近傍ニ居ルヿトテ池田勝政ヘ附ケラルヽ旨室町家ヨリ御沙汰アリタルガ西丹波攻

京都府立総合資料館所蔵

戰ノ際歸來シ東軍ト戰ヒ鏖殺セラレタリ

籾井ハ亡國後參河ニ入リ西尾ニ住シ改姓シテ西尾トナリ美濃ヘ移リ秀吉ニ事ヘ關原役ニハ東軍トナリ功ヲ立テ大名トナル西尾豐後守光教コレナリ

朝路山　朝路ノ里　八上高城

朝路山ハ八上々村ニアリ今ノ八上々村ハ昔ノ朝路里ニテ繁華ヲ歌ヒシ所ナリ山ハ芙蓉ノ形ヲナシ數里ノ外ヨリ望ムベク山脈東ト南ニ駢セ多紀ノ郡ト攝津ナル有馬郡ト界ヲ爲ス山ノ高サハ百一間大手ハ南表ヨリ斜ニ登ル羊腸ノ下ニ濠アリ本丸ハ山ノ頂東西四十間アリ南北ハ僅ニ八間ソ

經臺　奥谷（次ニ出ダス）ヨリ此所ニ城キ居ル

コニ又一丈下リテ岡山丸四方各十三間コレト並ンデ二ノ丸アリ東西八間南北ハ十有三間ソノ外ニ奥谷ニアル三ノ丸坂ノ尾筋ニ築キタル跡ハ東西六間ニ南北十又二間アリ本丸ヨリハ一丈餘下リタル所ノ右衛門丸東ト西ハ二十間南ト北ガ十二間乾ノ方ヲ十四間下リタル所ハ上ノ茶屋丸ハ東西八間ト南北四間又下リル十七間ノ所ニハ下ノ茶屋丸東西ハ八間南北四間アリ南ヘ下リテ藏屋敷南北四間東西ハ十二間ナリ元ヘ戻リテ本丸ノ南三十餘間ノ地茶畑アリテ三町歩コレヲ波多野秀忠ガ今ヨリ三百餘年前地ノ利ト人ノ和トニ由リ築キ成シタル高城ニテ兵糧納ル、藏屋敷用水池

京都府立総合資料館所蔵

ハ淺路井戸廣サハ四間ト三間ニテ深サハ測ルヿ
難ク如何ナル旱魃年ヨリトモ涸ルヽヿナキ湧清
水東ノ方ナル苅丸苅惡右衛門ノ屋敷跡ソノ傍ノ
調馬場長サハ二町幅二間西藏坊丸何々丸守將ノ
住ミタル舊キ迹一々數フル遑無シ山ノ尾傳フテ
搦手ノ路ハ後川ヘ降ルベク摂津ノ柏原大ツノ瀬
ヤ池田ヘ渡ル間道アリ西ヘ辿レバ永澤寺小松高
平母子ヘモ通フ蹊モ具リテ攻ムルニ難ク守ルニ
ハ易キ地ノ理ハ波多野家ノ礎トナリ氷上ナル波
多野ト本末相和シテ百年間ノ命脈ヲ繫ギシ跡ハ
コヽニ殘リヌ

歴史概見　大永六年波多野備前守植通ガ細川高

國ノ專權ヲ怒ムヤ當城ニ立テ籠リ室町ニ出仕セ
ズ高國ヨリ使者ヲ以テ促セドモ應セズ高國怒リ
テ退治ノ軍令ヲ発シ同年十一月細川右馬頭伊賢
ヲ大將トシ池田彈正長塩民部少輔奈良修理助藥
師寺九郎左衛門尉同與二波々伯部兵庫以下高國
馬廻リ八十餘騎歩卒引連レ馳セ下リ攻メ立テケ
ルガ神尾寺ノ寄手後巻ノ軍ニ敗走スト聞キテ過
半京都ヘ引上ル故京方敗軍ナリ當城ヲ引取リケ
ル植通ノ子與兵衛晴通居守シタルガ天文二十一
年四月三好長慶五千餘騎ニテ來リ攻ム苅川孫十
郎池田出羽守等細川晴元ニ内通シ長慶ヲ討タン
ト謀リケルニヅ有馬源次郎コレヲ聞キ告ゲ知ラ

京都府立総合資料館所蔵

セケレバ長慶ハ當城ヲ卷キホグシテ有馬郡ヘ引取ケル二十二年九月松永甚助等來リ攻ム與兵衛城ヲ出デヽ奮ヒ戰ヒケルガ晴元ヨリ香西越後守元成三好右衛門太夫政勝ヲ加勢トシテ差シ越シヽカバ甚助打チ負ケテ八木城ヘ逃ゲ入リヲ弘治元年九月三好日向守政康來リ攻ム晴元ヨリ又加勢シケレバ政康攻ムルヿ叶ハズ引返シケル其後松永彈正少弼遂ニ之ヲ攻メ取ル彈正ガ甥ナル松永孫六籠モリ居ルヲ永禄九年二月波多野與兵衛尉此ノ城ハ吾ガ家代々ノ城ナリ取リ返スベシトテ數日攻メケレドモ落チズ然ルニ寄手案内ヲ知リテ水ノ手ヲ取ケレバ松永難儀ニ及ブヲ三木ノ別所ハ寄手ノ方ヘ寝ヲ入レテ和談シ城ヲ敵方ヘ明ケ渡ス天正六年三月惟任日向守取卷キ攻ム別項ニ詳ニス

月ヲ惜ムよりくれぬ立更の鐘乃影氷る　五晴

攻むゝ移ゝ菩ゝ扨くるゝ埜の家苫ゝ　栗子

西禁ニ奥谷ノ堀アリ波多野氏ノ末盛シナラザル當時經基コヽニ築キ基ヲ作ル此ノ處ニ小城塞謂ハユル樓上ナルモノヲ築キ居住セリ其ノ強大ナルニ及ンデ本城ヲ造營シ以テ本據ノ地トシ東征西伐シテ遂ニ全國ヲ風靡シタル基礎タリ

曾地ハ昔ノ蘇賀岐ニヤ安閑天皇ノ二年五月ニ蘇賀岐ノ屯倉ヲ丹波ニ置クトアリ屯倉ハ米藏ナリ」

京都府立総合資料館所蔵

福井谷ノ塚穴　長サ二十四間横一間高サ同ジク一間或ハ八尺ノ所アリ口徑ハ小ニシテ僅ニ二人ヲ并進セシムルニ過ギズ而シテ内部ハ數人ヲ容ル周圍上部共ニ巨岩ニシテ古人ノ手工ヨリ成ルヲ知ル水田コレヲ環リ小逕ヲ通ズ大古穴居ノ遺蹟トノ説アレドモ雷斧雷匙石鏃石槍類ノ一品モ出デタルヲ聞カズ

奥村ニ内藤道勝ノ舘址アリタルモ今ハ掘リ起コサレテ耕地タリ傳フル所ニ由レバ摂津守從五位上内藤判官根乙麻呂ノ曾孫藤原藤岑此ノ地ニ來リ住ス道勝ハ其ノ裔ナリ足利尊氏京師ニ敗レ來リ寓ス道勝ハ先代ヨリ室町家ノ被害ナルヲ以テ善ク之ヲ寓ス謂ハ所ル將軍尊氏丹波落ノ條ナリ

左ニ其ノ原文ヲ抄錄ス曰ハク

將軍ハ其ノ日丹波ノ篠村ヲ通リ曽地乃田原ニ[illegible]ノ道路ノ傍ラ結ヒ給ヒたりけるハ四國西国の勢ハ山崎を過ぎ若川ヲぞ渡りよりる紀子之助ハ内を經て[illegible]ばば討たれたるとぞもいきてぞあらんと憑ミ生きたるとをも討たれ死しつらんと悪むされと將軍ハ西ーく別ヲあく尾宅（今ハ南桑田郡の篠岡町ノ内）を過ぎ給ひたるに[illegible]あり[illegible]ば兵庫湊川ニ落ち集りたる勢の中より丹波ノ兵卿を[illegible]為ぎ摂津へ赴し候く

京都府立総合資料館所蔵

勢を集めて攻て京都へ攻上りけると申し者
九月二日に所冥多地をとり桜ほうくを越え
たりけるに　柳共と攻メ落トサレタル時ノ
道勝ノ子季継常ニ足利氏ノ軍ニアリ尊氏之ニ船
井菜田二郡ヲ與フ足利ノ衰世波多野氏興コルニ
及ビ道勝ノ後裔ナル顕勝曾地ヲ以テ之ニ屬シ天
正七年波多野ト共ニ亡ブ其ノ分末ノ家ハ此所復
所ニ遺留スト云フ
農業出精者　與村百姓　五郎左衛門　五十九年
天明八年幕府ノ褒美ヲ受ク
同　十兵衛　五十一年　右ニ同ジ
産物中茶多シ土人曰フ此所ノ茶ハ如何ナル水ニ

モ合ハザルナキヲ以テ特品トス
野々垣ハ八上ノ東南ニアリ野々垣黨ノ根源地ナ
リ此ノ黨世々弓取ノ家トテ室町家既近ノ者ナリ
前示山伏豪譽豪瑜亦同ジ系統ナリ此ノ邊ニハ室
町家ノ御家人ナルモノ多カリキ
六本柳　曾地與村ノ道側ナル上宿ト新村トノ間
ナル篠山川原ニ六株ノ古柳アリシガ一枯一榮シ
テ今ヤ一株ヲ存スルノミ明治初年ニハ枯柳生株
相半シタルニ漸次枯死ス一株ノ洞トナレル中ニ
小祠アリコレハ渡邊綱ガ植ラタル杖ト云フ相
傳ノ源頼光ガ大江山ノ兇賊退治ニ付キ其ノ領地
ナル攝津多田ヨリ途ヲ此處ニ取リ此ノ原ニ憩ヒ

京都府立総合資料館所蔵

飯ニ其ノ用ニタル箸ヲ土ニ差シタルガ頭ヲ芽ヲ
出シ葉エタルモノ幾抱ニモナリ幾百年ニモ及ベ
リト云フ酒毒宿醒其ノ他酒ニ對スル患者ハ此ノ
木ノ皮ヲ煎ジ飲用スレバ即效アリ蓋酒顛童子ヲ
制服シタルヨリノ獻勝手　今上天皇御即位御大
禮紀念トシテ新ニ五株ヲ栽エ昔ノ六本柳トハナ
シヌ

矯十郎ケ嶽ハ畑市村ニ聳チ四十九院ハハ字トナ
リテ残ルノミ本堂ノ名モアリ穴ノ丸ノ岩窟アリ
充ゲテ高ヒ十八尺アリトゾ内ニ一畳ヲ敷クベシ
四十九坂ノ坂路モアリ

居石　童石　毘沙門天ノ岩窟　寞無櫻等アリ

居石ハ辻村大谷ニアリ　童石ハ童畳ス二間半四
方アリ櫻ハ根元ニテ周リ一丈六尺アリ

淀山城址　辻村ノ北方ニ此ノ城址アリ元弘年間
ニ邑豪波々伯部爲光ノ城ク所ニシテ高路二十町
絶頂ニ石碑アリ波部氏コレヲ祭祀ス　足利高氏
後ニ尊氏トス ノ義兵ヲ起コスヤ爲光矣ヲ

京都府立総合資料館所蔵

京都府立総合資料館所蔵

京都府立総合資料館所蔵

舉ゲテ東シ夏ノ麾下ニ入リ後ヲテ大波羅ヲ攻メ功アリ爾来無二ノ味方トナリ賞賜數多ナリ足利義晴ノ京ヲ出デ奔ルヤ爲光七世ノ孫貞盛扶ケ迎ヘテ此所ニ奉シ彌十郎嶽ノ北禁ヲ相シ城砦ヲ造ルヿ數所コヽニ同族ヲ集メテ守護シタリ其ノ子光政ハ波多野氏ニ屬シ東軍ニ抗戰々死セリ

産物漆器ハ明治二十年後ノ新工ニ係ル而後年ヲ逐フテ盛ニ一戸ヨリシテ二戸三戸今ヤ十數戸ニ十九年然レ𪜈民家ノ日用器什ニシテ美術ノ域ヨリハ遠距離ニアリ　延喜式丹波ノ貢品中ニ漆ノ目ハアレドモ塗物トテハ無シ當國ノ騷工ハ此所ヲ以テ滋鯔トスベキ歟海外輸出ノ路モ開ケタリ

京都府立総合資料館所蔵

八上新村　字宮裏　五十、宮八幡神社ニ國寶アリ」

奥村字堂ヶ谷ニ銅脈アリ舊坑存ス

中村字四十九ニ産物滿俊アリ

京都府立総合資料館所蔵

京都府立総合資料館所蔵

京都府立総合資料館所蔵